

新しい家庭科

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

we

ウ イ

We のルネッサンス



1988 1

四季のうた



七草

きり絵と文 金子静枝

お正月料理に飽きたころ食べる七草粥。
白粥に浮かぶ若い緑がさわやかで、昔の
人の食生活の知恵に感心させられる。



生きる

羽 生 槇 子

わたしの人生には

わたしの中にもう一人のわたしがいて

その人がときどきわたしに短い言葉を言う

その人が 最もたびたび

ほとんど日常茶飯的に言う言葉が一つある

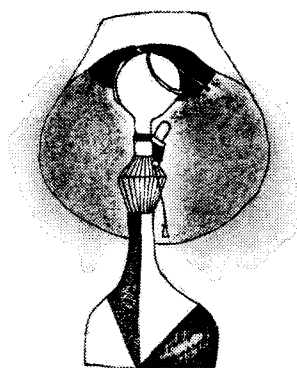
「泣かないで」と言う

新しい家庭科を
創るために

小学校では	洗濯と物質としての繊維	比留間裕人	41
中学校では	男女平等教育の柱としての家庭科	香川 敦子	47
高等学校では	食べる「感覚」と食生活のあり方	梶原 公子	52
〈若い広場〉	『家庭科新時代』を読んで	淡路 香・高岡 保恵	57

特 集

現代文明の終焉	吉武 輝子	4
人、そのアイデンティティ	柴田 郁夫	8
うちななるうながしの声	岩田 澄江	12
コミュニケーションの美学	加藤春恵子	16
暮らしの美―「文様」を取材して	越村佳代子	20
夢といきが	多田 秀実	24
清少納言が今を生きれば	吉村 光男	28
政治を手づくり	三井マリ子	32
多様化する家族	善積 京子	36



連 載

四季のうた	七章	金子 静枝	1
巻頭詩	生きる	羽生 櫨子	1
教育のなかの心理学	「学習」まなぶということ(4)	小沢 牧子	60
いま中学校で	地球市民として	仲野 暢子	62
はなにつき	わかな 百人一首	藤尾 知子	64
✓ダブル・ポケット	ローラとハリーの 場合 その2	國信 潤子	65
読書つれづれ草	ぼくのソーニャ (3)	武田 秀夫	74
ワンポイント	東京女子大学の創設	秋枝 蕭子	76
知らないことを知りたくて (9)		蓮池 悦子	77
Weの相談室	もつとハッピーな生活がしたい 回答	児玉 澄子	78
KNOW-TOWN	新米教師の軌跡 その4	湯沢 静江	79
経済の目	転換期にある職場	福島 澄香	80
政治の目	西暦二〇〇〇年の北京オリンピック	湯川憲比古	81
ひよっこクラブの	しろくまちゃんのホットケーキ	佐多 和子	82
コックさん	キャンサー	大西麻里子	83
日本その日その日			

○アンケート結果報告	84
○波 Weのルネッサンス	半田たつ子 86
○ひと 湯川憲比古さん	46

表紙デザイン 加藤由美子
目次イラスト 馬場洋子
本文イラスト 編集部

○あんでな	94	○十字路	93
○泉	92	○“We” EDITOR'S NOTE	96

現代文明の終焉

吉 武 輝 子



最近、世期末派の巨匠とうたわれたウイーンの画家クリムトの絵が、若者たちの間で人気を拍していきます。わたくしが、クリムトの絵をまのあたりにしたのは五年前、「クリムトと世期末派の人々」と銘うった絵画展のことでした。わたくしは、彼の代表作「ダナエ」の前に立ったとき、ただ、ただ啞然としてしまいました。「ダナエ」はまるで胎児のように裸身を二つに折りまげた女人の姿を描いたものですが、誇張されたあらわな大股とピンクの色をさした乳房、意味あり気に太股の奥にさしこまれた手、裸の肩を覆いかくすように妙に官能的にしどけなく乱れた赤い毛、女の寝姿のまろやかな曲線をより強調するようなピカピカの金粉……どれひとつとりあげても、エロティシズムの対象物化されきってしまった肉体のよそよしさ

に、グロテスクな思いを抱いて、当然でした。これまで、いくたの男性画家があまたの女人像を描きましたが、いくら名画といわれても、一目見た瞬間、生理的嫌悪をもよおすことの多かつたわたくしが、何故か「ダナエ」は、単純に嫌いというわけにはいかなかったのです。多分、好悪だけでははかりきれぬ、気になる点を多々もった絵であることを直感したからでしょう。何故なのだろうと、頭の中にクエンチヨンマークが浮かぶと、その何故を執拗につきとめずにはおられないのがわたくしの生きぐせのようなもの。早速、額装した「ダナエ」の複製を書斎にかざり、折あるごとに眺めつづけているうちに、なんと不思議なことに、官能的とも、きらびやかすぎるとも思えたこの絵の背後に、形容しがたいものの悲しさ、うら悲しさを見出すようになっていったのです。よくよく見れば、裸婦の顔には、悲

しみと苦渋がみちみちてさえたではありませんか。

一八六二年に生まれ一九一八年に没したクリムトは、十九世紀末を生きた画家でした。天才は往々にして未来を予見する能力、予知能力にめぐまれていると言われていますが、彼クリムトも、自然崇拜から科学信奉への急速な推移の中で、二十世紀を生きる人々の精神の荒廃ぶりを予見していたのではないのでしょうか。デフォルメ化された女の肉体を、金ピカピカで塗りこめるクリムトの独特な手法は、ルネッサンスが代表する人間讃歌の思想をあらたなる世紀の人々に伝え残したい祈りの中で生まれたものであったにちがいありません。

あるいは、絵画の専門家たちから、シロウトの深読みのそしりを受けるかも知れませんが、自然を科学でねじ伏せようと躍起になり、逆にそのおごりのしつぽ返しを受けて戦々競々として生きている世期末の人間のひとりとして、悲しみと苦渋にみちみちた裸婦の表情に、わが思いを重ねずにはいられないのです。生きる先の長い若ものたちは、本能的に自分たちの暗うつたる未来を予知し、クリムトのメッセージに共感の念を抱きはじめているのでしょうか。

科学信奉の現代文明の最大の産物は、核とエイズといつても過言ではないと思います。

核は、人間が科学の粋をこらして、意識的につくり出した

ものであるのにくらべ、エイズは、科学信奉の予期せぬ誤算として生じたものであるという質的な違いはあるにしても、いづれも科学をもって自然を征服するという力学肯定の現代文明が生み出した鬼つ子である点において、根はひとつといつていいのではないのでしょうか。

わたくしたちは現在、核の脅威にさらされながら生きていますが、さらに、十八世紀にヨーロッパの人々がペストで大量死をとげたように、二十一世紀は、エイズによって人類が破滅するかも知れぬというあらたな危機的状況に身を置く破目に立ち至ってしまいました。

アメリカでエイズが特定されたのは一九八一年六月、その五年後の一九八六年の六月までには、アメリカのエイズ患者の死亡者は一人に達し、さらに五年後の一九九一年までには十万人に達するだろうと予測されています。エイズウイルスは、十万個つなげてやっと肉眼で見えるほどの超微生物ですが、その生命力と毒性は信じがたいほどの強さをもち、いったん血液の中にまぎれこんでしまわれると、これまで人間が考えつくり出した薬ぐらいでは、死滅させることはできません。あらゆる病原体の攻撃から身を守る免疫機構に對して、先制攻撃でこれを破壊し、さまざまな他の病原体を仲間引きこみ、それらの病原体が狂暴に暴れまわることのできる場を与え、ついには死に至らしめる恐るべき先達役を、エ

イズウイルスははたしています。今や、アメリカではエイズウイルスは、個人の生命ばかりではなく、国家をもおびやかす存在となえてしましました。

性差別を起点とした核や戦争など、あらゆる暴力を根絶するために活動しているアメリカのフェミニスト、ミズ・ジュディが、「わたしたちがなんとか阻止しようとしている、力には力のシンボルであるレーガンのIDU計画（宇宙戦略計画）は、皮肉なことに力ですべてを押しきろうとする科学信奉の現代文明の鬼子エイズの出現のおかげで、とりやめにせざるをえなくなりました。だがアメリカの人々にとっては、一層の死の脅威をかかえこまされてしまった。力学肯定の文明は、人類に幸せをもたらすのではなく、死滅に迫りやることになるというわたしたちの主張が、こんなにまで残酷に証明されるなんて、皮肉というより悲劇というほかない。エイズはまさに現代文明への警鐘、いや挑戦。力で制しようとするれば必ず倍加する力をもって押し返される。はてしない核競争の図式が、そっくりそのまま、微生物界におきかえられたとみてくれれば、わたくしの言わんとすることを理解していただけたと思う」と手紙で書き送ってきたのはつい先頃のことです。

エイズを現代文明の警鐘というよりも挑戦とみなしているのは、アメリカのフェミニストだけではありません。八月に

わたくしは、リタイアメント後のライフスタイルを取材するために、イギリス、フランス、西ドイツの三ヶ国を旅してきましたが、フランスのパスツール研究所に勤務しているフェミニストのフランソワーズからも同様の主張を聞かされたのでした。世界の国々に先がけて、エイズウイルスの研究に着手したのがパスツール研究所です。フランソワーズもメンバーの一人であるだけに、エイズの背景を的確にとらえることができるでしょう。

「戦争よ、まさに戦争よ。人間対細菌の戦争よ。わたしも科学者の一人だから、科学は人類の最大の力だと信じこまされてきたわ。科学の力を借りれば、いかなる細菌も死滅させると本気になって信じてもいた。ところがそうではなかった。たしかに、人類に多大な死をもたらしたコレラも天然痘も、モロモロの病原体も一時は敗退し、一見死滅したかのようになえたわ。でも、彼らたちの中には、死んだふりをしながら、頑強に生き残るだけの旺盛な生命力を持つものがいたのね。生き残りつづけた病原体は息をひそめながら、人為的な抗体に打ちかつだけの力を徐々にたくわえていった。エイズウイルスは、あらゆる病原体の総指揮者よ。今こそ反撃のチャンスと、エイズウイルスの命令一下、猛然と人類におそいかかってきたのね。天然痘やコレラの病原体だって活動しはじめている。

人類は、科学という兵器で先に戦いをいどんだ。何事も力をもってねじ伏せることができると思ひこんでね。でもねじ伏せられまいと相手が何十倍の力で反撃を加えてきて、こちらの力を凌駕しているのだから、完全にギブアップ。万が一にもね。病原体をねじ伏せる方法がみつかったとしてもね。又いつかは向うが倍加する力で反撃の拳にでるだろうことは間違いないわ。核競争を終結させるためには核廃絶しかない、とすると病原体の根絶も、科学の力をカサにきるのではなく、自然と人類の共存の道をあらたにつくり出さなければならぬのかも知れない。ことにエイズウイルスは、売買春や強姦といった暴力的な性行為をつくり出しているこれまでの性意識を改めるとか、あるいは、ピルや輸血のような度をこした生命に対する科学の介入を止めるとか、ともかく、力学を肯定しがちな現代文明を徹底的に問い直すことが先決問題だとわたしは思っているの。

これまでのように男だけが文明の担い手になっていては、人類対病原体の戦争に終止符を打つことはできない。これだけは間違いない事実よ。だって彼らは、何世紀にもわたって、性の違いを優劣にとらえる習慣が身についてしまっているのですもの。だからどうしても、ものごとを優位・劣位という力関係でとらえてしまうのよね。その最たるものが科学信奉の現代文明なのではないのかしら。世紀末にエイズウイ

ルスが登場したことのイミを、女たちが、しっかりとらえなくては」

ひびきのよい声で、一時間以上語りつづけたフランソワーズのことは、今もわたくしの耳の奥底に残りつづけています。

日本においてもエイズウイルスは、深刻な展開を見せはじめてきました。輸入血液凝固因子製剤でエイズに感染した夫から二次感染した母親から生れた赤ちゃんが胎内感染したという疑いが強いことが、つい先頃、明らかにされたばかりです。厚生省では十八日、HIV（エイズウイルス）母子垂直感染予防対策委員会を発足、産婦人科医やエイズウイルスの専門家八人が女性感染者の妊娠・出産・育児の問題についての対策を検討することとなりました。男一色といっているこの対策検討委員会、ひよっとしたら、かつて、女たちが大反対した羊水チェックを再び浮上させるのではないでしようか。優生保護法の「改正」へとエスカレートさせぬためにも、日本の女たちもエイズウイルスを現代文明の警鐘、挑戦と受け止め、自らの生と性を問い直すことこそ急務なのではないでしようか。

そんなことで、ますます「ダナエ」にわが心をそわせはじめています。

人、そのアイデンティティ

柴田郁夫



■クレヨンハウスの「ケーキおばさん」

東京の表参道にある「クレヨンハウス」は、日本で初めての絵本の専門店である。その地下の吹抜け広場に面した喫茶店には、「ケーキおばさん」と呼ばれるパートタイムで働く主婦たちがいる。

「ケーキおばさん」とは、この「クレヨンハウス」を主宰する落合恵子氏の発案になるもの。絵本『おばさんのごちそう』（五味太郎著・絵本館）にヒントをえたアイデアだというが、その絵本のなかに登場するのは、近くの子供たちにごちそうを振舞うケーキづくりのうまいおばさんの話である。ちょうどそのおばさんのように、ここでは一般の主婦が「ケーキおばさん」として、クレヨンハウスを訪れるお客たちに自慢のケ

ーキを振舞っているのである。喫茶店の客席からは「ケーキおばさん」たちが立ち働く厨房が覗けるようになっていく。誰もがいきいきと元気に、自らのオリジナルのケーキづくりに精を出している様子をうかがうことができるのである。

現在、働く主婦の姿はごく普通のものとなった。結婚後も会社を退職しない女性も多い。主婦たちが近くのスーパーや弁当屋にパートにでているのが至極あたりまえの風景になっている。そうした状況のなかで、なぜ一つのパートタイムジョブにしか過ぎない「ケーキおばさん」の話をしたかといえば、実はこの「ケーキおばさん」を一般の主婦から募集するにあたっては、その定員の二十倍近い数百人の応募があったと聞きいささか驚いたからである。

派手な募集活動もしなかったという。しかしフタを開けてみると、スタッフの誰もが予想もしなかったような反響があ

り、二十代から六十代までの主婦たちが、主に口コミ情報だけで「ケーキおばさん」を志願してきた。もちろん表参道というファッショナブルな街のイメージもあったろう。日本初の絵本のお店という要素も関係したであろう。だが、そこには何か他の要因があったと思われる。「ケーキおばさん」に志願するという行動を起こさせる、「この仕事はただのパートとは違う。どうしても応募したい」と主婦たちに思わせたものとはいったい何だったのであろう。

ケーキづくりとは、きくところによると非常に高度なテクニクとまた繊細な芸術性が要求されるものなのだという。何年も何年も自分なりの試行錯誤を重ねてやっとな、ある域にまで達することができるともきく。だが、それもいってみれば趣味の領域のこと。夫や子供や親戚縁者に自信作を配っても、もちろん感謝はされるが、はたしてその「おいしい」の一言がお世辞なのか、本音なのか。どこかで自らの磨いた腕を試してみたい。多くの人たちに食べてもらいたい。そんな思いを抱いていた主婦たちが、実は大変な数にのぼっていたのではないか。そのことに思い至ると、二十倍の応募倍率も合点がいくように感じられてくる。

■自分自身を表現し「シェアー」したいという思い

以上の話を少し一般化するとどうなるだろう。まず現在の

日本には、ケーキづくりということだけに限らず、何らかのすばらしい才能や技量を持った主婦が数多く存在すること。また、そうしたものを狭い家庭のなかだけにしまっていることに對して、潜在的な不満やある種のいらだちを感じている者が多いのではないということ。そんな点が指摘できよう。

たんにスーパーでレジをたたいたり、仕出し弁当をつめたりといった単純な作業ではなく、自分の得意な、また少しは自信をもっている分野を通して、それがお金にもなっている。あるいはお金にならなくても、そうした自分の持っているものをもつと他の人たちにわかってもらいたい。自分を表現したい。そんな願いを持っている主婦は多いのではないだろうか。

「シェアー (share)」という言葉がある。これは市場占有率といった意味に用いられることが多いが、本来「分かち合う」という意味をもった言葉である。自分の持っているものを何らかの形で外に出すことによって、自分自身を他の人と分かち合いたい。主婦層の中に広く存在する願望とは、実は自らを「シェアー」したいという願いであるともいえよう。

そして、そうした各人の思いは、何かのきっかけがあれば、どっと溢れ出し、開花するといった性質のものであるように思われる。

ある報告によれば、主婦の家事労働は市場価値に換算すると月二十二万円ほどに相当するというのが、日々行っている家事労働の「専門性」に着目し、それを組織化しビジネスとして急成長している会社がある。「ミニメイドサービス」という会社であるが家事代行として主に家庭内の掃除を請け負う。このビジネスはフランチャイズ方式をとり、全国にその代理店を募っているが、百万程の自己投資で始められるということもあつてか、主婦が自ら出資してフランチャイジーになる、つまり自らの店を開店させるといった例が非常に多いという。

また「ワーカーズ・コレクティブ」などと呼び慣わされる、上下関係のない新しい形態の共同出資会社を始める主婦も増えている。従来は男性の役割のように思われていた「起業する」といった方面でも、自らを「シェアー」しようとする主婦が増えてきているのである。

ケーキなどの物理的なモノは、分かち合えば一人一人の取り分は減っていく。しかし自分自身を「シェアー」すると、自らがより成長しさらに豊かになっていく。「ケーキおばさん」たちは、ケーキを分かち合うことによって自分自身を日大大きくしていつているに違いない。

■「PI」パーソナル・アイデンティティ「化」の潮流

自分自身を「シェアー」したいという思いは、何も女性だ

けの話ではない。男性であっても、今までの会社や家庭という枠組みにとらわれることなく、自由に各人の本当にやりたいことをやっていこうという流れが、様々な分野で起きてきているのである。

私たちは、こうした動きを「PI「化」の潮流」と名づけ整理している。「PI」とは「パーソナル・アイデンティティ」のこと。一人一人が、自らはこうありたいという自己のイメージを明確にし、それとともにあることで、生き生きと元気になる、という状態を「PIしている」と表現している。そうした「PIすること」への欲求（PIニーズ）が高いからこそ、「ケーキおばさん」への激しい応募率という現象が生じるし、また主婦の起業志向もでてくるのである。

（「PI」については、拙（共）著『PIを理解すると時代の面白さがみえてくる』PHP研究所・一九八七年十二月刊に詳しい。ご一読頂ければ幸甚である）。

アイデンティティとは「自己確認」あるいは「自己同一化」などと訳される。人は、社会の枠組みのなかで、妻であったり、親であったり、パートタイムワーカーであったり、町内会の役員であったりという役割を演じなければならないが、同時に、そうした役割とは違った次元で、本来の自己とは何だろうと探求し、自己確認をとうとうとする存在でもある。また時には、相互に矛盾をきたしかねないような幾つかの役割を

演じる自分を、どこかで一つのものとしてイメージして（同一化して）おかねければならないものでもある。それが、まずは生き生きと元気に暮らすための基盤となる条件である。

しかし「本来の自己の確認」と言っても、それはいったいどういうことなのだろう。価値観が多様化したといわれる現代においては「本来の自己」のイメージをものは既存の枠組みの中には求められない。あるべき妻像、あるべき親像、それらを統合化した「あるべき私像」などというものは、既存の仕組みや現在の社会は決して示してくれない。

現代は今までの枠組みが転換しつつある「パラダイム・シフト」の時代と言われている。そうした転換期においては、自分はこうありたいという自己のイメージは、自分が作り出すしかないといえる。「本来の自己の確認」作業は、一人一人がその自由と責任において行っていくものであろう。

■情報化が「PI」を助長する

自分のいまいる現在地を客観的に知り、それを踏まえて自らが欲するものを明確化する。そしてそのイメージに向かっていくことによって生き生きとする。そうした一連のプロセスを通して人はそのアイデンティティをつくりあげていく。

現在、企業を対象としたCIIコーポレート・アイデンティティという分野はすでに確立し様々な手法やノウハウが開

発されている。しかし個人に焦点を当てたアイデンティティの確立手法に関してはいまだ未開発の部分が多い。これからの時代は、一人一人が自らの「PI」を図っていくためのノウハウが様々な模索されていく時代となろう。

生涯教育やライフプランなどと呼ばれる分野が注目され、「自分史ブーム」が起き、また自己成長の為のセミナーが盛んになっているのも、そうした時代の趨勢を示唆している。

またこうした流れに関しては「情報化」が大きな役割を担うと予想される。従来のような一対他のマスメディアの通信方式が変わって現在はパソコン（ワープロ）通信に代表されるような双方向のメディアが続々と出現している。そうしたメディアを用いれば、例えば主婦が家庭にいながらにして自分自身を広く「シェア」できる機会が今よりも何十倍にも増えるのである。各人がそれぞれのアイデンティティをとっていくことが、新しい通信手段を用いたコミュニケーションを通して、より一層促進される。一人一人が「PIすること」に、それぞれの個人が貢献し合い、サポートし合っていくという時代が、情報化の進展という環境の中で、現実のものとして明瞭に見える時代となってきたのである。

（しばた いくお・アイデンティティサポート研究所）

うちなるうながしの声

岩 田 澄 江



「うちなるうながしの声」ということばをきいて思い浮かぶのは、むしのしらせ、第六感、といった直観的なものから、良心のささやき、神の呼びかけ、など、倫理観や宗教の色濃いものである。私たちは人生のさまざまな時に、そのような声をきく。その中には「悪魔のささやき」もあるかもしれない。

しかし、ここで私が言おうとしている「うちなるうながしの声」とは、自分の内面からほとばしり出てくるうながし、自分がある方向へと向かわしめる、否定できない強い力のことである。ある場合には、それは一見自分の望むところや、意志とはかわりないように思えても、よくよく考えてみるならば、その声に従わないとすると、それは自分にとって真の幸福から外

れることになってしまふ。反対に、その声にもし素直に聞き従うならば、たとえそれがある種の不都合を意味しようとも、これ以上にすばらしいことはないと思えるような、そんな声のことである。

これは「良心の声」ともちよつと違う。その声は自分の中に内在している、という意味では「良心」のようでもあるが、倫理的な裁判官としての「良心」とすぐ結びつくものではなくて、神のような、ある力のある存在が内在して、心の扉を始終叩いている、といった趣きなのである。扉を叩く音を無視することは容易なことではない。私の声に従いなさい——とその声は呼び続け、ときには大声で叫びすらする。

たとえば自分の使命がどこにあるのかを知ろうと、待ちわ

びている人があるとする。その人は、うちなる声がわずかに聞きとれるような細い声であつても、敏感にキャッチして、聞き違えることはないだろう。それに反して、多くの夾雑物で心の耳が鈍くなっているなら、その声はついに聞かれることなくして終わるかもしれない。

第三の可能性として、うちなるうながしの声が聞えてきても、それに従うことが、自分の意に反してできない場合がある。多くの女性にとつて、素直にうながしの声に身をゆだねることは、長い間できない相談だった。女性は女性に生まれたために、定められた道をわき目もふらずに歩いていかなければならなかった。大多数の女性は、うちなる声に耳をふさいで、あたかも宇宙の法則のようにきまりきったこととされた道を、ひたすら黙して歩いてきた。内なるうながしの声を圧殺して生きるときに、人間は表情がとぼしくなり、どうでもよいことに関心をもつふりをして生きることにならないだろうか。ここまできて、この「うちなるうながしの声」は、「個性」と深い関係があることに気づく。

十七世紀の英国に拡がったキリスト者の群れであるクエーカーたちは、すべての人間の内に「神の種子」がまかれていると言い、それを「内なる光」とよんだ。女性が軽んじられていたこの時代に、クエーカーの女性は「内なる光」に従っ

て外国伝道にまで出かけていった。神からの呼びかけをきいて、たとえ主婦であつても、夫と子どもたちを残して、伝道の旅に海を越えて出ていった。もちろんそれが本当に与えられた使命であるかどうかは、属している集会の吟味を必要とし、許可が出るまでにはかなり日数を要したらしい（そういえば英語の「使命」はまさに神からの呼びかけ“calling”である）。

クエーカーでなくても古今東西、女性たちの中には、消したり、ごまかしたりし難いこの声に、敢然と立ち上がつて従つていった人々がいる。だれにも何人かの例を想ひうかべることができよう。たとえば女教祖といわれている人たち——彼女たちは理性的というよりは、ものに憑かれたようになつて、その熱い願いや想いを吐露しなければならなかったのだ。が、この事実はそのだけ深く、彼女たちの追いつめられた辛い生を物語るものである。

与謝野晶子は自らの内から溢れる情熱をまっすぐに歌に託し、平塚らいてうも、内なる声にうながされるままに、新しい結婚の形式をえらんだのだと思う。高群逸枝が森の家で、服の片袖が色あせるまで、毎日同じ部屋にすわつて女性史の研究に没頭したのも、内なる声に従つたからであらう。もっと近くでは、長いまわり道をしながらも初志を貫いて医学の道に入り、ハンセン病の人たちに精神医学の面で貢献した神

谷美恵子のことを想い起す。美恵子は自分を医学や文学に向かつてうながす抗し難い力を、「オニ」とか「デーモン」と呼んでいたという。この力は彼女をいわゆる「良き妻」や「良き母」であることから引き離すものであるから、このようなマイナスイメージで呼ばれねばならなかったのだろう。

これまで女性たちは、自分の内面からきこえてくる声を、無視することによって、活力の失われた、偽りとすらおもえる生に自らをゆだねるか、あるいは、その声に聞き従うことによって、内面的に満足はなし得られたにしても、大きな対価であるところの、周囲からの非難と、たえざる自責の念に耐えねばならなかった。いわゆる「個性が強い」「悪女たち」の中に、そのような女性が多かったろう。昔から狐憑きとか魔女裁判のような陰惨な、歴史の影の部分で、少なからぬ女性の命が絶たれてきた。しかしこうした女性たちの真実の声が、歴史を変える力にもなってきた。

では現代の日本では事態はすでに一変した、といえるだろうか。私たち女性が、今やそれぞれの、うちなるうながしの声に従って、はつらつと生きていける状態が、すでにつくられているだろうか。これまでの日本で、女性たちを抑圧してきた最大のものは家族制度だと思う。それでは昨今言われている「家族の崩壊」は、この女性抑圧の原凶の崩壊として、

喜ぶべきことなのであろうか。答えはおそらくイエスでもあり、ノーでもあるだろう。

うちなるうながしの声をきくことのできる前提として、まず静寂、沈黙が必要である。今私たちをとりまいている環境はその正反対といつてよい。テレビや街の騒音、私たちの心をみたしてしまっているモノへの執着——これも一種の騒音である。お粗末な住宅政策のおかげで、私たちには一人になれる空間すらめったにない。もっと大きなスケールでは、太古の静寂を秘めている、かけがえなく貴重な原始林ですら、惜し気もなく伐採されてしまう国である——それもオカネのために。私たちがオカネのためには恥も何もなくしてしまっているとしたら、そんな心に内からの声がきこえてくるはずもない。

だからこの声を聞こうとするならば、まず一人にならなければならぬ。一昔前までの女性は、縫物や織物などの手仕事をする時に、たとえ大家族の中にあっても「一人」の空間をたもっていた。

「私は母が縫いものをしているとき、その姿が美しければ美しいときほど近づきがたかった。そばに寄って来ていいときと、来てはならぬときというのがあった。——母が『ひとり』になっているとき、というのをかいまみたのであった。」(森南海子『手縫いの輪』海電社)

現代の私たちも、この声をまちがえずに聞こうと望むならば、なんとかして静寂と沈黙の時をつくり出さねばなるまい。外から流れこんでくる雑音に、一日を浸しつくしてしまふことを止めねばならない。自分の魂に一人向いあうときに、いかに相対的なものを絶対的なものと切りがえていたかに気づき、多くの執着もつまらないものとして消えていく。ひとつひとつ、心の黒ずんだうろこがはがれ落ち、大切なものが底の方にひそんでいるのを見出す。雑音がとだえた後の静けさの中に、うちなるうながしの声が、そのまぎれもない声がひびいてくる。その時に私たちは、その声に従うべきか否か決断しなければならぬ。

もちろん決断は一回声がきこえたからといって、その場ですぐなされるべきだというのではない。むしろその声を何度もきくことによつて、徐々にその真実性が疑いのないものになるだろう。逡巡し、迷ふことこそ人間的であつて、決断が果敢でないからといって、責められてはならない。

またその声が真実であるかどうかの判断は、おのずと経験が語るのでないだろうか。絶対の基準などあるべくもなく、それこそ個々の判断にゆだねられねばならない。私たちは弱いので、人に相談することもあろうが、最終決定を下す者は自分のほかにない。一つたしかに言えることは、もしそれが真実の道ならば、そこには自由の風が吹き、喜びが溢れ

るであらうことだ（私はここではあえて、「ひとのため」とか「他への愛」といったことばを使わない。女性だけが今まであまりにもこうしたことばで抑圧されてきたから）。

真に良き決断がなされて、うちなるうながしの声に従つて生きる女性が増えてゆくと共に、新しい境地、世界が開け、社会は少しずつ変わつていき、夢と言われていたものが現実になつていく。最近の平和運動のスローガンに「女たちよ、家を出よう」というのがあつたが、もし家を出ることが本當に紛れもない、うちからの呼びかけだと信じるなら、そうしなければならぬまい。沢山の女性が家を出て声をあげることによつて、未来の子どもたちと地球が守られるならば。しかしながら、うちなる声の呼びかけは、あくまで静けさの中で、個々になされるのであつて、決しておしつけや大衆動員という形ではないことを忘れてはならない。

（いわた すみえ・語学講師）

「コミュニケーションの美学」

加藤 春恵子



「話し合い」を妨げるもの

両性関係の再生、家族の再生のために「話し合い」が必要だ、ということは、今日、多くの人々の痛感するところである。しかし、実際には、人々の、とりわけて妻たちの願うほどには、「話し合い」は実現せず、行われても、深まっていかなないことが多いのではないだろうか？ それは、一体、なぜか？

この問いに対しては、さまざま側面からの答が可能だと思う。近代の行きづまりを指摘する人もあるだろうし、夫たちの多忙さを指摘する人も、価値観の多様化を挙げる人もあるだろう。そうしたさまざまな答のありうることを前提にしたうえで、ここでは、あえて、「日本人のもつコミュニケーションの美学」とい

うことにポイントを絞ってみたいと思う。

日本社会に生まれ育ってしまった人々が、知らず知らずのうちに身につけてしまっている「コミュニケーションの美学」とは一体どのようなものなのか？ その「美学」のなかに、「話し合い」を妨げるものがあるとしたら何か？ 日本人論のなかでくり返し扱われてきた論点を思い起こしながら、「私たちの再生のための、新たな「コミュニケーションの美学」の創造への道筋を見つけるべく、文化のなかのおとし穴について改めて考えていくことにしたい。

察しの美学

日本人は、欧米人に比べて、ことばを信用せず、ことばを多く語る人間をも信用しない、とは、日本人論のなかで度々指摘されてきた点である。

ことばなど用いずに、さらにいうなら、身ぶり手ぶりも交えての伝達の努力などことさらすることなしに、察してもらう、というのが、日本人にとってのコミュニケーションの理想であり、察し合いの關係こそ、高度の人間關係とされている。そうした關係を築ける人こそ、日本社会での一人前のコミュニケーション能力の持ち主ということになる。

コミュニケーションということばは、広い意味で用いるなら、このような「察し」によって伝わっていくという關係も含んでいるが、狭い意味に絞っているなら、他のひとに伝えようとする意図をもって何かを伝達することをさす。従って、あえてこの狭義の伝達ということにこだわるなら、「察しの美学」は「非伝達の美学」であり「コミュニケーション不用の美学」である。つまり、「非伝達の美学」こそ日本人の「伝達の美学」だ、という逆説的ないい方もできることになる。

断絶の美学

ところで、日本社会には、もう一つの「非伝達の美学」がある。「断絶の美学」とでもいうべきものがそれである。

「察しの美学」は現実の人間關係のなかで容易に実現するはずはなく、とりわけて、価値観やライフスタイルの多様化した現代では、親切の押し売りをめぐる疲労感や、わかつて

らえないことへのあきらめが蓄積されていくことになる。そのとき、私たちの心に、わかつてもらえなくて当然、わかつてもらおうとすることなど卑屈なこと、断絶こそむしろ己れの正しさを証明するもの、という思いがしのびこむ。何もいわなくともまるごと「わかつてもらえないに違いない」という限らない信頼は一転して、「わかりっこない」という不信に変わる。この不信は、「男」とか「経営者集団」とかいった社会の一部の人に向けられることもあり、人間全般に向けられることも、また、特定の人物に向けられることもある。相手は誰であれ、こうしたかたちでのコミュニケーションの断念もしくは伝達意志の不在を、かっこいいもの、いさぎよいものとして賛美する美学が、日本社会には根強く存在する。世をすねて三度笠と共にふるさとを去るひとの背中、また女になどわかりっこないと「黙って○○ビール」を飲む男の姿は、「美しい」のである。

このような「断絶の美学」は、社会運動にもしばしばちこまれてくる。その結果、社会運動は、実際に社会を変えていく力となるよりも、むしろ、運動の担い手の自己確認あるいは自己鍛練の場となるにとどまってしまふ。ものごとを変えるためには、伝達の努力と、相手方のいい分と自らの要求をつき合わせて、ときにはあえて譲ることを通して一歩を進める、という相互調整の営みが必要となる。しかし、日本人

の「コミュニケーションの美学」は、こうした手続きを「不純」なものとして拒否反応を呼び起こすことになりやすい。かくして、要求全面貫徹、しからずんば花と散る、という姿勢がいさぎよく美しいものとして追求されることになる。そうした過程のなかで「話し合い」ということばさえうさんくさいものというニュアンスを帯びがちになり、「わかってもらおう」という姿勢は、ひとを操作し、ひとに媚びようとする姿勢につながるものとしてうとんじられていく。このような感覚は、今日、社会運動に限らず日常生活の隅々に滲透しているように思われる。

和の美学

「察しの美学」と「断絶の美学」を対極として含む日本人の世界——それはしばしば「和の美学」の世界としてとらえられてきた。察しに期待をかけ、おしつけやあきらめをくり返した果てに生じる反逆は、「断絶の美学」の中に封じこめられて、実際の変革効果を生むことの少ない「一揆」に終わり、民衆の心の中に美談としてひそかに残っていく。そして、やはり「いつてもしかたがない」のだと覚った人々は、「和」をこわすことは「いえない」と肝に銘じて、再び気まづい争いを起こすまいと細心の注意を払って生きていく。いま、多くの組織で、家庭で、そのような状態が日常化している。

この、人々にものをいわせない「和の世界」の美学を、おそらく日本で最初に文章化したのは聖徳太子だと思われる。十七条憲法の第一条「和をもって尊しとなす」がそれである。また、和の世界を徹底して制度化し、ことあげさせない秩序をつくり上げ、三〇〇年の太平の世を築いたのは徳川幕府である。『福翁自伝』によれば、幕末に福沢諭吉が幕府の官僚の求めに応じて経済の洋書を翻訳し、competitionを「競争」と訳したところ、担当の役人は「争」ということばをひどくきらい、これでは上役に見せられないとして改訳を求めたという。「争」ということばを使わせないと改訳を求めたことさせぬことに細心の注意を払い、和の世界の維持、権力の安泰をはかった幕府の姿勢がそこにあらわれている（向坂寛『和の構造』北樹出版、一九七九、参照）。

聖徳太子や徳川幕府による「和」のポリシーは、いずれも権力争いの争乱の影響が民衆にも及び、「秩序」への願いと厭戦気分が「下」から湧き起こったときに登場した政治権力が、「上」からの方針として打ち出したものであり、上下の願望が響きあつて「コミュニケーションの美学」として日常生活の中に浸透していったものといえるだろう。

この美学のなかに、異議申し立てや世論喚起のための「伝達」に対する上からの封じこめの意志が働いていることに關しては、今更述べるまでもないであろう。異議申し立てをし

ても、当事者自身が「断絶の美学」に絡めとられてしまい、運動がなかなか効力あるものとならない、というのは、秩序維持という観点からすれば、きわめて巧妙なしかけであるといえる。日本における「和の美学」は、そうしたしかけを含む「非伝達の美学」「沈黙の美学」としての側面をもっているのである。

女性解放運動をも含めた一九七〇年前後の異議申し立ての多くが「断絶の美学」のなかにすくいとられていくのを見てしまった日本社会の人々は、いまなお、「和の美学」の優勢な時代を生きている。「話し合い」を求める一方で、話し合う前にすでにことばへの不信や無力感がまわりつくのを禁じえない人が少なくない。そうしたなかで、「察し」の文化の再生への期待と断念の中を揺れ動きながら、ひそかに「断絶の美学」に縋りつきつつ、「和の美学」のなかに生きる。

「話し合い」の実現・深化のきわめてむずかしい時代に、私たちは生きていくように思われる。

伝達の美学

私たちにとって今必要なのは、「察しの美学」と「断絶の美学」とを含む「非伝達の美学」の限界と陥穽に気づくことである。そして、「伝達の美学」としての新しい「コミュニケーションの美学」を確立していくことである。

もちろん、ことば不信のうらがえしとして、ことばの万能を信じる「ことば信仰」をもとうなどというのではない。が、しかし、ことばの限界を知りながらも、やはり、ことばに賭けていくということが、私たちにとっての出発点となるだろう。そして、ことばを包む非言語的コミュニケーションも含めて、「伝え手」としてお互いを鍛えあっていくことが必要となろう。

私の知るかぎり、日本は、伝達のための教育を最もないがしろにしている国の一つといつてよい。人間性さえ磨けば意志はおのずと伝わり、学校教育でも社会教育でも弁論の教育などは全くといっていいほど手がつけられておらず、ホームルームなどでの「話し合い」も、伝え技となるための教育としての位置づけは不十分なように思われる。家庭科の男女共修とやらで、「話し合い」を大切にし、それを実現しうる力をもった両性を育てるということこそ、「私たち」の再生の出発点となるだろう。「非伝達の美学」が既存の秩序を支えるための操作手段としての役割を果たしているのだということに気づくこと、そして、これに対抗するものとして「伝達の美学」を築いていくこと——そこに、ルネッサンスのための課題のひとつがあるのではないだろうか。

(かとう はるえこ・大学教員)

暮らしの美

——「文様」を取材して——

越村佳代子



「日常生活の美」いい替えると「暮らしの美」は、いたる所にある。

例えば、サトイモ。泥をタワシで落とす。左手に茶色の皮がまだついているサトイモを持ち、面取りしていく。泥まみれの真黒な元の姿からは想像できない真っ白な「肌」が現われる。たつぷりと水分を含み、キメ細かでやわらかな白さ。本当に美しい。

私は料理が得意でも上手でもないけれど、台所で感動を覚えることはしばしばある。しわくちやの塩蔵ワカメを水に放つ。ほんの数秒で、緑の足を伸ばし始める。「完べきな弛緩」に、ほればれする。インゲンを塩ゆでした時の鮮やかな緑もいい。「お見事！」と声をかけたくなるような変身ぶりだ。

野菜ばかり登場させたけれど、こんな風に自分の身

の回りの「美」について、私が多少敏感になったのは、正直なところ、ここ一年ほどのこと。朝日新聞日曜版に連載されている「文様」の企画、取材にかかわってからののだ。日本の文様の大半は身の回りの自然から採ったものである。文様の取材を重ねるたびに、先人の「暮らしの美」への豊かな感受性に、驚嘆するばかりだ。

「文様」には、5W1Hという新聞記事の要素がない。有名、無名の人がある時は祈りを、ある時は感動を一つ一つの文様に託し、それを次の世代がまた、同じような気持ちで受け継いでいった。その事実しかない。それだけに、私たち取材する記者は、まず、自分の感動を大切にしようと話し合ってきた。

私には長いこと温めてきた文様があった。三年前の秋、出張で訪れた岐阜県高山市の「高山陣屋」。その玄関の床の間

の張り壁にあった青海波である。リズムミカルな弧の連続文様。形は至って単純だが悠久とか永遠とかいった言葉を思わせる壮大さがみなぎっていた。初めて知った「せいがいは」という名まえも、好きになった。中国の奥地に「青海（せいがい）」という省もある。青海波はペルシアを起源とし、シルクロードを通じて日本にやってきたともいわれる。だから「せいがいは」と音読みで呼ぶのだろうか。「あおうみなみ」や「おおみなみ」にはない、異国の文化の香りが、「せ・い・が・い・は」の五文字の間に漂う。心の中に次々と楽しい想像と愉快な飛躍が浮かんだ。

それは、日々の出来事を追うことで終始するそれまでの記者生活では出会わなかった世界だった。全国各地を歩く取材は続き、日本は豊かな文様の宝庫なのだと思い知らされた。和服の常識がある年配の人たちはともかく、戦後生まれの私たちは全く文様にうとい。とにかく、青海波の感動だけでも文様オンチの世代に伝えたいものだと思っていた。

念ずれば、いつかはきつと通じる。好機は意外に早くやってきた。「世界名作の旅」「日本史の舞台」「世界名画の旅」と美しい写真と記者のルポの大型企画で読者を楽しませてきた日曜版のフロントに「文様」の企画が採用されたのだ。私と同じ日曜版編集部の先輩鬼頭典子記者との共同提案だった。いよいよ、青海波が書ける。意気込んで高山を再訪した。

想像していたのより、波の弧が小さかったのは意外だった。前回は見逃していたのだが、幕末から昭和四十八年の改修まで床の間にあった古い青海波がガラスケースに展示されていた。新しいのよりも手が込んでいる紙だった。波を木版で刷った後、その上から雲母（「きら」と呼ぶ）押しで、全面に麻の葉の文様が重ね刷りされている。波の色は、もとは青だったようだが、年代を経て深い紺青色に変化している。高山陣屋は天領だったこの地の、「幕府出張所」のような所である。この青海波は、武士の、町人の、どんなやりとりを聞いていたのか。じつと見つめていると、時間を超えてしまうような気がしてくる。

青海波が大好きだ、という私の心の奥底にあるものは何なのだろう。毎日考えた。小さい波から大きい波へ。一定のリズムで果てしなく繰り返される海の日常。海はいのちのふるさとである。いのちといえは、出産の時の陣痛は、まだ新しい記憶の中にあつた。小さく、そして次第に大きく。そっくりだ、と気づいたとき、この文様が脈々と続いている理由が瞬時に理解できた。記事はこの話を軸に書いた。

この後、「餅」「花喰鳥」「五穀」「菱」「鳳凰」と六十二年内に、担当した記事が載った。心がけたのは、「暮らし」からかけ離れた観念論で書くまいという点だった（というところ、誠に格好いいけれど、正直な所、暮らしの場から見ると、よ

くわかるのだ、文様が。私にとっては、だけれど。

「緋」「菱」では、インドネシア、ユーゴスラビアと海外取材の機会に恵まれた。

インドネシア行きは、ジャワ更紗やイカット（緋）の研究で約二十回も渡っている女性が同行してくれた。だから、滅多に行かれないへき地の島の奥地へも行くことができた。人食いワニの出る川を渡って、たどり着いた集落で、女性たちが、手本もなしに、緋をくくっているのを見た。王さま、ニワトリ、馬など基本文様はいくつかあるが、手くくりで、何をどう配置するかは、その人次第で変わる。一枚として同じ模様は出てこないわけである。織り込まれた文様は、まさに祈りそのもの。ある所で遺体の入ったお棺を見せられた。遺体は、緋の布でいく重にもくるまれている。お棺の上にも緋の布が重ねてあった。祈りをこめた布にふさわしい使われ方だと思った。

ガタゴト道をジープに揺られながら、島の奥から中心部へ帰る途中、ものすごいスコールに遭った。ワイパーが全く役に立たない。戦争中、インドネシアに駐屯していた日本兵がスコールが来ると、石けんを持ち、素っ裸になって雨の中へ飛び出したそうだが、天然シャワーと呼びたいほどの激しさだ。ものの十分ほどでカラッと晴れ、三十分も立つと雨の痕跡はなくなってしまう。ふと、空を見上げると、海面から出

て海面に入る百八十度の虹が広がっていた。これこそを虹のかけ橋というのだ。自然の雄大な美に、私たちは声を失った。

ユーゴでは、民族衣装の「菱」の刺しゅうを取材した。ユーゴの場合、民族衣装イコール農民の晴れ着である。自ら糸を紡ぎ、織ったのは、日本の農民と同じことだ。感動的なことに、直線裁ちなのも一緒だった。ひだをいっぱいにとって袖をふくらませたり、スカートを豪華に見せたりしているが、結局、せっかく織った布を無用に裁断しないための工夫なのだ。晴れ着が古くなったら、ふだん使いにおろし、それもすり切れてきたら、雑巾にし、生理用のナプキン代わりにも使ったという。お金があれば、どんな洋服でも簡単に手に入る現在からは、想像しにくいつましき。丹精込めた布への愛着の深さともいえる。取材したおばあさんが、「昔はこうして糸を紡いだのよ」と歌を歌いながら実演してくれた。その哀切たる響きが、かつてオーストリアの支配下にあったころの苦しい生活を物語っているようだった。

「文様」を書きつづっていくとき、どうしても歴史探訪になりがちだ。どうやって、現代を生きる私たちと結びつけるか。ひと工夫もふた工夫もいる。

近代デザインは「装飾は不要」と決めつけて、まず建物の装飾をはぎとった。それが伝える「合理主義」のメッセージは、家具・調度から衣類までを変えた。いまや世の中に氾濫

しているのは、真白な棚、真白な机、真白なイスに象徴されるインターナショナルスタイル。それでも、いいものは残っている。アメリカの工業デザイナーの草分けのひとり、レイモンド・ローウィー（自伝が鹿島出版会から出版されている。『口紅から機関車まで』）作のピースのデザイン、オリーブをくわえたハトもそのひとつである。

タバコのパッケージは明治以来、様々に変わり、その印刷は日本全体の印刷技術の向上に役立ったとされている。外国人に依頼するのは初のケースだった。パージニア葉という抜群に香りの良い葉を混入する、当時（一九五二年）でいえば高級タバコ・ピースのイメージは、斬新なデザインでぐんと上がった。そのころの新聞を読むと、工業デザインとこのことはなく、インダストリアル・デザインは「産業意匠」と訳されていた。一九五一年にローウィーは来日してあちこちで講演しているが、彼を呼んだのは、藤山愛一郎らしい。日本もいつかは工業デザインが重要になってくるだろう。財界人のそんな先見の明が感じられる。日本人の多くは聖書の逸話など知らないだろうが、ハトがオリーブをくわえる文様を「好ましい」と感じる心はもっていた。日本にも正倉院の宝物に見られる花喰鳳凰やそれが日本的になった松喰鶴というめでたい文様の下地があったからこそ、ピースのデザインは圧倒的な支持を得たのだと思う。

あるひとつの文様から、歴史が見えてくる体験は実に楽しいものである。さらに押し進めると、日本人が、人間が、見えてくる。

「五穀文」でお稻荷さんの赤い旗についている稻文を取り上げた。稻荷信仰の難解な本と取り組んで、結局、よくわからない点が多い、ということがわかった。「伊勢屋稻荷に大のくそ」といわれるぐらいに多かった江戸時代の稻荷は、明治時代に入って国家神道として神社が序列化（県社だとか村社だとかの格づけ）された時、変質していった。官幣社（国家や皇室が費用を出して管理していく最上級の神社）二百余のうち、稻荷は伏見しか入っていない。庶民の稻荷は軽視されたのである。なぜ、明治政府は稻荷を軽んじたか。江戸時代の町人文化を墮落、頹廢として位置づけた明治政府の歴史観と深いかかわりがあるような気がする。

文様はメッセージである。その意味を知ったとき、私たちは、時空を超えて、生きとし生けるもの全てに深く共感することが出来る。昔の人も、海の向こうの人も、日常の中に美しさを見出しながら生きてきた。

暮らしているのだな、と。

（こしむら かよこ・朝日新聞記者）

夢といきがい

多田 秀実



高校二年の夏、中学から文通を続けていた女の子に絶交を言い渡され、急に学校が嫌いになった、張り合いを失った僕にとって、学校の授業は死ぬほど退屈であつたし、それに耐えてまで大学受験を目指すなくてはならない意味がどうしてもみつからなかつた。それまでの僕にとっては、学校の勉強も大いに意味があつた。ひそかに彼女との結婚を夢みていた僕にとって、優等で高校を卒業、名門大学に進学、家業を発展させ一財産つくるということは、果たさなければならぬ責務であつたからだ。そうでなければ彼女を幸せにすることはできないと思われた。キューリー夫人のような生き方が理想だという負けず嫌いで頑張り屋の彼女と人生を共にするためには、この僕も飛び切りのエリ―

トでなければならぬという気がしていたのだ。学校の授業はそういう輝かしき未来に自分を導いてくれる水先案内人だといえた。

ところが失恋をしてしまったのだからたまらない。夢に描いた輝かしき未来も、その核になる彼女がいなくなると何ほどの魅力もない。そんなことがあつて、ついには勉強に精を出すのも名門校を志すのもせんないことと思われるようになった。すると不思議なことに、周りにいる同級生たちの受験一本槍の姿が、急に、魂のない操り人形のように見えだした。教壇に立っていばっている教師の顔もなぜか馬鹿面に見えだした。耐えきれぬほどの失恋の悲しみに直面し、人間何のために生きるか、という生れて初めて突き当たった哲学的命題に日夜呻吟している僕から見れば、彼等はものを考えぬ

家畜のような存在に見えるのだった。

ところが、どういうわけであるか、失恋を境に小説を貪り読むようになったにもかかわらず、僕は本を読めば読むほどに自分の生き方が分からなくなっていくのであった。いかに生きるか、いつしか僕はその解答を求めたい一心で学校までさぼるようになった。無味乾燥な学校の授業より解答が得られないなりに小説や哲学書を読むほうがいくら自分のためになるかもしれない、そう考えたからだ。やがて僕は授業日数が必要なくなり、学校がしつらえたブラックリストの常連となり、清潔な装いへの関心も喪失してしまったので、学校でも家族の中でも文字通りの鼻つまみものに転落していった。そうなるまでには、さすがの僕にも大人の言葉に熱心に耳を傾けようとした一時期があった。人間何のために生きるか。この問題を僕はアホのように誰かれなくぶつけた。ところが返ってくる回答は、どれもこれも、こちらの真剣さをあざ笑うようなものばかりだった。

「おまえはアホか」

「屁理屈をいうな」

「そんなこと考えて答の出る問題やない。おまえがそんなふうやさかい、おとうちゃんもおかあちゃんも泣いとるぞ」

「馬鹿なことを考えんと、そんな暇があつたら、おとうちゃんの手伝いをせんかい」

「おまえ、生きていかれんようになるぞ。世の中はおまえがいうように理想どおりには出来とらんのや」

どれもこれも、僕が直面している問題から眼を逸らさせようとする脅し泣き落としてしかなかった。

いかに生きるか、という問題は、高校の卒業を前にしてもついに解答は得られなかった。とうとう僕は高校の三年間を全く無為に過ごしてしまった。その思いと父親との確執に疲れはてた僕は、卒業式の前日、鉛のように重い気持を引きずりながら片道の運賃だけを持って東京へ出て行った。そうして新聞配達達の住み込み店員を皮切りに僕はありとあらゆる職業を転々とした。臨時工、大工見習、家具職人見習、百科辞典のセールス、業界紙記者、雑誌記者、配達員、経理、会計事務所職員、友禅下絵描き、ホテルのボーイ、タクシートの運転手、サーカス団員……ざっと挙げてでもこれだけある。何の秩序もない実に乱雑な転職ぶりを我ながら呆れかえるが、その時々はかなり真剣な気持で新しい職に就いたはずである。ところが、どの職業どの職場にあつても仲間内の妬みあい醜い諍に触れないですむことはなかった。あるいは自分が争いごとに巻き込まれることもあった。なぜ人間はこんな些細なことでも憎み合わなければならぬのか、なぜなんだろう。なぜ人間はもつと喜びに満ち溢れた姿で暮せないのだろうか。そう思いつつ僕は逃げるようにしてその職場を去るのだった。

現実からの逃避、僕は長い間ただそれだけを性懲りもなく繰り返してただけなのかもしれない。求道者ぶってはいいるが、真相は単に現実への適応力を欠いた生活破綻者に過ぎなかったのかもしれない。どうやらこのままではのたれ死にをするか発狂するかさそうだな、いつしかそういう言葉を呟くまでになっていた。もしそうだとしたら、僕の生は一体何だったといえるのか。僕は一体何のために生れてきたというのか。このままで死んでゆくとしたら、それはまったくの犬死にというものではないか。恐らく顔には一端の落魄者の表情が色濃くにじみ出ていたにちがいない。高校を出てから実に十余年の歳月が流れているというのに、僕はまったく何の成果も築いてはいなかった。……といい切ってしまうが、自分があまりにも哀れなので少し弁解がましいことを言わせてもらおうと、この僕にもやりたいことが全然なかったわけでもないのだ。漫然としてではあるが、小説家になれたらいいなあと思う時期があったのだ。そうして実際に習作活動が続けていた時期もあったのだ。けれどもこの道だけになりたいからなれるというものではないだろうという固定観念が先に立って、どうにもならないのだった（やっぱ駄目人間だったということか）。

そんなある日、書店でふと手にした文庫本の一冊に僕は心を洗われるような体験をするのだった。それは大阪出身の作

家を書いた『大阪野郎』と題する原稿用紙僅か四枚ほどの随筆に登場するOさんの話を讀んだ時である。それはこんな内容であった。

Oさんはもと漫才師、いまは昼職人という六十半ばの人間が、六十になってから自分の一生を反省し、残された人生を小説を書くことに決めたのだった。はじめは息子たちから「おとっちゃん、馬鹿なことばせんと仕事に精を出してくれ」と嫌味をいわれるのだった。しかし彼は、少しもひるまず勉強に勉強を重ね、いつか某大衆雑誌の懸賞小説に佳作で選ばれたり、某有力業界紙の連載小説に入選し賞金を獲得したりするまでになるのだった。随筆の作者はこのOさんのことを「ほんとうに偉い人だと感心する」と評しているが、まったくもってその通りではないか。その努力といったら並み大抵のことではなかったはずである。

話はこれだけで終わらない。ある時Oさんはちよつとした用事で上京するのだが、その際、かつて漫才師時代に知りあったという某小説家を訪ねるわけである。その小説家というのは一時期大変活躍したのだが、齢が齢だけに最近では沈黙が続いているという人であった。その小説の世界では大先輩にあたる作家をつかまえてOさんはこういったのである。

「六十くらいがなんや、これからやないか。お互い頑張ろうやないか」

本というものはまったく不思議なもので、出会いのタイミング次第では読む人の人生を大きく変えてしまうことがある。かつて高校時代に失恋のさなかに出会った本が僕を日常の生活から遠ざけたのと同じに、いままた僕はこの原稿用紙たった四枚に過ぎない文章によって生き方を大きく変えられようとしているのだった。僕はこの文章をあたかも神の声を聞くように打ち奮える感動の中で繰り返し読んだことを忘れない。今から六年前、三十二の年のことだった。

六十の人にもこれだけの生き方ができるんじゃないか、六十といえは自分にはまた三十年も先のある話じゃないか、今からやり直してやり直せないはずがないじゃないか、よしんば失敗に終わろうと、それ以前の報われない人生に比べさらに何かを失うということがあるだろうか。また時を同じくして僕はこんな言葉にも出会った。

「人生なんて簡単さ、次の三つがあれば誰にだって生きられる。それは希望と勇氣とSOME MONEYだ」

これはチャールズ・チャップリンの言葉だが、当時の僕を勇氣づけるのにこれほど短くピタリした言葉もなかった。どう生きればよいかがこの時はつきりと定まった。以来僕は、作家になるのだ、この僕でも作家になれるのだ、なれないはずがないのだ、いまの努力はきつと報われる日が訪れるのだ、そう信じて生きてきたのだった。そうすると不思議なもので、

かつては不可能としか思えなかったようなことが今はいくらか可能になって来ているのである。つまり自分の文章が活字になるということが少しずつではあるが現実のものになってきているというわけである。だから今の僕が昔の僕と違って、毎日を非常に楽しく生きているのはいうまでもない。まったくもって、自分が確実に進歩しているという自覚くらい、人間に活力を与えてくれるものはないようだ。

いま僕は「いかに生きるべきか」と人に尋ねられれば、迷うことなくこういうだろう。まず夢を持つこと、そしてそれを追い続けることだろうと。今の僕に言わせれば、夢のない人生なんて生きながら死んでいることと同じである。さらにいうなら、その夢は決して他人に依存した夢であってはならない。恋人のあるいは家族の都合で壊れてしまうような夢であってはならない。そして最も重要な点は、どんなことがあってもその夢だけは捨て去らないと強く決心することではなからうか。夢とはすなわち自分の可能性を追い求めること。それはどんな人にだってできることなのだ。

僕はもう決して迷わない。しかしそれは、かつての迷える一高校生に耳を貸さなかった芯から日常に埋没してしまった大人たちの態度とは違っていると思っている。僕は男も女も人間皆がお互いの夢を語りあえる日が来るのを願ってやまない。

(ただ ひでみ・山莊管理人)

清少納言が今を生きれば

吉村 光男



民教審の教育改革提言を拝見し、全くすばらしい内容であると思います。この女性の方々のエネルギーは、人間としての、自己実現を求める力であります。この力は、あまねく子どもの―生きとし生けるものの―人間生活の保障を生み出す力です。

ここで私は、人間に目ざめ、個性と文化に目ざめ、その社会の歴史的現実の中で、精一杯生き抜いた先輩のことを、強く思い出さざるを得ません。その人は、今から一千年前に女性の自己実現を完遂した清少納言その人です。

今だったら、清少納言は、どう生きるでしょうか。

清少納言は、好奇心に富み、美意識を常に求めて生きました。その生き方から、現代に通じる個性の持主であったと言えます。さらに宇宙愛を求めて生きる一

方、日常生活を見つめて、あくまでも事実を観察し、判断をし、批判精神を絶やさず維持した全くすばらしい女性でした。道隆から道長へ、中関白家から道長政権への内部革命というべき時代（池田亀鑑述）にあつて、清少納言が枕草子に残したものは、当時の文化水準の高さであり、日本民族の誇りというべき「随筆」の創設であります。枕草子の後、数年後出た小説源氏物語の、すべてを語りつくす美ではなく、省略法を生かし、中国古典を和風化し、和語の新しいイメージの創造を行っています。随想・日記文の繊細なことは、驚嘆するばかりです。

子どもの美的評価を行い、具体性を示す母と子の教育論は、現代でもみずみずしく生きて、普遍的なものです。大半の学校が目標として掲げている「考える子ども」、その美しさを清少納言は強く主張し、永井路子さんも絶賛されています（文春文庫）。

知性を強調した清少納言は、感覚のするどさも抜群で、かすかな初夏の葉のそよぎに胸をときめかせ、川の水のしぶき、衣服にしみ入っている香のにおいに、美と感動の喜びを歌っているのです。

ここで清少納言の一生をふり返ってみましょう。

清少納言は、九六六年の生まれ。父元輔から和歌、万葉集、中国古典を学び、一七、八歳頃まで、受領（地方長官）の娘として養育されました。一七歳頃則光と結婚して、二男何女を設けていますが、九九一年頃離婚します。

九九〇年、父元輔が肥後守としての九州の任地で死亡します。「家庭の主婦として小さな自己満足の幸福などを夢見ている女性は、自分にとってはいとわしい」（岸上慎二氏）と、枕草子に書いた清少納言は、乞われて、宮廷生活に入ることになります（九九三年）。時は夢のように過ぎ、一〇〇〇年、皇后定子が崩じ、一〇〇一年、枕草子はほぼ完成します。定子の下での宮仕えと、定子一周忌を含め、およそ八年間が清少納言の宮廷黄金の時代と言えます。一〇二五年頃、清少納言が、六〇歳ぐらいで死去するまでの四半世紀は、定子の内親王の養育に当たったり、枕草子の追記をしているようです。その間に藤原棟世（摂津守）と再婚、従って摂津（大阪・兵庫）にも居住したことになります。晩年は月の輪（京都市東山区）に帰り住んだと言う説が有力です。月の輪は、元輔

の旧宅があったところです。

もし清少納言が民教審委員だったら、対話学習を主張します。学習過程において、清少納言は、その本質を常に意識し、課題の性質へ迫るよう主張します。

「何を言わんとしているか」―「学習者はどう理解するか」

「何が大切なのか」―「学習はどの程度意見を持つか」

構造として学習をとらえ、形成的評価を忘れません。従って、相対評価には反対したでしょう。少人数学級を主張するのは当然です。

文部省と日教組の対立をなくすための、具体的提案をします。そして一年間で問題を解決するでしょう。中関白家と道長政権の対立の中にあつて、清少納言が生き抜いたキャリアから言つて、清少納言は、問題解決能力を持っていたと思うからです。

また教育の地方分権化をはかるでしょう。枕草子には、地方の生きた情報が数多く入っていますから。でも、清少納言が最も力を入れるのは、乳幼児・幼児教育でしょう。すべての子どもの美的生活が保障され、関連して母親等に対する施策も行われます（「うつくしきもの」「人ばえするもの」。すべての子どもに必要な教育が無償となり、教員の専門職が施行され、終身職も選択されます。枕草子の子どもへの記述から発展して、清少納言は必ず実現するでしょう。

給食は食堂で行われ、食事のしかた、食器に至るまでのトータルデザインを設計するでしょう。しかし選択制で、自宅で昼食をとることもできます。食器を業務命令で使用させるなど、これは、行政の失政に他ならないと批判するでしょう。高校教育を多様化し、大幅に選択性を採用するでしょう。さらに教育予算を倍増させます。

清少納言は権利意識が強く、一方的な不利益な物事に対しては、上位の人に対しても、堂々と論陣を張ります。しかし、意外と素直なところもあり、自分の信頼する人や事物に対しては、とことん敬意を表し、上品なことを尊びます。

清少納言は調和と協調を理想として来ましたので、民教審の提言を政府・関係省庁・機関へ示し、合意の得られたものから実現させます。それに必要な人脈を開拓する力があります。情勢判断がよく、違った意見への配慮も忘れません。一時的に受ける誤解を細々と気にせず、積極的であると共に、静かに内省するところもあります。

植物・動物など自然に対して興味を持つと同時に、美術・芸術・宗教に対する興味も並々ではありません。旅行が好きで、正に自己実現思想の実践者です。

清少納言は、晩年大納言公任と会い、父の月の輪の旧宅が人手に渡っているので、老後の住宅について交渉をしています。努力の末、目的を達し、旧宅の池の見える隣りで生活を

することが出来ました。今だったらきつと老人の生活保障に對して、先頭に立って闘うでしょう。交渉力・外交力も旺盛です。民教審のPRについても相当な力量を発揮するでしょう。女性と子どもの人権運動団体を結成し、十八歳からの女性有権者運動を指導するに違いありません。ただ清少納言の思考は、あくまでも対話が基盤ですから、完全野党ではなく、政権に對し、与党であり、批判党でもある立場を取るでしょう。清少納言が仮に社会党の女性党首になったなら、独自の提案をして、自民党と連立政府を作るでしょう。

そして、民教審の提言を基として、先にかかげた施策を実行するでしょう。これらの提言は、長い自民党政府の下で生まれたものを改良するための案にほかならないのですから。自民党は慎んで受け入れてこそ、民主政治だと説くでしょう。帰国子女について抜本的な対応をし、日本人学校の大改良を行うでしょう。

権力・金力をバックにいばるような人に対しては、徹底して批判するでしょう。あらゆる暴力に對しては、否定するでしょう。清少納言は兄が殺される場にいたのですから。

会話の中に中国の詩をとり入れておりますように、国際的視野を持つ清少納言は、「国立女性文化院」を創設し、すべての女性と子どもの不幸をなくす対策を画期的に進めるでしょう。清少納言は、枕草子で、「たとえなきもの」「遠くて

近きもの」「近くて遠きもの」など、一面的な反対語学習を一層発展させ、物事の異義同義、共通項を創造し、変化、部分と全体との視点を見る思考の多様化と、しなやかさを主張しています。

「清少納言は偉人」（岸上慎二氏）ではありませんが、枕草子の成立には、どうしても不可欠なのが、皇后定子と中関白家（道隆・伊周・隆家）です（下玉利百合子氏「定子皇后」他）。

中関白家の文化土壌は、道隆の妻の里である高階氏で、学問・芸術を家風とする家柄です。「蜻蛉日記」「更級日記」などと清少納言の共同作品であるという説があるほどで、八歳下の皇后定子の存在が、清少納言の才能を開発したと言えます。

枕草子に満ち満ちているユーモアは、「をかし」の思想、「見立て」「引き立て」の思想です。すべての存在に対する批判―見なおし―の精神、それはどうしても、和歌から連句へ発展し、そして散文と随筆の創設となったのです。次の散文詩が、千年前の作品であることに、現代人は驚きます。

月のいと明かきに

川をわたれば

牛のあゆむままに

水晶などのわれたるやうに

水の散りたるこそをかしけれ

（をかし＝全くすばらしく快い）

主観的な美の追求が短歌であるなら、客観的な美と存在の追求は、随筆と散文詩です。清少納言は、自己の思考を、客観的な美と愛の世界、自由な思考の世界に構成しとどめるべく、懸命の努力をしたのです。

紫式部より二十歳以上長生きをした清少納言は、二人の兄の死を見送ったとき、自分の一生をどう振り返ったでしょう。定子皇后陵を仰ぐ月の輪に、過ぎ去った栄光を見つめたに違いありません。そして、未来への栄光とするべく、枕草子を残すことに最後の力をふりしほりました。藤原政権の力は下向し、摂関政治の晩歌のあと、武力と権力の荒れ狂う院政が始まります。男中心の時代です。女性歴史の表面から明治時代まで消えていきます。

不朽の名作枕草子は、源氏物語に増して、今新しく、^{よみがえ}甦り、脚光を浴びる日は近いのです。池田亀鑑博士は、それを祈りつつ他界なさいました。今を去る三十二年前です。

清少納言枕草子は、女性と子どもの、自立と自己実現への教典であります。男性が、真に人間性に満ちた男性であり、女性と共修する新しい時代への、それは、道しるべであります。

（池田亀鑑著 名作『清少納言』復刻準備中です。清少納言枕草子研究会入会をご希望の方は編集部までどうぞ）

（よしむら みつお・元小学校教員）

政治を手づくり

三井 マリ子



「エッ……」

一瞬、ことばが出なかった。沈黙を破って小さな声が「できるんですか」とつぶやいた。我にかえった四人の女たちは次々に喜びと驚きのいりまじった声をあげた。

十月七日(水) 午後一時。東京都議会の薄暗い一室。私たちが喜びにわかせた原因は、教育庁の課長の「メンツにこだわらないで計画を変更するつもりでございます」というひと言。当の課長はひざの上に手をきちんとそろえ、表情を変えずに坐っていた。「どうしてそんなに喜ぶんだろう」とでも言いたげだった。

実は、七月はじめ、私は都議会議員として、生まれてはじめて厚生文教委員会の審議に出た。私の前にはぶ厚い資料が置いてあり、なにやら数字や図面でビッシ

り埋まっていた。質問をするにも、今、目にしたばかりの資料をペラペラめくるのに精いっぱい、時がどんどん過ぎてゆく。「異議なあーし」の声が耳元をすぎ、委員会は終わってしまった。三〇一億円をかけるという都立芸術文化会館の建設案が決定されたのだ。「保育ルームがない」と気づき、何か言わなくっちゃと思った時、すでに委員会は散会していた。恥をしのいで、担当職員に「これもう決まっちゃったんですか? 保育ルームが見あたらないんですけど」と聞いてみた。「ハイ、十五年前からの案なんです。ようやく着工です」と彼氏。

地上十階、地下四階。床面積四万六千㎡。池袋駅徒歩三分。教育庁報にも「国内最大の芸術文化の殿堂」とうたっている。私たちの税金三〇一億円もかけて作られる都の公共施設に女たちの声が反映されないなんて……。

なんとかしたかった。

阿佐谷にある「三井マリ子と新しい政治を創る会」の運営メンバーのひとりに「子連れで参加できる政治を変える会」というグループを持っている人がいる。彼女は、ふた言目には「保育はどうするの？」と私たちに迫る。どんな会合にも託児をつけるのが常識だと主張し、時々忘れそうになる私の尻をたたく。彼女の反応は早かった。ダメでもともとよ、とばかり、八月にはいつてから一緒に署名運動をはじめた。

・初めに水上忠教育長宛に要望書を持参した。都職労の設楽さんや、男の子育てを考える会の平山さん、丹原さんも加わり、多彩なメンバーで論陣をはった。担当者は「十五年前からの構想だ。構想の段階で多くの方の意見を取り入れるために委員会も作った。十五名のメンバーには女性も二人いたけれど保育ルームなどという話はでなかった」と言う。それでも食いさがる私たち。やっと「楽屋を兼用することぐらいは考えられると思います」とチラリ。大きな山がほんの少しだけ動いたような気がした。

第二弾は、鈴木俊一都知事に出すことにした。「芸術文化会館に保育ルームを設置させる市民の会」というナガーイ名の会もできた。会の世話人になってくれた城田さんは、忙しい仕事の合い間に、会の署名集めをボランティアでしてくれた。「見知らぬ人からがんばって下さいと、切手や現金でカ

ンパを送られると忙しさも吹きとぶの」と笑いながら。

二ヶ月で二千四百人の署名が集まった。突然の思いつきの上、時期を急ぐ問題のため、手続きに時間のかかる政党や大きな組織から支援をいただくことはむずかしかった。組織とは無関係の女から女へ、女から男へ、男から女への運動だった。小さい赤ちゃんをいつも自転車に乗せ、署名集めに奔走した友人の円満さんは、一ヶ月に百人の名前を集めあげた。そしてネスカフェのCMコピーじゃないけれど結果は「やってみたらおいしかった!」のである。

たった三〇㎡の小さな空間。変更費用もたった四〇〇万円。「こんなもので満足したら政治家じゃないね」という男もいたが、この小さな一歩こそ私たちの目ざす手づくりの政治ではないか。女は政治に無関心だという論調も世間にはある。だけど、東京都の予算ひとつとってみても女が関心を持てそうな話題はひとつもない。九月に成立した補正予算千三百二十五億円中、建設局だけで五百五十九億円なのだ。三分の一以上である。土木建設事業に流れる私たちの税金。住宅ならまだしも道路建設偏重の政治がどうして多くの女たちの生活に関係があるというのだろう。むしろ、こんなハコ物づくり政治が横行する中で、よくもめげずに生きている女たちよ、と感心するぐらいだ。私たち女が欲しいのは、物のの中身だ。ソフトだ。松寿園の痛ましい火災事故以来、それ

行け、とばかりスプリングラーが設置された。その予算二十億円（福祉関係のみ）。しかしスプリングラーが反応するような大火災を起こさないよう毎日安全にくらすにはどうしたらいいか、という根本のところは触れられていない。夜中に老人のしもの世話や、ひっきりなしに鳴る呼び出しブザーの音に大忙しの職員の待遇改善には予算がつかないのである。

病人の世話をする人のほか、ゆっくりと火の元を点検して歩く職員が配置されていたらあんな痛ましい事故は防げたかもしれない。だけど、尊い生命を犠牲にして叫んでいる福祉の充実も、政治家の耳には届かないようだ。私たちの未来は、税金をどう公共サービス、福祉に使ってもらえるかにかかっている。立派な建造物、ハイテクの医療機器ばかりではなく、そこに働く人が充実していかなくては何の意味もない。夫婦共働き時代、高齢化社会に必要なものが、今の日本の政治姿勢に一番欠けているような気がしてならない。

さて、国際都市トーキョーにふさわしい（？）国内一の芸術文化の殿堂に、ヨチヨチ歩きの子どもを連れた夫婦や、赤ちゃんをおぶったお母さんがフラリと訪れることが可能になった。性差別で訴えられていた鉄鋼連盟の幹部が「大手町はおなかの大きい女には似合わない」と公言したことがあったが、東京都から「子連れの人には、芸術文化会館は似合わない」などというセリフを聞かずにすんでホッとした。子連れ

の人たちが出はいり自由になれば、なんとなく服装もカジュアルになりそうであれしい。それに、東京都だけで四歳以下の子どもは六十万人以上いるのだから、この保育ルームのおかげで来館する潜在人口がグッと増え、建てた側にとっても喜ばしいことではないだろうか。

次の課題は、どんな保育方法にするか、である。

東京都は、あちこちで活動が続いている女たちのグループや、子育てを考える市民団体とこれからも接触を持ち、彼女（彼）たちのアイデアを取り入れてほしい。「メンツにこだわらずに」。

保育のあり方については専門の方がたくさんいるので私が筆をとることもないように思うものの、今回、芸術文化会館に保育ルームを設置する運動のために集めた資料の中から少しだけご紹介する。参考になればうれしい。

イギリスはロンドンの例である。

ロンドンの女たちは保育を四種類に分けている。ひとつは一日中あずけられるフルタイムの保育。第二は朝とか夕方に一時的にあずけるパートタイムA型保育。第三に他の子どもや親といっしょに遊んで、ある時間をすごすパートタイムB型保育。第四は学校と関連づけて子供が自由時間をすごす学童保育。なるほど、都心に勤めている親には、八時から六時までのフルタイム保育が必要かもしれないが、自宅でお店を

開いている親にはパートタイムA型で充分かもしれない。また三歳まではどうしても私の手で、と考えている団地住まいの母親には、パートタイムB型がうってつけだ。

フルタイム保育には、公立、私立の保育園がまず筆頭にあげられる。そのほかに日本にまだなじみの薄い職場内保育(ワークプレイス・ナーサリ)の存在がある。女性グループのキャンペーンが実り、少しずつ増えてきているようだ。ワークプレイス・ナーサリ・キャンペーンという団体の最近のテーマは会社内保育所が免税対象になるように法の改正を進めることである。政治家、組合、保育に関心のある団体に働きかけ、政治課題にしようとしている。

私がうなづいてしまったのは、次にあげるパートタイム保育の多様さである。これだけバラエティに富んでいれば、イギリスの親はゆつくりと仕事と、家庭をエンジョイできるだろうに、とうらやましく思った。

①チャイルド・マインダーズ(保育ママにあたる。職業名を女性と特定しない言い方に注目) 自宅を開放して共同保育をする。登録制。自宅を衛生面、安全面、広さなどからチェックされる。無料でおもちゃや道具が貸与される。チャイルド・マインダーズの情報交換や後輩の訓練指導などのためのグループもある。全国組織も作り権利の向上に働いている。現在四十万の区に四〇〇人。ちなみに一千万人の東京には四

〇三人しかいない。

②ワン・オクロック・クラブ(午後一時の託児) 公園に備わっている親子のための施設。お昼すぎに公園に出かけた親が子どもをあずけ、自分はゆつくり別室でくつろぐことができる。パーティや動物園めぐり、パントマイムなどの行事のほか、公園をかけ回って遊べるし、雨の日は室内に完備しているつみ木や人形で遊ぶことができる。無料。四時半まで。

③プレイバスとモービル保育(二階建てバスを利用した移動保育) 五歳から十六歳までの子どもに開放している。二階建てのバスの効用は、子どもは二階で窓から変わる景色を見て楽しみながら備えつけのおもちゃで遊ぶことができ、子どもにわずらわされたくない親は、下でゆつくり大人同士でお茶を楽しめること。無料。

④親子のためのグループ(人口四十万の区に六〇のグループが存在している)

⑤プレイグループ(午前中だけ、子ども同士で遊べるスペースを提供している団体) プレイ・ペアレント(遊び相手となる人)とケアをする人がいて子どもがのびのび遊べる環境をつくっている。

⑥パートタイム・ケア(一時保育者)

⑦カギツ子用プラン ケア・ワーカーが子どもたちを始業前と授業終了後にあずかる。簡単なお茶と、ゆつたりとくつ

ろげる家庭的なふんいきの部屋を提供して親の帰りを待つ。

以上、恵まれた保育内容に感嘆させられるが、イギリスの女性たちにはまだ不満のようだ。サッチャー政権以来、地方の福祉施設に降りる予算がどんどん削られ、充分な保育ができないと嘆いている。その上、子どもや病人、老人の世話は女がやるものという根強い性別役割分業観が、待遇改善の足を引っばっている、とも。

なんだか、根っこところは日本もイギリスも変わらないようだ。とりあえず、私は私のできる所で、私たちのためにウンと声を上げていこう。芸術文化会館

多様化する家族

家族の転換期

今、家族は転換期にある。

の小さなスペースを女たちの声で勝ち取ったのだから。総床面積の千五百分の一にすぎないけれど、そこから全てが始まるのだから。

♪女の力を、可能性を

一人より二人

二人より三人

何かができる

私たちの子どもとそのまた子どもが

生き続けられるように♪

(渡辺みえ子さんの詩「マリコ」より)

(みつい まりこ・東京都議会議員)

善 積 京 子



書店には、家族の危機を唱えるものから脱結婚・シングルライフ奨励のものまで、家族に関する様々な本が所狭しと置かれている。結婚・家族のあり方が問われだし、多様なライ

フスタイルの模索が始まっている。本屋の状況は、このことをよく現している。

今から四〇年ほど前、人類学者のG・P・マードックは、彼の収集した二五〇の世界民族サンプルに夫婦の同居が共通して見られるとして、〈核家族の普遍性〉を主張した。さらに彼は、家族の不可欠な機能として、経済（夫婦の分業）・性・生殖・養育の四つを掲げた。

ところが、近年、「男は外、女は内」という夫婦の役割分業は女性の抑圧・差別の温床であるとフェミニズムの立場から批判され、夫の家事・育児への参与を要求する〈役割相互乗り入れ論〉が支持されてきている。既婚女性の就労率は上昇し、性別役割分業は意識のレベルではまだ色濃く残っているものの、実態としては崩れつつある。

家族の変化は夫婦の役割分業の領域だけでない。核家族の前提であった同居にも揺らぎが見られる。単身赴任による別居はもはや珍しい出来事ではなく、日常的なものになっている。労働省の一九八六年の民間企業調査によると、海外勤務を除く単身赴任者は全国で約一七万五千人にも達し、民間労働者百人に一人の割合にのぼっている（毎日新聞一九八七・九・二七）。戦時中は「赤紙」で夫は戦地に赴いた。今は会社の「辞令」で。〈企業戦士〉と〈銃後の妻〉とは実质的を得た表現だ。〃お国のため〃が「企業のため」に変わったただけ。企

業があつてこそ家族や個人が存在できると思ひ込まれている。個人の健康・家族の生活を犠牲にしてまで、企業に奉仕する必要がどこにあるう。自分にとって、何が一番大切なのか、じっくりと考え直してみる時期にきている。

今日は、こうした強制的な不本意な別居ばかりか、お互いの仕事・生活リズムを尊重するための積極的通い婚が出てきている。自分の生活時間を確保しながら、相手との関係をつまでも新鮮なものにしておきたいと願う人には、この形態は適しているかも知れない。もつともそれは子どもがいなければの話である。子どもというファクターが入ってくると、事態はそう簡単でなくなってくる。どちらが子どもをみるか。子どもを引き取った者にはかなりの負担がかかってくることは、目に見えている。子どもの誕生を契機に同居に踏み切るカップルも少なくない。

法律婚への疑問

私の受け持つ「家族社会学」の時間に、学生に次のようなクイズを出すことにしている。「結婚」「入籍」のことか？」と。

正解の「ピポ」は「ノー」なのであるが、いつも、ものみごとに全員が誤答の「ブー」で、ガツクリ。現行民法では「入籍」という法律用語は、子どもの出生届時など全く

別の所に使用されている。現在の戸籍は夫婦単位に編成され、婚姻届が出されると、それぞれが親の戸籍から出て新たな戸籍が作られる。したがって、結婚とは妻が夫の「家」に「入籍」することではない。もっとも、彼らが間違えるのも無理はない。マスコミなどでも、婚姻届を出したことを「入籍」としばしば表現し、日常的にも「嫁に行く」「嫁をもらう」といった言葉がよく使われる。明治民法の「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル」の感覚が今なお多くの人たちの間で生き続けている。しかしながら一方では、現在の婚姻制度を個人主義的観点から批判し、婚姻届を出さずにシングルライフや同棲状態を敢えて選ぶカップルが登場してきている。

歴史的にみると、届出婚主義は明治時代に戸籍制度の補完物として採用され、それ以前は一般庶民の間では共同体、近隣への披露の儀式だけで結婚は成立した。法律婚には経済力のない女性を保護するという一定のプラス面があるものの、互いを外的・社会的に拘束しあい、対等で伸びやかな二人の関係を疎外していく面がある。経済力と自立意識を持ち始めた女性たちは、法律婚や夫の姓・家の「氏」を名乗ることに懐疑的となっている。実は私もそのひとりである。

十数年前婚姻届を出した時、私は、「子供を彼と一緒に育てたい。彼にも当然父として法的に責任を持ってもらわない」と考えていた。しかし姓だけは変えなくなかった。結

局、職場も含め日常生活では旧姓を通称として使うことにした。その後、非婚の母の仲間と巡り会い、戸籍や婚姻の歴史を研究するにつれ、「届出婚」に疑問を持つようになった。夫婦や親子の関係は日常的関わりの中で創って行くもの。法的なもので関係を拘束・維持できるという考えは、幻想なのだ。

諸外国での同棲の増加

日本でも、婚前の性関係は珍しいことではなくなったが、同棲となるとその数はそれほど多くはない。ところが、先進諸外国では同棲が一九六〇年代後半から著しく増加し、ごくありふれた一般的社会現象となっている。

たとえばアメリカでは、「同棲」所帯は全所帯中の三%を占め、一九七〇年のほぼ三倍にのぼっている。アメリカでは、結婚せずに長期間同棲することは少なく、ほとんどが関係を終えるか結婚し、結婚の代替物というよりも、配偶者選択の一過程として機能している。フランスでも、同棲数は五月革命後増加の一途をたどり、全国平均八組のカップル中一組は結婚登録せずに住んでいる。特にパリでは多く、五組に一組の割合になっている。個人を拘束し合う結婚をきらって同棲に入る若者が多いが、しかし、結婚せずに子どもを生むと不利なため、妊娠や出産を契機に結婚に踏み切る者が少なくない。

い。

北欧諸国では、同棲は一九六〇年初めまで「逸脱行動」であつたが、一九七〇年中頃には「一般的行動」、今日では「法律婚」と同じ「社会制度」となり、法律婚と同棲は限りなく近づいている。同棲している者の多くは自分たちの關係を結婚に匹敵するものと考え、半ば永続的選択として同棲を選んでいる。その背景には、第一に、二人のプライベートな性關係をわざわざ国家に結婚として届け出る必要がないという価値觀の浸透がある。第二に、女性の労働市場への進出、社会保障の充実により夫に經濟的に依存する必要性が消滅したこと。さらには、政府は結婚や男女の共同生活に対し「中立的立場」をとり、同棲者や非嫡子への法的・社会的差別が消滅したことがあげられる。今日では法的に結婚したことで得られる法律上の効果は失われ、婚姻率も低下してきている。その中であえて同棲から結婚へ移行する人は、結婚に対して「生活保障の場」を求めるというより、お互いの「情緒的再確認」のためと言う（詳しくは、善積京子他著『脱・結婚』世界思想社を参照のこと）。

スウェーデンの婚外子出生率は四二%（一九八二年）に対し、日本のそれが〇・八%と知れば、詳しい事情を知らない人は、「スウェーデンは病理的社会であり、日本はなんと健全な社会であることか」と思うかもしれない。眞実は逆であ

る。日本には、結婚していないということではかたなく中絶した人がどれほどいることか。日本の婚外子出生率の低さは、非婚の母や婚外子に対する差別の強さ、女性の經濟的自立が困難なこと、女ひとりで子供を育てにくいことの反映である。これまでの日本では、特に子供を産み育てたい人にとって、非婚の道は厳しかった。今、その道が徐々に切り開かれてきている。

性——生殖——養育の分離

変化のもう一つ大きな流れは、これまで結婚に結び付けられていた性——生殖——養育行為の三位一体が、避妊や生殖技術の發達を背景に分離してきていることである。まず第一は生殖・養育機能を拒否する結婚である。かつて子供は、家族の經濟力を保つための労働力や老後の保証のために不可欠の存在であり、親であることで威信も獲得できた。ところが現在、子供を当てにすることはできない。育児は他の魅力的な生活目標とは両立困難と見なされてきている。生み育てることの意味とコストを深く考慮し、意図的に子供を産まないカップルが増え、西ドイツでは社会問題にさなつてきている。

第二はシリーズ結婚である。〈恋愛結婚イデオロギー〉に価値を置き、その時々の恋愛感情に従つて離婚・再婚を繰り返すもので、現在アメリカで典型的にみられる。恋愛とは、

本来移ろぎやすいものである。それを結婚という制度によって持続可能なごとく扱うのは、〈恋愛結婚イデオロギー〉の虚構にすぎない。シリーズ結婚では、あくまでも恋愛と結婚の一致が追求され、その結果、“継母”“継父”“腹違いの兄弟姉妹”などの複雑な家族ができあがる。

第三のオープン・マリッジでは、恋愛と結婚の完全な一致は諦められる。夫婦は生殖・子育てのパートナーとみなし、婚外の性関係・恋愛関係を互いに認めあう。女性の職場進出は異性との接触機会を増加させ、夫の専売特許であった“浮気”を妻もしだしている。一夫一婦婚や恋愛結婚が十分根づかず、親子関係が夫婦関係に優先する日本社会では、この型が将来、主流になるかもしれない。

第四はシングル・マザー、ファザーの単身家族。社会保障や仲間のコミュニティに支えられ、子育てを単身で行う。人工ミルクにとどまらず、人工授精・代理母までもみられる現在、パートナーがいなくても、女も男も親になって育てることが可能となった。離婚の結果としてだけでなく、主義・スタイルとしての単身家族が出てきている。

ライフスタイルの多様化

家族社会学のテキストに「人はふたつの家族を経験する」とよく書かれている。すなわち、定位家族（その人が生ま

れ、育てられる家族）と生殖家族（結婚してつくる家族）である。その前提に、「人は結婚するもの」という発想があり、結婚していない人は人生の落後者としばしば見なされた。ところが今や、結婚しないひとり暮らしの生活を積極的に選択する人が登場。特に仕事をもつ女性に〈シングル〉志向が強い。現在、「結婚適齢期」の男の数が女よりかなり上回り、「結婚できない男」が増えている。「結婚したがるのは女」と言われてきたが、事態は逆転。「不便だから結婚する」という男の意識では、女は結婚に合意しなくなってきた。

価値観が多様化し、マードック流の〈核家族〉はもはや家族の典型でなくなった。この流れを“病理現象”と捉えるのは、時代錯誤であろう。過去の家族に郷愁を覚え、未来をアノミーと危惧する人がいようと、多様化の流れは避けられない。産業・テクノロジーの発達もたらす多様なライフスタイルを個人の選択の自由の拡大と積極的に受け止め、これに対応した社会制度を整えていく姿勢が今後必要となろう。

（よしづみ きょうこ・大手前女子短大）

小学校では

新しい家庭科を創るために

蛭 間 裕 人

比留間先生

家庭科でがんばる

—洗濯と物質としての繊維—

承前

食品添加物を扱った授業で書かせた一言感想を読む。この問題をめぐっての社会大衆情況がみごとに反映している、と比留間比呂志は思った。

気になる→しかし気にしていたらノイローゼになる→だからなるべく、食品添加物に関する情報や意見から目を外らそうとして

いる→しかし、やっぱり気になる。

体の不調が気になっていても、病院に行って検査の結果、助かる見込のない病気と診断されるかも知れない。病院に行つて診てもらふことを、何となくためらっている状態に似ていると比呂志は思う。

日常、忘れていたいと思う事を突きつけられるのは、不愉快なことだ。

食品添加物をめぐって、人々が感じている「イラダチ・イライラ」を、彼ら彼女らの一言感想の中にも窺うことができる、と比呂志は思う。

「イラダチ」「イライラ」を回避するために、人々は「厚生省が許可しているんだから大じようぶ……」とか、油が酸化した時の毒性を考えれば、酸化防止剤を許容すべき……」などの宣伝に寄り添ってしまうのだろうか。

だから添加物問題について口うるさい人や、この問題を追求することを任務としたラジカルな集団に対して、むしろ警戒心を働かせるようになる。そして自らも「気になっていても口に出さない」ことが、普通の人の証とでもいうように振舞うのだ。

添加物という「モノ」と、それが人の体の中で起す「作用」について知り、「できるだけ食品添加物の少ないものを選びましょう」という結論で終わるのが家庭科の限界なので

あろうか。

たとえば酸化防止剤は、いわゆるスナック菓子類が工場で大量に生産され、倉庫、スパーの棚と、長い日数をかけて消費者に渡すことを可能にしている。これは消費者にとつてではなく、企業にとつて都合のいいことなのだ。——ここまではいわゆる消費者教育の範囲に入るだろう。

「モノ→作用」の関係を学習することは、ひとにとつて（児童にとつて）必要なことだ。これが出発点であり、基礎である。

「企業→消費者」の關係に目を開かせられる、ということとは、人間にとつて、社会的人間にとつて必要なことだ。

比留間比呂志は、その先に、もう一つの關係を意識する。企業を「資本」に、消費者を「労働者階級」に置き換えるのだ。そうすることは、ただ言葉を入れ換えただけには止まらない。「資本」が本来持っている「搾取・収奪」の構造を映し出してくるはずである。それが見えるか見えないか——それは、階級意識の形成にかかわっている——見えるようにならないかならない。と、比呂志は思う。

生協Ⅱ生活協同組合は、値段と安全性を前面に掲げている。そしてその範囲で、商売の拡大にだけ熱心な生協もあるようだ。しかし、組合員の中に生産と消費の社会的關係に眼を開く者が育ち、政治に係わり始めた生協もある。自分の

（家族の）体への心配から石けんへの切りかえに発しながら、廃水のもたらず川や湖水の汚染へ目を向けるに及ぶ。米の問題などに取り組み、社会的關係を追及していく中で、階級意識の形成へ繋がっていくものが芽生え始めている、と比呂志は思う。

比呂志は彼の勤める十七小の職員で生協の班を作った。それは、「安全性・値段」の域を出ない活動である。昼間に持たれる会合などにも、一度も参加できずにいる。が、生協運動の将来への期待が、彼をしてそのような活動を行わしめている。

食品添加物一つとっても、比呂志の問題意識はこのように拡がっていく。が、小学校の児童を前にして、いったい、どれだけのことが出来ようか。授業の中で、比呂志はこのような彼の思想を語らない。生の言葉を口走ったところで、それを受け取る準備された状態が出来ていない児童の上を、風のように吹き抜けていくだけだ。

小学校の児童には「モノ→作用」の知識を身につけ、ものの考え方として使いこんでいくことに期待するしかない。

これは地獄絵だ——と比呂志は思う。お寺の暗い欄間やぶすまに描かれた閻魔大王・針の山・血の池のイメージが、昔の子供たちに、してはならぬことを教えたのと似ている。違うのは地獄絵がウソであるのに対し、添加物の危険はホント

だということであろう、と思う。

洗濯機による洗濯、そして物質としての繊維

六年の教科書を拡げてみる。上着のせんたくの小単元は、「五年で学習したことを参考にして」として「もみあらい」「せんたく機あらい」「つかみあらい」と並んでいる。

比留間比呂志にとってこれは、ちよつとおかしいことであつた。材質によつて洗ひ方が変わる。ということはあるだろう。それにここに言う「上着」とはTシャツやオーブンシャツ・スポーツシャツの類なのだ。そういう絵で説明してある。

スーツやブレザー・ズボンなどのドライクリーニング、Yシャツなど襟の仕上げが難しいものなどはクリーニング店へという家庭がほとんどであろう。

家庭での洗濯の主体は洗濯機によるもので、「手洗い」は全く補助的なものでしかないと思う。子供たちがふだん着て登校している衣服の大部分は電気洗濯機で洗濯しているにちがいない。

学校の家庭科室に、電気洗濯機は一台しかない。これではクラス全員に体験させるのは時間の無駄だ。そこで比呂志は各家庭で行われている「洗濯機による洗濯」取材し記録す

ることを課題とした。記録の方法として、彼自身がやっている手順を「作業運行表」のようなものにまとめ、印刷して配つた。それに倣^{なま}つてレポートを作るように指示したのであつた。

作業運行表についていくつかの説明をした。

①僕のところの二槽式と、全自動の洗濯機とでは、手順もずい分ちがつて来るだろう。

②僕は「石けん」しか使わない。石けんが良く溶けるように夏でも湯を使っている。湯は風呂を沸かし、それを使っている。

③この例のⅠⅡⅢの分け方だが、

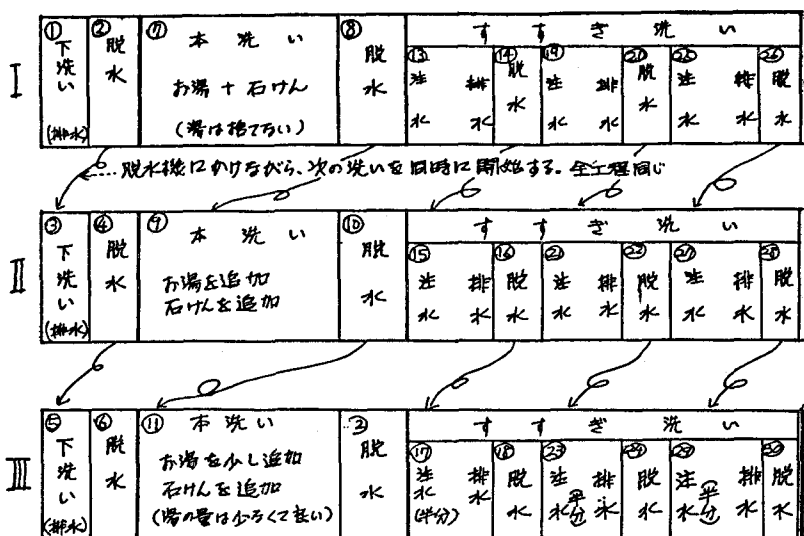
Ⅰには化繊のものを入れる。化繊は汚れを吸着するといわ[※]れているからトップに入れる。あと、比較的汚れの少ない木綿もの。

※指導書には、「ポリエステル[※]の衣服は下洗ひはしない(再汚染)」と書いてある。

Ⅱは汚れの大きい木綿もの。

Ⅲは靴下・足ふき雑布など。靴下は量も少ないので、あえて別にしなくても良いかも知れないが、気持の問題で分けている。

④すすぎ洗ひは、水を流しっぱなしにしてやっていた時もあつたが、今では、「ため洗い」をしている。(その意義)



すすぎ洗いは、季節の変わり目で、しまつて置く下着などは回数を多くするが、乾いてすぐ着るものは三回やれば十分だと思つてゐる。

そして「僕のやつてゐるのが普通なのか、手抜きなのか良くはわからないが……」といい、各家庭で母親などがやつてゐるのを見て記録するように指示した。もちろん、自分でやつてゐる人はそれを記録すればいい。

提出されたレポートは、期待を上まわつて良く書きこまれていた。「うちでは、私が学校へ行つてゐる時に洗濯をしてゐるので、お母さんに聞いて書きました」と正直にことわつてゐるものもある。

一言感想を読む。今まで洗濯というと、わかり切つたことのように思つてゐたが、実際につき合つてみて、かなり強い印象を持ったことが窺われた。

「待つていればタイクツ、機械が動いてゐる間に何か、と思つて始めるとすぐブザーが鳴る」など実感した者にしか書けない実感が述べられていたり、

「けっこう大変な仕事だということがわかつた。お母さんは、ずうつとこういう仕事をやつて来たんだなあ」など、泣かせる文句もあった。

「仕事は、手順やだんどりが良ければいい」

課題を出す時そんなに強調したつもりはないのだが、比呂志

の言葉をオオム返しにしているのもある。

洗濯について教科書に沿って一応のまとめをする。洗剤の選び方!? 漂白剤などのこと。湯の温度。しぼり方や洗濯機にかける時間(機械的な力に対する耐久力)。アイロンかけの可否。これらは、繊維を作っている物質の化学的・物理的な性質による差異なのだが、こういう話が、スツと子供たちの中に入って行かない。エッ、何それ! といった感じで、言葉が行き所なく跳ね返って来る感じなのだ。

これは児童が日常生活の中で出会うモノを機能や用途(或いは最もブランドに関心が?)によって分類し認識してはいても、それを造っている素材・物質へまでは目がいつていないからだと思う。

比留間比呂志は以前から持ち込み教材として金属の学習を試みている。ガラス・陶器・アルミニウム・ステンレス・銅・プラスチック等のコップ(カップ)を見ることが始める。使い捨ての紙コップ・ビニールコップもある。コップ(カップ)の機能でなく、そこに用いられている材料||物質へ関心を向けさせる第一歩なのだ。

本質的な物質に迫る授業は、そのような幕開けから場数を踏んでいかなくは、とも思う。が、いつもそのような構想倒れ時間切れで、何もせずじまいだったという反省が彼には

あった。彼は思う。——繊維に限ってでも、何らかのアプローチを試みねばなるまい。

知識を整理するために、思いつくままに材料名を挙げさせてみる。木綿・羊毛・絹・ナイロン・テトロン……(物質名と商品名が混ざって来る)。それを天然のものと合成のものに分け、表にする。

繊維製品、特に布片をできるだけ沢山集めさせようと思う。布片の標本は材質の標本であると同時に、織り方の標本でもある、などと欲ばっているのだ。

集まった繊維、それは実験のための試料でもある。それを焰に触れた時、熱した金属板の上での変化、引っ張りなどの力に対して、酸・アルカリによる変化などなど実験すれば良いのだ。顕微鏡での観察も入れたらいい。

——が、実験用の試料さえ集まらないのだ。編み残した毛糸、裁ち残した布の切れ端、そういうものが今の家庭の中には残っていないのかも知れない。と、比呂志は思う。

彼自身が探し出して来た毛糸——それは以前、いわゆるジュース(着色飲料水)で染めてみる実験で使った残りだった——などで、この実験計画の端緒になるようなことをやってみた。顕微鏡で見る。

顕微鏡で見ても、羊毛の特徴とされる鱗片状の組織は、あまり良くわからない。既に、そういうものとしてのイメージ

を持つている比呂志には、どうやらそれらしく見えても、児童にはただモヤモヤとしか見えない様子なのだ。これは——と比呂志は考えこむ。スンプのレブリカでもない、あの模様を見せられないのかも……。

じっくり取り組まなければ駄目だ。と、わかっていても教科の進度に追われ、文集・アルバムなど卒業期の企画、卒論もまだ海のものとも知れぬ状態の今、「モノの探険——繊維編」は棚上げにせざるを得ない。



「政治の目」の 湯川憲比古さん



’87年春の公開ゼミナールでは、パネラーで参加、「現在七枚の名刺を使用中」と紹介された湯川さんを、都心の事務所にたずねた。「国会の文教委員会で、家庭科の男女共修問題を質問することになって、あわてて資料づくり走り回ったのがWeや共修の会と知り合うきっかけ」に。

衆議院議員、江田五月事務所の政策担当。

「’94年に高校で共修の家庭科実施のためにはその三年前の中学の時すでにその準備段階がなければ、いきなり実施は無理があるわけで、そこを目標に定めた運動が今、必要なので」

数多くの選挙戦をたたかってきた実績から運動のノウハウには強い。ご自身も、区議一回、都議二回立候補の経験が（過去の選挙戦、「勝率はきわめて高い」のだが、ご自身は今のところ落選）。

連載でも「なかまの会」の紹介があった。「これからの市民の運動は、代表をどんどん議会におくり出した方がいい。調査権の活用しだいでは、はかり知れないパワーを発揮できるのだから。Weの仲間からも是非！」

事業活動、多数。「ぴあ」の編集長&オー

一部にしかデーターの入らない、壮大な虫くいの表を前にして比呂志は言う。

「誰か、この表を仕上げて見ませんか？ 卒論としてでも」そして、これは特別の器具や薬品なしで、家ででも出来る実験だ、とつけ加えた。

「特別な道具や薬品がなければ出来ないものばかりが研究ではない。茶碗やコップ、酢や洗濯ソーダでできるのだから」

（小平市立小学校）

ナーの経験も。情報のネットワークの領域で飛び回る日々、名刺には、マーケティング企画、データーベース、コミュニケーション企画などなど、カタカナの仕事が並ぶ。

毎日、新聞十紙の他、週刊誌、月刊誌……に、テレビもできるだけ見る。

「世代論」をかなり細かく分析している。第一次戦無派に属する湯川さんからの「第三次戦無派の代表選手、江川の引退」や「新人類世代の分析」は、さすが「政治の目」をもつ人、切り込みが深い。

189センチの長身。学生時代は野球を。東京と近県を飛び回り、自らを「車人間」と称す。コモンセンス・リベリズムを目ざす政治家。市民パワーで、次回は是非当選してほしい方。

（青木）

中学校では

新しい家庭科を創るために

姫路サークル

香川敦子

男女平等教育の 柱としての家庭科

日本の教育制度の上で、中学・高等学校の家庭科が男女の別なく学習することになった今、中学校の技術・家庭科は大変むずかしい局面に立たされています。国連の、国際婦人年、差別撤廃条約の批准、こうした理づめでのルートは舗装されました。勿論これらによるのではなく、この前の教育課程の改訂のときから、家庭科の男女共修を

と一心に運動して来た大勢の人がありました。

かけがえのない、地球という宇宙船の中で、戦争をしないためには、平和を維持するためには、国と国の間でいろいろと細かく条約を結んでみても、いざという時にはとめられませんでした。大正時代の第一次世界大戦が終わったとき、本当に戦争はこりごり、永遠の平和をと、皆が思ったのです。けれども昭和一六年には、第二次世界大戦が始まってしまいました。原子爆弾は、敵も味方も、両方とも生きのこれない戦争を示してくれました。平和を求める声は世界にみちみちています。それなのに、なお、戦争がおこるのではないかという不安を、やはり皆がもっています。現に局地的な戦争状態は、地球上から姿を消していません。情勢の変化、リーダーの姿勢で、戦争になってしまいます。

ヒトは生物です。攻撃する本能と、おそれ逃げる本能をたっぷりもっています。本能といっても、いつでもむき出しで振りかざしているわけではありません。おなかがすかなければ（その刺激が脳の空腹中枢を刺激しなければ）、食べません。それと同じように、身の危険を感じなければ、やたらに攻撃はしません。身の危険を感じるか（自分だけでなく、自分の種族の）、不満がたまれば攻撃します。かなわない大きな圧力からは逃げます。逃げる行動は、逃げおおせればそれでよかったというのではなく、心の傷がのこります。これ

は地球と共に生きて来た、私たちを含む生物の本質です。

ヒトは、とてつもなく大きな脳を持つようになり、それによって築きあげた、とてつもなく豊かな文化を持っています。その脳によって、日常的に無意識に、本能をコントロールしています。けれども生物ですから、このコントロールのきかなくなるときがあります。国と国との間でも、幾度も幾度も失敗をくりかえしながら（歴史はくりかえすという言葉が、本当に本当と思われるほど）、今、地球の一つの願望として、平和を求めています。

あの国際婦人年をもうけ、差別撤廃条約を起草した国連という組織はそうした願望の結晶なのでしょう。そして、平和は一人ひとりの心のあり方からという考えで、平等ということを中心にすすんでいます。あらゆる差別、不平等を許さない、そういう目で世界を見ると、世界の人口の半数を占める女性が差別されている。今までの歴史というものが、攻撃本能にヒトのすばらしい脳の力をかさね合わせて展開して来たから、男性中心、男性優位の男社会ができてしまっていた、ということに気がついたのです。それは男も女も、子どもをも幸にするものではなかったと気がついたのです。

だから、平和と国際婦人年、平和と差別撤廃条約と進展して来たわけなのです。女性がえばりたい、女性を大切にしろということではないのです。

市川房枝先生は婦人が参政権を持たないという差別をとりぞくために一生たたかわれました。参政権を得た戦後も、婦人の地位向上のために八七歳まで、亡くなられるときまで先頭に立たれました。私たちの「家庭科の男女共修をすすめる会」という運動でも先頭に立つて下さったのです。参議院議員でいらつしやいましたから、国会でもとりあげて質問をして下さいました。選挙権獲得がなぜ、家庭科につながるのでしょうか。女性への差別の一つをなくす、そして、その平等が、人類の平和への基礎ということです。

しかし、と、市川房枝先生と共にたたかってこられた方々は、よく嘆かれます。婦人が参政権を得て、政治はよくなつただろうか、参政権を得て、婦人の地位は向上したのだろうか。参政権を得て平等になつても、婦人の地位が向上しなくては、実際の効果はありません。婦人の地位が向上するのは、口をあんぐりあけていけば、棚からぼたもちが落ちてくるというようなものではありません。一人ひとりが、少しずつでも、自己実現をはかって、私はこう生きていこう、私はこう生きる、と人間として浮上していくことの総和が、地位の向上だと思うのです。

家庭科が男女とも必修（基本的な部分）になったということとは、この、参政権や機会均等法の問題とよく似ていると思

うのです。文部省がいよいよ家庭科を男子にも学習させることにした、家庭科は男女とも必修になった、これで平等がで
き上がったと思つては大間違いなのです。婦人が参政権を得
たけれど政治がよくはならなかったように、機会均等法がで
きたけれど女子の地位があがったとはいえないように。

男女共に学ぶ家庭科で何を教えるかが大問題ということに
なっています。「男子にも家庭科」とお念仏のようにとなえ
て、何を教えるつもり？と意地悪げな眼つきで見ている人も
あるように感じます。私は家庭科の教師ではありませんが、
どんなわく組ができていくのだろうと、新築の家を夢みるよ
うな気持ちで期待しています。家庭科には、生活というものが
社会現象として変動していきつつある、そこで、学習する教
科でありますから、社会科などと共通点をもったむずかしさ
があると思います。こまごましたことはきめないでゆつたり
としたわく組がいいと思います。住居もそうだと思うのです
が広くて大きくて、材料を吟味して、最新の（コンピュータ
による。風呂はたけている、炊飯器はスイッチが入ってい
る。留守番電話はうけてある。……そして子どもは子ども部
屋でファミコンに熱中している、いつこの空間が家族のいる
家庭になるかのめどもつかず……）設備を試してみても、家族
のいこう家庭とは必ずしもなりにくいように、家庭科のわく
組も、それを通して生活が見えてくるような設計であつてほ

しいと思います。

しつかりしたものでないと、新しく家庭科の先生になった
人たちが、困つてしまわれるでしょう。今まで自分が学んで
来たものとは全く異なる観点で教えるのですから。その観点
とは、私にいわせれば、「男女平等教育の柱として」です。

こうした新しい「男女ともに学ぶ家庭科」で教育された人
たちが大学を卒業して、男女とも家庭科の先生になるときま
では、食べたことのないお料理をつくるようなものですか
ら、ディレクションがはつきりしていないと、食べられない
ものができてしまうかもしれません。先生だけでなく、親た
ちが「男女ともに学ぶ家庭科」でそだつて、当然のこととし
て、家庭の中が男女平等になるまでは、いろいろなちぐはぐ
が生じるでしょう。

私は最近「釜ヶ崎 一九八六年越冬」という、釜ヶ崎キリ
スト教協友会のパンフをよみました。仕事がなく、野宿をす
る人、冬には必ず凍死者がでるので、パトロールをして、毛
布をあげ、暖いおみそ汁と、おにぎりを配っている組織です
（その他いろいろ活動していますが）。「参加者の声」ものせ
てありました。それによると、

中二の生徒……昨日あたしは必死でおにぎりやら、みそ汁
やらを、Ｙちゃんと渡した。一人のおっちゃんが、あんたら
ぐらいの子があるんやというた。あたしはこの言葉をきい

て、家族の人に会いたいやろうなと思つた……。

小学一年の児童……ぼくが、みそ汁をくばりました。ぼくはかえつておっちゃんのことをかんがえたら、ねられませんでした。ぼくは三時までねられませんでした……。

子どもたちが大人になつたら、少しは世の中が変わるだろうと私は希望をもちます。新しい家庭教育で育つた今の生徒たちが、大人になつてつくる家庭がどうなるか、それが新しい家庭科の存在のとわれるところです。教育は永い目でみなければといわれます。とても今の生徒が、父親になつたからといって、母親になつたからといって、がらつと変わることはないでしょう。小さな変化の積み重ねが、あるときふり返つてみると、驚くほどの変わりようということがよくあります。

私は家庭科教育に、十人といろの家庭科をのぞみます。本来授業というものは、十人といろのものです。私などは、小学校で学んだことを忘れ、高等女学校で学んだことを忘れ、今の私があります。それでも、ある先生からある科目を習つたということ、その積み重ねで今の私があると思います。かわいがつてくれたおじおばたちも、私の情感に、知識にも、たくさんものを与えてくれました。しかし、学校という場、もっと具体的にいえば、あの教室のあの席で、あの科目をあの先生から教わつた（忘れた）ということは大きいと思います。何と説明していいかわかりませんが、学校教育とい

うものは大したものだと思うのです。だからこそこわいのです。だからこそ、平和の問題、平等の問題、環境破壊、公害などの問題が学校教育の中に組みこまなければならないといわれるのです。

こういう家庭科の変身を、家庭科の先生の周辺は理解しているのでしょうか。先生の家族、親きょうだい、夫、子どもはこの問題をどう見ているのでしょうか。一番近い技術の先生、同じ学年の担任の先生、教頭、校長先生はどうみているのでしょうか。

日本母親大会の、「男女平等教育、家庭科男女共修分科会」で、助言者として話をして下さった安田雅子先生が言われました。京都が高校の家庭科男女共修を実現するために奮戦していたとき、機会があればどこへでも行つて、例えば教育委員会、校長会、その他誰にでも説明する努力をしたとこのことを印象的に聞きました。

まず、家庭科の先生が、親や夫にさりげなくこの本質を理解させる工夫。子どもには、男の子にも女の子にも、自分の子どもが男の子だけ、女の子だけだからといって手ぬきをしないで、なぜ、男子も女子も家庭科を学ぶかを理解させましょう。自分の子どもにはつきりと平等教育ができなくて、どうして生徒たちに納得させられるでしょうか。

昔の人は村のことはすみずみまで知っていました。どこの清水のところには、いつ芹が生え始めるか、どこの葺はいつ頃とりにいけばよいか。しかし、山の向うの村のことは話をきいて想像するだけ、江戸のことは想像もできないという地球観をもっていたでしょう。だから旅人の遠い国の話は魅力的でありました。今、私たちは旅行をする機会も多く、テレビ、写真などで見て来たように地球上のあらゆる(?)とところのことを知っていると思っています。しかし、そうした情報の得にくい地域のこと、例えばアジアの北方の部分のことなど、見たりきいたりすると、あつとおどろく程、知らなかったことに気づきます。家庭科の問題も、多くの人々(教育にかかわる人でも)にとつては、将に北方アジアの生活文化なのかもしれません。差別撤廃、平和まで掘りさげなければ、中学で学ぶ家庭科ぐらい、大したことはないと思う人が大部分だと思っています。中学校の先生方でもそうでしょう。私は、家庭科の男女共修について、そこまで理解をもとめてほしいと思います。生活の自立も、単身赴任の問題も、老後の生活の問題も、その上にのるものであるといいたいです。

中学校に関しては、技術・家庭科という教科になっている以上、そのかわりにふれないわけにはいかないと思います。技術は歴史に深くかかわって来ました。その技術によって歴

史が展開した上に、今の生活が、社会が、家庭が組み立てられています。例えば、複雑になってみえにくいけれど、のこぎりで切るといふような、人の手に一番近い道具の使用から、切るといふ技術が発達していること、また洗濯機のボタンを押せば、洗濯ができてしまうというシステムには、目標の設定とか、問題の分析といふような、技術的な手順があり、それは家庭生活の中でも、料理の手順、掃除の方法などに、その手順の合理性として転用できるものだと思います。またそうした技術が産業となって生産活動をするとき、当然、環境、エネルギー、食生活の荒廃などに連なっていくことについて、それらを正しく理解するには技術の基礎的な知識が欠かせないと思います。また家庭で学ぶ領域には、そうした技術のもたらす精密機械の部品の完全な均一性、バラツキのなさという目標とはちがう一人ひとりの生き方の問題があることも学ぶべきでしょう。

ききたい人に、よくわかっていることを説明する(教えること) 楽しさに比べて、わからない人、きく気のない人に説明するのは、本当にしんどいことです。

今、新しい男女共に学ぶ技術・家庭科が発足し、その最初の担い手となる家庭科の先生方はこれを説明する責任があります。男性が、男性教師が本当に理解しなくては、やはり平等はまだまだといふことになるでしょう。

高等学校では

新しい家庭科を創るために

梶原公子

食べる「感覚」と 食生活のあり方

☆パソコンと家庭科

先日、ある家庭科の官制研究会で「パソコンを使った授業」を参観した。「家庭生活の設計・家族」の単元の内の一時間、その目標は「生活設計に基づいた生涯収入と生涯支出を、パソコンを用いて概算することにより、家庭生活の安定と向上のためには、計画的な経

済生活を営むことが大切であることを知る」となっている。

パソコン実習室で生徒は各々パソコンと向かい合っており、夫と妻（自分）の結婚年齢、妻の職業の有無、車や家の購入の有無、子供の教育費の有無などについて、キーを打ってゆく。生涯の設計が打ち終わると画面には、生涯の総収入と総支出とが年齢を追って折れ線グラフになって提示される。妻が職業を持たず、車や家を購入する、という計画だとグラフは生涯支出が赤字を示す。

「これでは借金を残して死ぬことになります。そうならないためにはどうしたら良い？ 共働きにしてみたり、車を買うのをやめたりという場合で入力してみなさい」

と、指導教員は指示する。私の前でキーを打つ生徒の画面を見ると、「夫24歳、妻23歳」となっている。「夫の職業は何？」と聞くと、「国家公務員ということにしてある」と屈託なく答える。参観後、研究協議が行われ、私の隣席の友人Oさんは発言した。

「パソコンを家庭科の授業に導入することが前提として授業が組まれているのですが、私は導入すること自体に疑問を感じます。この点をもっと討議する必要があるのではないか」これに対する主催者側の回答。「その意見を出すのは時期がすでに遅い。事態は導入する方向に進んでいるから、家庭科の先生方はそれに乗り遅れないよう研修して欲しい」。

そして家庭科の先生は機器を使いこなし、授業に生かし、「時代に即応した」家庭科を目ざして欲しいということだ。

話を聞きながら、喜々としてキーを打つ生徒たちの顔が頭をかすめたが、彼女たちの心はシラケているのではないかという思いを抱いたのは私だけだろうか。

「人生設計」というのは夢弾む作業だ。しかしそれが子供の教育資金に七百万円、住宅資金に三千万円、自分たちの老後の生活費に月々二十三万円、という具合に生涯稼がねばならない総支出額を計算し、これに沿って人生を綱渡りのように自分の敷いたレールから一步も踏みはずすことなく渡ってゆくこと。それが「家庭生活の安定と向上」であるという提示のされ方。高校生はここから人生設計や将来の生活像をどのようなイメージで受けとめるだろうか。諦め、虚無、倦怠、シラケ……が彼女たちの心に沈澱するのではないか。

パソコンという近代的機器がそれをカモフラージュしているだけなのではないか。

今、家庭科が直面する新たな問題がますます増える。

☆女子高生の食事感覚

さて、今回は家庭一般の食物の授業を考えたい。最近つくづく感じるのは、食に関する感覚の生徒との隔たりのことだ。

この四月から七十二人という大所帯の手芸部の顧問をして

いる（この数字が示すように必修クラブにも問題がある）。

十月、役員改選し、新役員と部の運営を話し合うことになった土曜日の午後なので、私は部長に「軽い昼食」を摂りながらやろうと、食糧調達を頼んでおいた。抱えて来た紙袋から出てくるのは、牛乳とサンドイッチ、あるいは菓子パンだろうと思っていた案に反し、それは一リットルのコーラ瓶と三袋のスナック菓子だった。

「それはねエ」と言おうとした私は言葉が引込んだ。元氣の良いアキヨが次々に袋を開き始めて話したからだ。

「先生、私たちね一時間目が終わるともうお腹すくの。だから授業が終わって先生が出て行くやいなや、教室中閉めてお菓子とかお弁当食べるのが日課なの」

そう言えば教室に入ると、ゴミ箱にはお菓子の袋や空缶が山盛りになっている。それにしても私が言った「軽い昼食」はコーラとスナック菓子のことではなかったのに……。

これに反してと言うべきか、このような「日課」だからと言うべきか、夏休みの課題のホームプロジェクトを食生活分野で出したところ、一三〇名中三十六人が「ダイエット」をテーマにしていた。「ごはんでダイエット」「ダイエット弁当」「一日千二百キロカロリーのダイエット」「三週間で五キロやせるダイエットプログラム」「酔のダイエット」「ウーロン茶でダイエット」などなど。

本校保健委員会の調査「食生活と体型と体力の調査」(86年度結果)をみると、体位測定の結果「太っている」「太りすぎ」が合わせて三十四%(ローレル指数による)。更に全生徒の半数近くが、間食にスナック菓子や清涼飲料をよく摂ると答えている。これだから肥満傾向になるのか。

調理実習の後でポリバケツをのぞくと、まだ十分食べられる野菜や、折角時間をかけて作った料理が捨ててあることが多い。やせたいという強い願望と飽食世代の高校生の食行動をみていると、食べたい時にいつでも食べたいものが口に入るといふ状況の中で、自分の身体にちょうど見合った食べ物を摂るといふ感覚の希薄さを感じる。

食することは「日常茶飯事」であるが、家庭科の調理実習は特別番組になりやすい。食物の授業を通して日常茶飯事としての食べる感覚を養いたいと考える。

☆沼田先生の「食養学」に学ぶ

食物の授業をかなり最近まで私は、栄養・食品・調理主体にやっていた。しかし現在は、大袈裟に言えば食哲学に基づいた授業展開が大切だと思う。

私の勤務校から徒歩で七、八分のところに大仁医院という内科医院がある。大仁在住の人に聞くと院長の沼田先生は「玄米食を勧める変わった先生」という評判だったが、以前

読んだ「断食(絶食) 少食のすすめ」(文理書院)の執筆者であったことから一度お話をうかがいたいと思っていた。

そのような折、軽い風邪をひいた私は大仁医院に行った。閑静なしもた屋風の建物で、畳敷きの待合室はがらんとしていた。沼田先生は豊饒かきしまくとした老紳士で、手早く風邪の診療を終えた。私は例の本を読んだのですが、と切り出すとこりして奥の書庫から、「これも私の著書です」と二冊の本を持って来られ、更に様々な文献や論文を示しながら自説を一時間に亘って講義してくださった。

欧米では今、肥満や成人病対策として日本食の有効性が認められ、これは長年先生が説くところだという。そして「これからの家庭科では、是非今話しましたようなことを取り入れてください」と言われた。二冊の本は、「病は食から」「医学の不安」(共に農山漁村文化協会)。先生の説かれる「食養論」とは、生活体系としての食と健康観の確立であり、そのために次の五つの原則をあげている。

- ①食物至上主義―命は食にあり、病は口にある
- ②穀物主義―人類は穀物動物である
- ③風土食論―その土地、その季節の食べ物を食べる
- ④一物全体食論―食物の全体を食べる。精製するほど本来の食べ物から遠のく
- ⑤陰陽調和論―人間の気質と食べ物の関係

五つの原則をみると、かつて日本人が伝統的食生活を営んでいる頃は人々に根づいていたものだったと思う。それが高度経済成長と共に、日本の産業が第一次産業中心から、第二、第三次産業へと転換するに従い、そのような食文化が失われていったように思われる。現在の高校生は70年代生まれである。彼女たちが先のような食感覚を持つに至ったのは当然かも知れない。しかし一方では「人間は幼児の時にはあった食べることの本能が、思春期には失われるので、それまでの本能の働きを知性に変えなければならない時期である」(ルドルフ・シュタイナー「教育芸術1」)

☆授業の展開

家庭一般の食物(35〜40時間)で次のような計画をたてる。

- 1、食物について学ぶ意義
- 2、私の身体と栄養、私の身体とエネルギー
- 3、食品と栄養素、食品とエネルギー
- 4、日本型食事と献立作成、調理
- 5、日本の食生活の変化と現状の問題
- 6、米の食べ方と問題
- 7、肉と魚の食べ方と問題
- 8、野菜の食べ方と問題

1〜4では、自分の身体と食べることの関係を、栄養素とエネルギーという側面から把握、更に実際の食品と結びつけ実物の多種多様な食品を用いて、それらの栄養とカロリーを把握し、日本型食事に照らして献立作成をやる(詳細略)。

以上の後「日本の食生活の変化と現状の問題」に入る。戦後40年間の食生活の変化を通して、今どのような食生活が望ましいのかを考えたい。

日本の伝統的な食形態は、風土や文化に根ざした米食中心の一汁二菜に代表されるものだった。けれど今みんなが食べるのは、このような食形態ではなく洋風や中華が一体になったものでしょう。一体いつ、そしてなぜ食生活は変化してきたのか考えてみよう、と話す。

第一の転機が第二次大戦終了時。この重大な年、一九四五年を知らない生徒が多いこと。彼女たちは戦後二五年もたって生まれた。敗戦当時(実は私も生まれていない)の日本の食糧難の様子を話す。この時「食糧援助」政策をとったのが、占領軍のマッカーサー。彼女たちは、マッカーサーの名にはうんうんとうなづく。この時の食糧援助がもとで、学校給食が始まる。学校給食と言えば、鼻をつまんで飲んだ脱脂ミルクを思い出すが、あれもアメリカからのものだ。しかし、学校給食の広がりとともにそれによるミルクとパンによって、食生活のパン食化洋風化は定着していった。

その後の経済復興、経済成長と共に社会や産業は変化し、みんなが生まれた70年は、食の企業化が進み、食糧自給率が低下している。「主な農産物の自給率の推移」（農林水産省調べ）をプリントし、みる。70年以降、米、小麦、豆、野菜などいずれも低下し、その分日本は輸入食糧に頼るようになる。その輸入量は、世界輸出量の1/8も占めていることに驚く。

更に資料から、食品添加物や農薬使用量の増加をみる。農薬や添加物の増加の背景には、効率の良い食糧生産の考え方ときれいなものを求める消費者のニーズのあることを話す。そしてまた現代は、様々な加工食品の消費と、外食産業が増加するにつれ、栄養の偏りや過多による問題も生じている。ここで16ミリ「見なおそう食生活」を視聴し、戦後の食生活の変化についてノートにまとめてみる。

まとめながらある生徒は、学校近辺などでも栽培するハウスの苺に沢山の農薬が散布されていると聞き、「農薬や添加物の多い日本の食品を買うより、輸入食品を買う方が安くて安全ではないか」と言う。私は一瞬返答に窮し、授業展開のまずさを感じた。食糧自給の低下と農薬の衰退という大問題を、日常の食生活のあり方と結びつけて考えねばならない。それから、食品を選ぶ価値判断の能力を、どのように養ってゆけば良いのかという問題が、目まぐるしく頭の中を駆けめぐった。そこで二年前に受け持った土屋さんのレポート「低

農薬野菜をめざして」を私は紹介した。彼女の家は米と野菜を作る兼業農家だが、「安全な食べ物とは」という新聞記事を読んだのがきっかけでレポートを書く。

両親に聞いてなすやとうもろこし、米を作る時利用する農薬を調べる。特に米ができるまでに30種類もの薬品を使うのにショックを感じる。父親も名前のわからないものだらけで、ただ時期が来ると農協の人が指定する農薬をまくだけで、余り考えたことがないという。そして土屋さんは有機農法について調べる。その結果「色々とむずかしいこともあるかも知れないが、結局は誰にだってやろうとすればいくらだってできる」と感じ、父親に有機農法を勧めるが乗り気でない様子を書く。そこには日本の減反政策の反映があること、水田利用編成対策の重要であることに気づく。

また彼女はスーパーマーケットでアルバイトをした経験から、輸入果物も決して安全でないことを知り、安全な食品の確保のためには、有機農法がますます重要だと結んでいる。このレポートを紹介した後、生徒のノートを見ながら食べものの安全性については、放射能汚染も現実の問題の昨今、もっと深刻に取り組む必要性を感じる。また、日本型食生活が見直されている一方、食に関する考え方が多様化している今、食生活のあり方をどこにおいて授業をすすめるのが良いか大変悩んだ。

（静岡県立大仁高等学校）

『家庭科新時代』を読んで

淡 路 香

将来、家庭科教師を目指す私にとって、この『家庭科新時代』という本に出会えたことは、大きな力となりました。

というのは、私も、小学校・中学校・高校と一般的な家庭科の授業を受けてきましたが、やはり、家庭科というものは、他の教科に押され、一種の息抜きの時間でした。そんな教科の教師になるのか……という気持ちが心のどこかにあったのですが、この本を読んで、一気にふきとんでしまったのです。

大学に入り、家庭科を真剣に考え始めて三年目になります。が、一つ一つの専門科目の講義・実習を受けるに従い、私自身は、家庭科の大切さ、重要性を自分なりに実感してきました。ただ講義を聞くだけの教科とは違って生活に通じる点や、実習による自分の身につく実感など、この教科の奥深

さ、おもしろさを。

しかし、これは、私が大学に入って改めて家庭科を考え、研究してきた結果であるからです。それを、現代の子供たちと同じように考えさせ教えていくことが一体できるのだろうかという不安が大きく、そしてそんなことは不可能ではないかとさえ思っていました。

そこで出会ったこの本は、私に大きな希望を与えてくれたのです。多くの先生方の行なった実習・授業が、山程のつていますが、どれも、子供のことをよく考え、とても興味深い内容で、心をうつものがあります。全国の家庭科の先生方は、こんなにもいろいろ考え実際に授業を行ない、子供の心をつかんでいるんだな、私も、小・中学校時代に、こんな先生方とお会いできたらな、などと思いました。

私は、授業の中で、一七二ページからの吉田泰江先生の「米・小麦・なぜこの食べ方を」という所を分析しました。

ここでは、日本人の生活に昔から必要とされてきた、主食―米を通じて、でんぷんや、炊飯のことを学習させ、更に、

小麦を通じて粉のことや、調理実習まで発展させています。

私たちが習ってきた家庭科は、ただ授業で説明し、調理実習で楽しむことしか行わなかった記憶がありますが、この先生の授業は、たいくつな説明・講義だけでも、楽しむだけの調理実習だけでもなく、実験的に米の炊飯を行ったり、自分の家でよく作ってきただんご汁を作ったりして、ただ教科書を読み、実習するのではなく、自分独自の方法で、子供たちの注意をひきつけ、家庭科を行っていることは、すばらしく、将来、私も家庭科教師になった時は、是非とも参考にしたいと、強く思いました。

また、現在、大きな課題となっている、男女共修についても、これからの世の中、男も女も平等に仕事をもち、平等に家の中のことをしなければいけないと思います。だから、家庭科の男女共修も、実際に行われる必要は多分にあり、教師の方も、少し位大変でもやっていかなければならないと思います。

以上の様に、ほんの短い感想でしたが、この本は、これから家庭科教師になろうという私にとっては、とても大きく、夢のような話もありましたが、一つ一つ近づいていきたいと思っています。これからも、このような本と授業を、私たちに伝えてほしいと思います。

『家庭科新時代―Weからの提案―』の本を衣・食・家族・生活という分野にわけて研究発表をした際、私は家族・生活の分野を選んだ。家族関係について興味を持っていたから選択したのだが、先生にいただいた小学生の教科書を見ると、その分野については六年生の教科書にわずか十ページのついているだけであり、どんな授業になるのかと少々不安であった。

しかし、実際の教師の方々は、教科書という型にとらわれない、クリエイティブな授業を展開しているのだということが、この本を通してよくわかった。小学生には家族の歴史を、中学生には生いたちや幼児とのふれあいについて、高校生には男女の生き方や女性の性の問題と、子供の発達段階に応じた課題について授業を行っている。食や衣の分野がある程度決まった教材をふくらめながら展開しているのに対し、家族・家庭・生活の分野は教師の想像性と独自性によっている部分が多いと感じた。

私の研究発表したのは、「自立した男と女を」という見出しの中の小学六年生の「自分の名前のルーツから」という題材である。この内容は、自分の名前のおこりを調べ、次に古代

から現代までどのように人間が衣・食・住の生活を営んできたのか、その中で家族の關係はどうだったかを考えるということである。漢字の成り立ちという点では国語との、又古代から現代までの人間の衣食住の変化という点では社会との関連が深く、改めて家庭科というのは総合的な教科だと実感した。結婚制度をとりあげ、歴史的な面から男女間の差というものに注目し、それを学級の中の男女問題に進展させ、眞の男女平等を教えることもできた。そして、男性社会の中でくり返されてきた悲惨な戦争について教え、こうした危険な状態を回避することのできるものの一つに、戦闘には不利である女性の発想、家庭からの発想（やさしさ、いたわり、思いやりの気持ち）があることを提示している。家族という視点から、平和問題へと発展させた、この教師の心の豊かさを素晴らしいと思った。まとめとして、「昔の家族の生活」をグループごとに劇を作り発表したとあるが、これは小学校生活の中の良い思い出となり、中学に入ってから歴史の学習に多いに役立つと思う。

この家族・家庭・社会という分野は、描象的な題材であるので、具体的な例を用意する必要がある。しかし、家族の生いたちなどを調べることは、個人のプライバシーの問題とからみ、学級の中の信頼關係が充分にできあがっていないければ、難しい題材である。家族や自分の中の見つめたくない部



編集室からあなたに

◆7年目のWe, テーマ決定

(状況により変更することもあります)

- 4月号 なぜ行くのか、学校へ
- 5月号 学校一絶望？ 希望？
- 6月号 学校一今、親にできること
- 7月号 なぜ、家庭科にコンピュータ
- 8・9月号 コンピュータ、何をどう変える
- 10月号 食と環境といのち
- 11月号 いのちを医療に任せていいのか
- 12月号 マスコミと文化の変容
- 1月号 暮らしの論理を創る
- 2・3月号 上すべりの“国際化”

夏増刊号は読者参加号、テーマ・企画・編集にあなたのアイデア待っています。すぐにご連絡下さい。

冬増刊号は夏季フォーラム特集号

分にスポットをあてなければならないこともあり、子供にとっては苦しい授業になるかもしれないが、今までは守られる立場であった家庭の中の自分を、生いたちを調べることにより、一歩成長させることができた、と思った。小学校の高学年から高校生という、最も多感な時期に、一番身近な家庭というものを考え直すことにより、歴史を、社会を見つめることは大変重要なことだと思ふ。そんな点において、特にこの「自分の名前のルーツから」という題材は小学生だけでなく、中学生、高校生にも適した教材であると感じた。

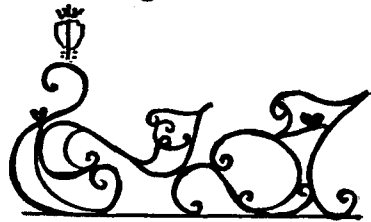
教育のなかの

心理学

「学習」まなぶ

ということ (4)

小沢 牧子



意欲をつくる心理学？

いま人間に求められている学びの姿、すなわち近代の知の姿は、記号を操作する能力を高めるところに中心目標がある。それが逆に人間を息苦しくさせている側面をもっていることを、前回まで三回にわたってみてきた。その矛盾は、学校という場のなかにもっとも大きくあらわれている。

個々べつべつな実物と、抽象的な記号のあいだを行ったりきたりしながら、時間をかけて自然に両者をつないでゆく「ゆとり」は、子どもたちに許されていない。いつも一方向に、いきなり数字へ文字へ記号へと進まなければならない。しかも課題は、たいへんなスピードで高度化してゆく。学ん

でいるという手ごたえや、学ぶということの意味を、子どもたちは見出すことができない。そのような「学び」は、子どもたちにとって抑圧的であり、よろこびをもたらすことが少ない。子どもたちが、わかることの感動に支えられて学びを求めるという、自然な学びのかたちは破壊されている。

そのようななかに、心理学の新しい学説が登場してきた。人間に学ぶべき意欲をおこさせる心理学、つまり「ヤル気の心理学」である。

内発的動機づけとは

文明の「高度化」が急速に果てしなく進み、学びは、人間の身体や生活性を捨てることによって成立するという、あやうい事態が起きている。学びの目標と中身が高度と量を増すなかで、乳幼児が「たのしく」記号学習ができるための技法までが開発されつつある。「むずかしいことでも、楽しく学ばせることができるのだ。決して抑圧を感じさせずに、自発的な意欲をもって」と、この心理学はいう。この考え方は、内発的動機づけの理論とよばれている。つまり内側からヤル気が生じてくることをめざす立場である。これに対して、子どもに賞罰を与えたり競争をさせたりして、ヤル気をもたせるような目にみえる方法を、外的動機づけと呼ぶ。こちらの方は、内発的動機づけの立場からは古くておくれっていて、抑圧

的だとみなされているようだ。

ひとつ具体例をあげよう。ムーアという心理学者が考案した、トーキング・タイプライターという文字学習のための装置がある。これは電動式タイプライターとテレビとが組み合わさったような機械で、いわば話をするタイプライターである。この機械を小さな部屋に置き、子どもに自由にいじらせる。指示や禁止は一切与えられない。子どもは好奇心いっぱいの生きものだから、すぐにこの装置をいじりはじめる。たとえばタイプライターのBのキーをたたくと、文字が画面に出、同時に「ビー」という声が出る。子どもは面白がってあれこれとためす。しかし子どもはまた飽きやすい。タイプをたたく回数が落ちてきて、子どもの飽きを示す。

すると学習の第二段階がはじまる。突然、画面の部分に文字が出、つづいてその発音がきこえる。同時にこの画面に出た文字を除いてすべてのキーが動かなくなる。子どもは「なんだ？」と思う。そして動くキーを探す。さぐりあてるとその文字が消え、別の文字が画面にあらわれる。

このゲームに飽きて子どもの活動が低下すると、また次の段階へとプログラムが進められる。こうして子どもは、夢中になって画面の文字と対応するキーを探して面白がっているうちに、文字や単語を学習してしまう。この話はたとえば、『知的好奇心』（波多野誼余夫・稲垣佳代子著、中公新書）の

なかに紹介されているが、「こうして子どもは、とくにだれかに何かを教えられているという意識なしに、ただトーキングタイプライターとゲームをしているうちに、文字を学習していくのである。……ある二歳七ヶ月の子どもは二ヵ月でアルファベットを全部おぼえてしまったという。三歳のときからこの『学習』をはじめた四歳児が、自分の思いのままに文章をつづり、流暢に本を読んで楽しむという光景は、まれなことではないのである」と、著書はのべている。

解放なのか、抑圧なのか

たのしく学べることは、いやいや学ばされるよりも、たしかにいいことだろう。しかも放っておけば文字記号には興味をもたない幼児にも、抵抗感なくしかも自発的に、そして効率的にそれを学ばせることができるのだから。

しかし、自分が自発的に持ったと思っている意欲が、実は見えざる他者の意図によって用意されているというその図式を、私たちは歓迎することができるのだろうか？ 私は、自分の背筋にかすかな戦慄をおぼえずにはいられないのだ。自分のものであると信じていた意欲が、実は暗に作られ持たされているのだとしたら、ひとの「主体性」とはいったい何なのだろう？ 心理学は果たして学びに解放をもたらしたのだろうか？

四国中学校で

仲野 暢子



地球市民として

十一月九日から四日間「第六回喫煙と健康世界会議」が東京で開かれた。この会議はふつうの学会とちがって医学、心理学、法律、教育などの学者専門家、行政担当者だけでなく、市民運動に関わっている人たちも正式メンバーとして大きな役割を果たしている。それは「たばこの害」について医学的な結論はもうWHOでとくに出ていて対策の段階だから、政府・民間・運動体を問わないで協力しなければ解決がとても難しいということのようだ。私たち「喫煙と健康女性会議」も、今年生まれただけのシンマイ・ジャクタイながら何かの形で参加したいと、それをひとつの励みにこの一年間かなり背伸びして身丈以上の活動に息せき切ってきた。

前回までの例だとWHOが後援し、主催国の政府が民間団体と共催するわけだけれど、今回日本では医学四団体が主催、

政府は後援の名前だけだった。今年四月に発表されるはずだった日本政府初の「たばこ白書」さえも、大蔵省やたばこ会社社のクレームで内容をかなり削られ、やっと会議の直前十月に出る始末だから、この機に何か対策を進めようとか、一般にPRする気配はまったく見えない。そこで全国に六〇あまりある禁煙・嫌煙市民団体がそれぞれ自前の「勝手連」方式で世界会議の宣伝と活動をしてきたしだいだった。

私たち女性会議はこの会期中の夜と日曜日の二回「女性・青少年・第三世界」の問題でワークショップを開こうと計画した。最初はだれもあまり信じてくれなかった。でも世界の流れから取り残されて私たちの生命・健康が粗末な扱いを受けているのに、このチャンスを生かさない法はない。参加費五万円かけてしかも英語だけしか通用しない世界会議に、ウィークデーの昼間四日間出られる人はそういないはずだ。私自身だって出来っこない……ならば自分たちでやろう……と準備を始めたものの、どこから手をつけていいやらわからない。わかつているかぎりの国内禁煙・嫌煙の市民団体にはネットワーク作りのためもあって手紙を送った。外国へも世界会議の参加者あてに手紙を出した……これがもう、名簿や団体名を手に入れるだけでもひと苦労で、発表要旨から選び出して百通近く出したものの、果たして相手がホンキで受け取ってくれるかとても不安だった。

ところが直前になって続々返事が集まってきた。国立なんとか研究所長とか、大学の主任教授とかとても肩書きある人たちだ。代表だから当然だけど……。タイヘンダツ。ホントニオキヤクサンキチャウ!……という感じで資料作りや通訳の用意にない知恵をシボリ抜き、「禁煙は愛です」「禁煙は思いやり」シールにＴシャツの禁煙グッズまで大慌てで作った。お客様を呼んでおいて本会議の様子を知らないのも失礼だから、学校をやりくりして会議に出席した。学年の同僚のカバーが涙が出るほどありがたかった。もちろん生徒たちにも一生懸命お願いしてOKをもらった。

さて世界会議の内容は新聞などでご覧のとおり、法的規制、非喫煙者の権利、医学的検証、女性と喫煙、青少年・子ども、宣伝広告、禁煙の援助、行政の責任、第三世界への多国籍企業の売り込みと先進国の責任など、専門分科会に分かれて討議があった。お互いの国のことをわがことのように真剣に聞き、英語のウマイヘタも団体の大小も関係なく討論し合っている姿が私には新鮮で暖かい感じだった。

全体会でまず確認されたのが、「何人も他人の煙を強制的に吸わせられない権利をもっている。病院、学校、スポーツ施設、交通機関ほか公共の場はもちろん、職場でも非喫煙者の権利は保障されるべきである」ということ。いちばん強調されたのが「世界中の子どもをたばこの害から守ろう」とい

うことだった。日本も含められるけれど、途上国への多国籍たばこ企業の売り込みは人類に対する挑戦だと受けとめられた。そこから国際的な禁煙教育その他の対策を促進する組織が作られ、政治的な対応も要求される。

ここで広告の問題がクローズアップされてくる。私たちのワークショップに参加してくれた延べ三〇人の外国からのゲストは、雑誌・新聞広告から看板その他、またスポーツやコンサートなどのイベントを通じて入り込む巧妙な広告の例をスライドをいっぱい持ち込んで、それぞれの対し方を語り合った。研究者、医師や弁護士をはじめ、いろいろな職業の人がいた。都合でワークショップに参加出来なかった人も、広い会議場で私ごときを捜し当てては「ミズ・ナカーノ、招待ありがとう。お昼に話し合いませんか」と大変親しく挨拶されて、ドギマギしてしまう。

ワークショップで熱気がわき上がった時アメリカ人たちから、「私たちは知らなかった。自分の国ではとくになくなくなったと思っていたこんなＴＶコママーシャルをよその国の子どもたちに見せてるなんて……。本当に恥ずかしいし腹立たしい。アメリカ大使館へ明日にでも抗議に行きたい」。世界会議の最後の日私たちは六か国二五人で総理官邸とアメリカ大使館へ抗議と要請に行った。宿題をいっぱい背負ったけれど、エネルギーはいっぱい注入された世界会議だった。

はなにつき

わかな

百人一首

藤尾知子

君がため春の野にいでて若菜つむ我が衣手に雪は降りつつ

光孝天皇

若菜とは食用として栽培したアオナに対して、食べられる野草の総称だった。七草がゆとしてその風習は残っているが、当時は正月初の子の日にセリ・ナズナ・秋大根・タビラコ・ハコベ・ハハコグサの七草を摘み糞(吸物)にして食べ、不老長寿を願った。

この歌は『古今和歌集』に「仁和のみかど(光孝天皇) みこにおましましける時に人にわかなたまひける御うた」の詞書のある歌である。光孝天皇は五十五歳の時、狂気乱行の陽成天皇のかわりとして突如帝位につき、在位四年で他界した人で、親王時代が長く、この歌がいつ作られたか見当もつかないが、ハンサムで頭が良くてセンスがいいとの批評で、生涯に皇子十九人皇女二十六人がいた事など考え合わせて読んでもみると、素直さや伸びやかな明るさからみて、若かった頃の作品であったと思われる。光孝天皇というまるで有名でない天皇ですらこれらの事実から、波乱万丈の人生が想像されるの



であるから、百人一首それぞれの歌人となると百冊の本以上になると思われるが、我が家の子供たちは一向おかまいなしで坊主めくりに興じている。

お正月には家族全員でカルタ取りをする。百人一首は似た言葉が多くて、そこが面白い所なのであるが、まぎらわしくてしかたがない。上の句が「あ」で始まる札が十六

枚、下の句の頭が「ひと」が九枚、「わが」が五枚、

「こひ」が三枚、最後まで確かめて取らないとお手付きになってしまう。捜しまわっている札を自分の取

った札の中にみつけるのは、ばつの悪いものである。

このカルタ取り、父がめつぼう強い。兄弟が多かったため、負けまいと、一枚札二枚札などといって覚えたそう

だ。一枚札というのは「むすめふさほせ」の七枚、上の句の音が一枚しかないものである。それを「むらさめのき

り」「すみのえのゆめ」と間をとばして結んでいく。原理は分かっているが百枚となるとなかなかである。かくして、私の毎年の一年の計の立て初めは、来年こそ百人一首をマスターしようということになってしまう。(カット・宮永由美子)

アメリカの共働き夫婦は今

④ ローラとハリーの場合 その2

國信潤子

ローラとハリーというアメリカ夫婦の事例研究の中で夫の側の葛藤がどのようなものなのかを今回はみてゆく。

〈夫―父であることと医者であることについて〉

ハリーは勤務医として朝七時三十分から夕方六時半頃まで勤めている。心理療法士、精神科医として次第に責任ある地位に上っている。職場での地位の上昇と責任の増大の反面、ハリーは二人の子供とのより密接な交流を望んでいる。しかし妻にあった大学教員としてと母としての役割の間の葛藤というものは夫の側にはない。それはなぜなのか、そしてそれはどういう夫の発言から察せられる

かを分析してみたい。

面接調査でこれに関連する部分を紹介してみよう。

――＊――＊――

Q Ⅱ 調査者（女）、R Ⅱ 調査対象者（ハリー・男）

Q Ⅱ 平日の一日の典型的なスケジュールはどうなっていますか。

R Ⅱ 目ざましを朝六時三十分にならして、いつもは妻は起きられないので僕が起きます。それがいつも口論の種ですね。

Q Ⅱ いつもですか？

R Ⅱ そう、いつも、子供が新生児の頃は違いましたけどね。後から妻が起きてきます。それが僕の気にさわることの一つですね。いつも僕が先に起きて家族の朝食を準備します。僕は朝、子供と少なくとも三十分から四十五分位は一緒にすごしたいのでも子供を起します。僕は妻の方が起こしてくれればいいと思うのに……。それで週一回位はいつもそのことでけんかをするんですね。それでも僕の方があきらめてしまったようなものです。

Q Ⅱ あきらめたというわけ？ そういうけんかのときはどうなりますか？

R Ⅱ そうしたいことではないけれど、まあ僕が受け入れるというかな……。妻は朝はやらないので。まあいいやと

思つてね。七時までには起きて下に行つて、朝食を用意して、子供たち二人をおこして、家族一緒に朝食をたべて三十分位子供の相手して七時四十五分には出勤します。

夕方六時すぎ頃という交通渋滞もひどくてね。きのうは夕方、夕食前に買物にいつて、帰宅したときは子供たちは庭で遊んでました。僕も一緒に遊んでやります。夕食はいつも家族全員で食べます。後片づけは妻と分担してやります。夕食の後ちよつと洗濯・掃除等もして、子供と遊んだりしますね。子供は八時には寝ます。

R—僕にとつて家族の方がキャリアより大切です。職業から得られるものは家族からのものより過渡的なものです。たとえ多少有名になつたにしても……。家族が何より大切です。仕事もやりがいのあることを見つけないと思ひますけど一日二十四時間かわりたくはない。——男たちはつらくて、孤独ですよ。人間関係の全てがより高い地位に昇つてゆくために犠牲にされて、そして男たちは何かを失つていくのですよ。

Q—そういう人々が友達にいますか。

R—いえ、患者たちです。僕はね、この二つをつなげられたら理想的だと思いますね。僕は家族をもつことと、キャリアをもつこと両方がうまく組み合わせられればと思ひますね。例えば、土曜日を子供とすごすか、それとも仕

事場にもどつて論文を書くか、迷うんですね、そして結局子供とすごすのです。それでよいと思つてます。この頃かわつたんです。子供のいないときはもつと猛烈に仕事してましたけどね。——でもね、私たちが妊娠したときはとてもいい年でした。妻は七カ月目からは寝ていましたから買物や料理とか全ての予定づくりも僕がしました。本当に僕たち二人の妊娠つていう感じでしたね、僕も完全に妊娠の一端を担つてましたね。双子が乳幼児だったときは毎日五時半には必ず帰宅してミルクやるのは僕の仕事だったし。それでいつも時間に追われて、イライラしました。それでも、その頃に、僕は、本当に大切なのは学術論文沢山書いて業績争ひすることではないのじゃないかと思ひはじめたわけです。

Q—親として子供に接するとき、あなたと妻との間に違いがあると思ひますか？

R—生物学的に？ 男と女に？ それはもちろんありますよ。Q—いえ親としてです。

R—子供が六カ月位の頃、妻が母乳やつていてね、妻は母乳をやるということで満足感を得たと思ひます。しかし私は全くそういうのは感じられない。ただ想像するだけですね。あの感覚は、そうだな、明らかに生物学的な違いが心理的違いもつくつていふと思つたし、これは僕には

どうしようもない。しかし、子供にミルクをやったりして世話をしていた自分でも驚いたのだけど僕の中にも母性愛というか、はぐくんでやる感覚というのがあることに気づいたんですよ。僕は、これは今まで見逃がされてきたことだと思えますね。そういう感覚は本当にあるのだし、もし夫もそういう気持ちをもってもいいと励まされればもっと引き出せるものだと思います。生物学的違いが余りに過大視されすぎますよ。――

――＊――＊――

父となったハリーの満足は彼の仕事への競争心をも方向転換させた。しかし、ここではふれていないが、一家の主なる家計の支え手であること、仕事上のよりよい口が紹介されたことなど、医者としての上昇志向が全くなくなっているわけではない。父となったことで、子供を育てる責任感や子供と接したいという欲求をもつようになっていく。しかし妻が抱いたようなアンビバレント（反対感情併存）な葛藤はない。家事をすること、特に朝食が全面的に夫の係りであることに不平をいいつもそれを受容している。朝・夕の子供との交流――世話をしたり遊んだり――を毎日不可欠の日程としている。特に精神科医であることもあり、現代社会での男役割や男らしさの神話にがんじがらめになり、精神のバランスをくずしている患者との接触から、男の孤独、上昇志向、競争心、と

いったものに見切りをつけている。そして仕事の業績と子供との接触を計りにかけ、子供と共にいることを選んでいる。しかし、子供と共にいることへの期待の内容が妻と微妙に違っている。子供と平日朝三十分、夕方二時間を共に過ごすこと、土・日子供と一緒にいることで父として、親として十分なことをしていけるし周囲にも自分程よき父はそういないはずだ、という満足さえ表明している。

「私たちの妊娠」と言うほど共感をもって妻の妊娠期間をすごしている。そして乳幼児を育てる中で男の心の中にある新しい生命をはぐくむ喜び、愛情のあることに気づき、その感情をもっと評価すべきだともいう。

しかし妻のもつ葛藤は夫の側には全くない。妻のいう「引き継ぎ」の役割、「切り替え、移行させ、管理する」役割を担い、予定を立て、手配をし、つなぎの係をしているのは心理的に妻であり、夫にはそうした心理的役割の存在が見えていない。そして妻が夫にいう具体的家事作業の遂行の役割増加について、「自分はできる限りのことをしている」「よき父だと思っている」疑問を抱かない。

この子育て役割に対する妻と夫の要求水準の違い、質の違いは何に起因しているかをさらに二人の生育歴にもふれて次号で考えてみたい。

〇〇こだま

〈「第三世界」をめぐる〉

◆かつて、いや、もう随分前になるが、昭和四十五年ごろ、小学館発行の「少年サンデー」「おとこ道」に、敗戦当時の在日朝鮮人・中国人を「第三国人」と呼び、新たな言葉を生み出した差別意識が問題になったことがある。

そのことを人権の問題とかかわって、同僚と議論したその翌日「We」11月号が届いた。「家族」どう変わる、どう変える」という私たち誰もがもつ共通課題がとりあげられていたので、すぐに読む気持になった。

読み進んでいると、深江誠子さんの「はつ

げん」に出あった。その発言の中に「第三世界の人たちの問題」というのがあった。私はそのことにひっかかってしまった。

深江さんは「私は、自分がだれかを無意識に踏みつけてはいないか」というすばらしい自己認識の、そしてきびしい自己内省の中で出されていたからである。

大学の非常勤講師をなさっていらつしやる人のホンネの意見に、ほれぼれとした気持ちで読んでいたのに、その表現に出あい、一瞬にしてどんよりとした心になってしまった。

発言の内容は、すばらしく私たちみんなが学ばなければならないことだ。だが、その「第三世界の人たち」という表現の背景にあるものを考えずにはいられなかったのです。そして、そのことと深江さんのすばらしい内容とのかかわりを考えずにはいられなかった。

深江さん、教えて下さい。「第三世界の人たち」とは、どこの国の人たちであるのかを。最近の新聞でも、時々みかけはしますが、実際の視座に立って「人権」を考えようとする冊子「We」の中で、適切かどうかということ。深江さん、私の発言お許し下さい。

(北九州市・前田 紀道)

◆前田さん

御意見ありがとうございます。差別について真剣に取りくんでおられる方たちのなかにこの「第三世界」という言葉が理解されていないことに驚きましたし、残念にも思いました。この言葉を一般化するためにこの言葉が生まれた経緯を書くことでお返事に代えたいと思います。

「第三世界」とは、大まかにはアジア、アフリカ、ラテンアメリカのことを指します(第一世界はソ連アメリカの大国、第二世界はその他の「先進」諸国)。

これらの国々は長く武力によって「先進」諸国に植民地化されていましたが、一九六〇年以後、政治的に独立した後も、相変わらず経済的支配されつづけ、低賃金でコキ使われ、国の資源も不等に奪われつづけています。モロン、日本の多くの大企業が「第三世界」に経済侵略をしていて、そのあぐどさは東南アジア、アフリカはつとに知られています(くわしくは拙著『女と男の経済学』社会評論社をお読み下さい)。

これらの国々はこれまで「後進国」とか「発展途上国」と呼ばれてきましたが、この言葉に「第三世界」の人たちが異議をとなえ始め

ました。富を「先進」国に奪われつつづけているのに、ガンバレば、「先進」国に仲間入りできるような幻想を抱かせるこのよび方は、「先進」諸国を中心にした歴史観にもとづくものであり、植民地政策をおおいかくすものでしかない、と。そして、意識的な人たちは、自分たちのことを「第三世界」あるいは「周辺部諸国」と総称するようになりました。つまり「第三世界」とは、経済侵略によって虐げられている人びとの怒りをこめた言葉なのです。「第三世界」は「おくれている」国でもなく、いずれ「先進」国になるための「発展途上」にある国でもなく、「先進」諸国に富をうばわれつつづけている国なのですから。

「後進国は永遠に後進国である」。彼らは皮肉をこめてそう言います。

モチロン「第三世界」では貧富の差はひどく、官僚たちのほとんどが、「先進」諸国にとりいって、自分たちだけ甘い汁を吸っています。だから私が「第三世界の人たち」という場合は、こうした官僚をのぞいた貧しい人たちのことを指しています。

私は彼らの怒りを少しでも共有したいと、あえて「第三世界」という言葉を使っています。「先進」国の先進に「」をつけている

のも、そのためです。

ともあれ、前田さんのおかげで、この言葉を説明する機会が与えられ感謝しています。ありがとうございます。

(奈良・深江誠子)

〈徒然草の解釈をめぐる〉

◆私は群馬県在住の小学校教諭ですが、注文があり筆をとりました。

「We」十一月号の「はなにつき」、下の段四行目に「大いにつかりして」とあります。

私の手もとには、小学館の「新版古語辞典」中田祝夫編、昭和五三年度版しかありませんでしたが、さっそく調べてみました。「ことさむ(事さむ)自マ下ニ 事の興趣がさめる。その場の空気がしらける。」とあり、徒然草の例文が載っています。

私の注文とは、「がつかりする」という言葉と「興ざめする」という言葉を使い分けしただけでしようかということです。

興醒Ⅱ興がさめること、興味がそがれるこ

と。興醒めるⅡ興味がうすらぐ。面白く思っていた気分が消える。しらける。

と、広辞苑821頁上から二段目にあります。

対象があり、全体の雰囲気を感じる言葉が「ことさむ」なのではないでしょうか。

がつかりⅡ①落胆するさま、げっそり ②疲れて気が抜けるさま、同上488頁上から二段目 この言葉からは対象の存在があまり浮かんできません。

なぜ私がこの一語にこだわるかと言いますと、十一月号、66頁下段の九行目から、兼好に対する独断と偏見を書きまくっている感があるからです。兼好はもつと「ヒト」を見ていたのではないのでしょうか。

藤尾さんがみかんを「ぞんぶんに賞味させていただき、最高に倅せな気分」になるのは自由ですが、兼好もそう思うというのは、独断と偏見だと、私は思います。

どんな解釈も自由であると思います。ですからあえて、私も私の独断と偏見を筆にしました。「We」に、こんな雑な解釈が載るのが妙に悲しくて!? 下段の九行目以降は、あけつづるげな言うより雑な、興を軽んじている解釈だと思いました。

(太田・三枝かづ江)

◆御意見どうもありがとうございました。

虫のよい御願いかも知れませんが、独断と偏見につきましては、あえて許していただきたいと思ひます。古典の解釈書なら立派な先生方の御本がいっぱいあります。ここでは私の読み方を見ていただいて、そしてもう一度自分で原文を読んでみようと思つていただければ、それで良いと思つてゐるからです。

私は吉田兼好という人が好きです。会えば面白い人だったと思ひます。彼は宗教人でありながら人が生まれながらに持つ欲(業)を完全に否定しえない人でした。むしろそれを人間味として愛しました。

さて、この山里に住む人のことなのですが、「少しことさめて」は三枝さんのおっしゃるとおり「興味をなくする」と言うことなのですが、この時の兼好の気持は「少し興味がさめてしまった」などという軽々しい気持ではなかったと思うのです。そこにある柵は、まさに人間の業の象徴だったからです。

彼はさきに申しましたように、人間を愛しすぎるということのために、業をすてきれない人でした。しかし、この庵の主は、形ばかりは完璧に世捨て人であつたにもかかわらず、その心は……。柵は百万言をもちいずして、

心の貧しさをかたりかけてゐるのです。

兼好も隠者だったのですが、人も通わぬ所に住んでいたのではないと思ひます。何の証拠もないのですが、徒然草が印刷技術のない時代から今日まで伝わつてゐるということ。誰ともつき合つてゐない生活だったら、この書物はとうの昔に朽ちてゐたと思われからです。

彼としては柵で囲つておきたいという気持はわかるが、この山の中、人も通わぬような

所で形ばかり悟りきつたように生活して、悟つてゐない人と同じ心が許せなかつた。だから「少しことさめて」などと書いてゐるが、悟りの道の遠さに愕然としたと思ひます。そこで彼のほんとうの気持として「がっかり」と書いたのです。そして、兼好は心ばえの美しさを人一倍喜んだ人だったので、あえてあのような結びにしました。

(千葉・藤尾知子)



編集室からあなたに

7年目のWeに向けて

59頁に7年目のWeのテーマを載せました。アンケートに寄せられた読者の方からの希望に編集室の問題意識を合わせてうみ出したものです。どうぞ、発言、こだま、Weになんでも言おう、私からあなたに etc、あなたのご意見をどんどんお寄せ下さい。

新連載は次の方たちです。乞うご期待！

＊新しい家庭科を創るために

小学校では／岩瀬志津子・北川好美

中学校では／常陸れい・根津公子

高等学校では／浅井由利子

＊海の輝く日／佐藤通雅

＊小学生たち／塚越敏雄

＊歴史の窓／岡 百合子

＊女、そして男／田川建三

＊不思議の国ニッポン／クレートン・ナフ

＊ひよっこクラブの探検家／佐多和子

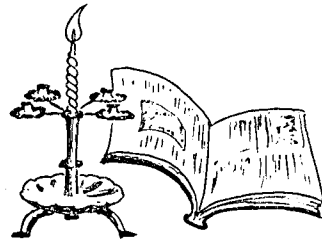
＊若さで勝負／井田朋子(前)・揖野良平(後)

＊よそおい／内山裕子

＊イキイキぐるうぶ／あなたの地域の、楽しくユニークでよくがんばっているグループ、ぜひお知らせ下さい。この欄からWeのネットワークを創りましょう！

今月の読書から

半田 たつ子



いのち明かり

岡部伊都子

◆いのち明かりを愛^{かな}しむ四十一の文章は、流麗でしなやか。しかし岡部氏のはがねのような精神の勁さを感じる。「まともな人たちが、社会の動きにもなお『人間らしい心』を失わず苦しんでいくくださるお蔭で、わたしはそしらぬ形で、人間めいた顔つきで生きているのではあるまいか『あらゆる表現が『生ききている今を未来へどう展開するか』に活かされるべき時代』と。(大和書房 一三〇〇円)

愛と誇りと―女・労働・文化

吉武輝子

◆シャープな論陣を張るフェミニストだが、吉屋信子に惹かれ、絵や舞を愛する著者のゆたかな個性が息づく書。とくに有吉佐和子氏の急逝にうらたえて、さようならではなく、「有吉さん、ありがとう」と、夜空に打ち上げた花火のような思い出の数々を記した一文は、吉武氏の人々があますところなく現れていて好き。

(未来社 一五〇〇円)

資料 女性史論争

古庄ゆき子編集／解説

◆70年代は、日本の女性史研究が飛躍的に前進した。前半は、井上清『日本女性史』、後半は、水田珠枝『女性解放思想の歩み』に端を発して展開された論争を、80年代はしっかりと受けつぎ発展させたのだろうか？ 重要な論文を収録、的確に整理し、明快な解説を付した労作。私たちは、この出版社からまた宝物を得た。

(下メス出版 三五〇〇円)

広場のコミュニケーションへ

加藤香恵子

◆一人一人の城から、家族や気の合う集団という蛸壺から、広場への道をめざそう。いま必要なことは「ねばならぬ私」と「したい私」の葛藤を見つめ、後者への抑圧を解き、それを受け入れながら、立場の違う人々との連帯の視座を育てること。シラケの時代を乗り越えるために、「広場のコミュニケーション」を生む力をつけよう……と。

(勁草書房 一九〇〇円)

とうちゃん軍事郵便

吉田貞治著

吉田とら／成子編

◆日中戦争下、吉田貞治氏が戦場から家族に送った軍事郵便は、二年間で一四七通！ 妻とらさんが書き写し、脳出血で倒れた後、長女成子さんがまとめ、一四七番から四十七年後、世に出た。かつて感動を呼んだ『かあちゃん』と11人の子どもの姉妹編。誠実・勤勉な父母と、元気で聡明な子どもたち。成子さんは高校家庭科教師を退職して母を介護し、手紙を整理した。(そして 二〇〇〇円)

大 We になんでも言おうなんでも聞こう



◆「Weは今危機的状況にあります」という「あなたに訴える」を読んで、じっとしていられない気持ちになり、ペンをとりました。

子供たちが幼く、学校も新設でたいへんな状況にいた時も、Weやその他、自分にとっての大切な情報源はいつも手にしたその日に、必死になって目を通しました。その日に取捨選択してでも、ざっと読んでしまわないと、日を経るともう日々の忙しさにまぎれてしまからです。

現在では、少しは時間の余裕をもてるようになりましたが、それでもWeは、帰宅して心せく思いで封を切り、まず、波、半田さんから私たちへのメッセージを読みます。それから食事の支度をしながらも、いじましくあい間に目次をチラチラと見て、そしてほとんどの場合、その日のうちに読んでしまいます。もちろん、じっくり読まなければいけないものは、また後日読み返しますけれど。

そして、学校の書棚に並べていて、生徒がグループ研究等で調べたりする時も、Weも必ず動員されます。背表紙にテーマが書いてあ

って、探しやすいです。そのような学習をする時、生徒たちがいつもとてもいいレポートを作って発表してくれるのは、ずいぶんとWeの記事に助けられているからでしょう。

それから、本の販売のお手伝いさせてもらいたいと思います。「女たちの教育改革提言」は、他教科の先生にも売りやすいと思いますし、私もとても感動したので、30冊送って下さい。婦人部で学習会をもとうと思います。わが校でも、皆毎日の仕事に追われて、なかなか展望をもって語り合うことなどできていません。でも、あの女たちの民教審のすばらしさを、皆に知ってもらいたいし、その各メンバーのエネルギーに触れて、私たちも奮い立たなければと思います。

◆十一月号は、ずっしりとこたえました。遠い昔だったはずの自分の子育て、家族・家庭観について、この夏以来、言い表せないほどの葛藤が続いていましたから。そして新聞小

(界・村上昌子)

説にはもう、何年もゴブサタしていた私が、干刈あがた氏の「黄色い髪」を毎朝待ちわびて、ゆさぶられるような想いで読んでいたところでしたから――。

巻頭詩「夕暮れのまち」は、まさに実感。そして私の夢。まだ好きなぬいものしてくらせる身分にはなっていないませんが、急いだって年相応にしか動けないのだし、不義理をしても、ムリはしなくなりました。

羽生さんは、なんてやさしい、あったかい言葉をいっぱい持ったかたでしょう。胸の中にことばの泉というか、マホウの壺でもお持ちのように、あったかい言葉が湧き出る女性なんだなあと思います。金子さんの切り絵とならんでいてWeのとびらを開けると、毎号心と和んで、しばらく見入り、何度も声に出して詩を読ませていただきます。夕暮れをたのしむ心境にようやくなれました。

「はなにつき」が続くといいなアと思います。この頃、粗い言葉や汚い音がひどく身にこたえます。大西さんが、少女向けのファッション雑誌をごらんになったら、もっとうんざり

なさるかもしれませんね。スケボウどころではないのですから。

(東京・武末久子)

◆先日、農文協の湯沢さんという方からお電話があり、Weの拙文を読んで下さっているとか。

上伊那農業高校の卒業生とのこと。私との方とは、入れちがいになっていて、いっしょに学校にいたことはなかったようですが、なつかしいと言われて、こちらが驚きました。あのような内容で書き出せば、教師仲間よりも、卒業生の方が昔をなつかしんで下さるいうことか……と思ったりしています。

なかなかゆっくりWeに目を通すことがなくて、われながらもどかしいのですけれど、十一月号は、目を通しているうちに、心が和んできました。忙しさのあまり、ささくれ立っているような自分に、じんわりと、慈雨のようなあたたかさを感じてきました。そういうやさしさがうれしい文が多かったように思います。

「やさしい彼^{おとこ}がいい、やさしい先生がいい、やさしい本がいい……」適当でいいかげんなやさしさはびこっていて、ほんとうのやさしさって何だろうということを考えています。

(長野・湯沢静江)

◆ほとんど全部読んでいるつもりですが、一

編一編が待ち遠しく、胸躍らせた初期の頃と違って、近ごろは一気に読まなくては読み通せなくなりそう、という強迫観念に駆られて……という気持もあります。

そして、マンネリだなあという偏見に、いつしかとらわれていたような気もします。というのは、アンケートに回答するために、87年十月号を改まった気持で読んでみると、例えば、これまでほとんど印象に残らなかった比留間先生の、自問自答に自省を繰り返しながらの授業も、味わい深いものがありました。すなわち、マンネリズムは誌面のせいなのか、読者の側の責任なのか、わからなくなりました。

武田秀夫さん、小沢牧子さんらのしーんと澄んだ張りつめた文章が、いつしか胸底にたまって、ふと心を揺さぶられることがしばしばあるのは、我ながら不思議です。村岡洋子さんの文章も、この系列につらなって印象に残りました。

読者の中の多数派である家庭科教師のために、すぐ実践に結びつく記事も大切だと思いますが、もう一つの柱として、今までの家庭科に決定的に欠けていたもの、ほとんど扱われてこなかったものなどを意識的に掘り起こし

て、「新しい家庭科」のイメージをぐんぐん拡げるような大冒険ができないかなと思います。例えば……と具体的に示せないのが弱いところですが、現実の教室、生徒、教材などの制約をとり払って、限りなく理想に近いイメージを繰り返し広げるような強烈な個性は現れないでしょうか……。

各号の特集や連載などについて、Weの会の会員などが、もっと活発に反響を寄せるようにし、同じテーマを二度、三度波状的に繰り返ししながら深化させてゆく、といったじっくり取り組む姿勢がWeにふさわしく、Weだからこそ可能ないき方かと思っています。

(東京・川名はつ子)

◆私にとってWeはとても魅力的です。毎月楽しみます。特に最近興味あるテーマが続いています。すぐまねできるような授業実践を求めている時期もありましたが、今はそれより自分自身がいろんなことに興味をもち、それについて深く考え、そこから自分なりの授業をつくっていききたいと思っています。だから授業の形ではなく、自分の心がゆさぶられるような何かに出会いたいと思うのです。ハウツウものは、確かに便利だけれど、浅い感じ。おもしろくありません。(大阪・浅井由利子)

ぼくのソーニヤ (3)

痔という病氣はむさくるしい男がかかるものと思いこんでいた私は、待合室の椅子に坐っている人の多くが女性であることに軽い驚きを覚えました。しかもみな細っそりとした美しい人です。そういう人が若い眉をひそめるようにして坐っています。いま入ってきた場違いな感じの高校生に好奇の目をむけることもなく、互いに話をかわすこともなく、それぞれが自分の身にとまった痛みの灯をじつと内側にみつめるといったふうにひっそり坐っています。疼くような痛みの感じが肛門病院の午前の待合室には遍満し、静かな明るいその空間を私はそっと横切って、隅の椅子に腰をおろしました。

昨日の少女は、その日も真白な看護服に身をつつんで静かに丁寧に患者を診察室に招き入れ、しばらくすると、「お大事に」と頭を下げて送り出します。しずしずととりおこなわれる清潔な儀式でも見るように、伏目がちな少女のそうした挙措をあきず眺めているうちに私の番がきました。少女は、他の患者に対するのと全く変わらない態度で私の名を呼び、Ⅱ医師は黙って手早く患部の処置をすませ、私はまた丁寧に診察室を送り出されました。腰のあたりが軽く

さっぱりしてよい気持です。

さて、思いがけずにめぐまれた自分だけの休日、これから何を讀んですごそうか。私は小さな本屋に寄り、文庫本の棚から「川のある下町の話」(川端康成)を選んで帰りました。痛みはほとんどありません。私は蒲団に横たわったまま、貧しいインタン生栗田義三と、やはり貧しく寄る辺のない少女ふさ子との純な交渉を描いたその小説を読みはじめましたが、通俗的な恋愛小説とみえたそれは、意外にも若い高校生の心をひりひりと刺激する危険な美しさを内に秘めていたのです。「川に流れる子」という序章の題からして不吉です。

冒頭、九州に接近する「アメリカの女の名のついた颱風」の余波を受け、増水した下町の川をひとりの子どもが流されていきます。飛びこんだ義三に助け上げられたその子、ふさ子の腹違いの弟は、しばらくの後に流感にかかってあっけなく「落鳥のようにすみやかな死」を死にますし、虚無的なキャバレーのボーイ達吉は、ふさ子を助けようと米兵と争った傷がもとで破傷風にかかり、激しく痙攣しつつ死んでいきます。通俗に馴れた私たち読者の予想を作者は冷酷にあっさり裏切り、私たちに「おい、それはないぜ」とつぶやかせながら小説は走る川の流れるように異様な速度ですすみ、ヒロインふさ子の発狂によって突然終結します。自分につながる人はみんな死んでしまう、自分が愛する人はみな死ぬ、そういうおもしろい目」の持ち主としてえがかれ、この小説はいわばそうした目をもってしまった少女が必然的にたどる痛々しい「目の悲劇」をえがいたものといった印象を讀む者に与えるのですが、読者は同時に、朝

鮮戦争当時の福生のキャバレーや下町のパチンコ屋を背景に展開される一見通俗的なこの小説の底に、作者川端康成のあの怖ろしいような目が光っているのを読後どうしたって意識せずにはいられませんか。美貌の青年に薄倖の少女、ニヒルな不良少年に知的な女医あるいは俠気に富んだ良家の令嬢、そういった危うい材料を作者は平然と手玉にとり、風俗小説、通俗小説に墮するすれすれのところでひりつくような美、反通俗の世界を実現してみせた――。

夕方が近づくとつれ、いままで忘れてかけていた痛みがまたおそってきます。しばらくはがまんしていてもそれはすぐに耐えがたいまでに高まってきて、私はとうとう枕元の痛み止めの薬に手を出す。と、ひりつくような痛みはすみやかにひき、からだのどこか奥の方に身をひそめて、じっと次の襲撃の機をうかがう。そんなふうに、自分の身の内にひそむ火のような痛みの芽を一方に意識しながら読んだ川端康成の作品は、独特な感銘を私に与えてくれました。

次の日もあくる日も午前の道を歩いて病院に行き、帰りは本屋に寄って文庫本を一冊買い求め、その日のうちに読みおえる。そうして日を送るうちにいつか私は、マシヌマロのような頬と淡い目の色をしたその少女がただの看護助手ではなくY医師の姪にあたること、事情があつてひとり親許からY医師の家にひきとられ病院の仕事を手伝いながら看護学校に通っていることなどを知りました。こうなると、若い高校生というのは仕方のないもので、耳にしたそんなうわさをもとに、勝手な光彩をその少女の身の上にとわせばじめました。

物静かな伏目がちなその少女は不幸な、だれかが守ってやらねばならない可憐な存在であると同時に、「自意識の病い」を病む地下

室の男、小ラスコーリニコフを胸に抱いて赤ん坊のようにあやす聖なる存在でなければならぬ。「罪と罰」のソーニヤ、「地下生活者の手記」のリーザが娼婦でありつつ同時に無垢なる存在であつたように、「川のある下町の話」のふさ子がパチンコ屋の店員からキャバレーのダンサーへと身を落としたがりますますその美しい目を「炎のような目」へと昇華させていったように、最も不幸な汚辱の極みまで行きついた女性こそがこえて聖性をそなえていき、そうした女性だけが男の傲慢を最終的に砕く。傲慢な己れの始末をつけかねている男はただだそうした女性によってしか救われないのだ。おれは可憐な少女を守り、その前にひざまづき、そのことによつて救われたい――。

痔疾にとらえられた十七歳の高校生が寢床のなかでひねりだしたこうした妄想を、いまの私は微苦笑をもつて想起するものですが、その一方で、こうした妄想が実は、私なりに、最も汚辱にまみれたものでありながら最も無垢なるものとしてイエスを「発見」していくことにつながつたことをおもうと、人間というものは、どんな道を通つても行くところまで行くものだあとという感慨もまたなかなか深いものがあるのです。いまの私はいわば「転びバテレン」で、まじめなキリスト者はこんな私の入信のしかたそのものにやがての「転び」は用意されていたと痛ましげに眉をひそめられるのでしよう。私にはいまもそのあたりのことはよくわかりません。

大学にはいってから一度だけ池袋の街で少女とすれちがいが、目礼して別れましたが、大学三年のとき再び痔を病みY医師を訪れたときは少女の姿はなく、笑わないチャップリン、Y医師だけがニヤツと笑つて私を迎えました。

〈19〉 東京女子大学の創設

——キリスト教基盤の自由闊達な高等教育——

秋枝蕭子

「天つ日は雲を開きぬ
天地は光をうたふ
神と人ふかく結びて
少女らの生くる喜び
胸うつはここ」

右は、開学当時の学生有志の共同作
詞による東京女子大学の校歌の第一節
である。そこには、解放された明るい
天地の光の中で、神への敬虔な思いと
ともに、いきいきと生きる少女たちの
胸の高鳴りが、躍動している。

時は大正デモクラシー高揚期の一九
一八年(大正七年)、プロテスタント系
キリスト教諸派が合同して、男子の大
学に匹敵する高度な教育を女子にも与
えようと、東京女子大学が創設された
のである。初代学長には、平和主義の国
際人として知られた新渡戸稲造が、初
代学監には、かねてから新渡戸自身が
矚目していた女子教育者、即ち武士道
精神とキリスト教精神に貫かれた誠実
・真摯な人格者の安井哲が選ばれた。

新渡戸は安井に対し「ここを学校にしてはいけない」と繰
り返し言つたと伝えられるが、その真意は、型にはまった管
理主義的学校にするなどということであつた。彼は翌大正八年
国際連盟事務次長に任ぜられてスイスに赴いたため、実質的
には短い学長期間ではあつたが、学生たちに親しく接し、学生
達も彼の登学を知るや、教室を飛び出して彼を囲んで談笑し、
しばしば学長の臨時講義が現出したという。「知識より見識、
学問より人格、人材より人物を養成する」ことを主眼に、自
由でのびのびした個性的な人間作りを意図したのである。

安井哲もまた、学生に自学自習の自律的習性をすすめ、ま
た広い良識を養うために、一流講師による課外講座をしばし
ば設けて、学外の有志婦人にも聴講を許し、さらに見学や施
設訪問などを行つて学生たちに広く社会と接触させるなど、
開かれた大学教育を志したのである。

開学当初の学則では予科一年、本科三年の上に二年の専修
科が置かれた。三年後の学則改正で、英語専攻部(予科一年、
本科三年)の他に、高等学部(三年)と大学部(文科、社会
科各二年)を設置して、男子に準ずる大学教育を志したので
あるが、文部省の認可が得られず、専門学校のワクにとどめ
られた。大正六年の臨時教育会議において、成瀬仁蔵の大学
令による女子大学設置要求が否決されたこととともに、文部
省の保守的姿勢は、大正期も変わらなかつたのである。



知らないことを知りたくて

(9)

蓮池悦子

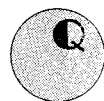
さて、一八九九(明治三十二)年生
まれのステさんの口の周りには入墨が
あります(六月号八十九ページの写真
参照)。前回は、死者の自家焼却風習が
一九〇四、五(明治三十七、八)年ま
で行われていたことを述べました。

もう一度、和人側のアイヌ政策をみ
てみると、幕府は一八五五(安政二)
年、再度蝦夷地を直轄地とし、アイヌ
に対しては従来の放任・非同化政策を
改め、教化保護・同化政策を取ります。
開拓使が設置されたのは一八六九(明
治二)年ですが、二年後の一八七二(明
治四)年には、開拓使布達(注一)布達
とは明治初期の行政命令のことで、後
の都道府県令などにあたります)によ
って、死者が出た際の自家焼却、女子
の入墨、男子の耳輪を禁止し、同時に
和人の言葉や文字の習得を奨励してい
ます。しかし、これは全く和人側の都
合なので、すくなくともノヤコ
タンのアイヌは承知しなかった、ある

いは独自性を主張していたともいえるでしょう。八歳のステ
さんが子守奉公先に覚えた日本語を、家に帰って使ったら叔
父さんたちにひどく叱られ、以来十九歳で結婚して子供が出
来るまで、自ら日本語を話すことはしなかったそうです。入
墨もいわば女子の成人の印ですから、十七、八歳までにコタ
ンの女たちによって施されたものでした。

ここで私たちが知らなければならぬのは、アイヌ社会が
和人社会によって壊されたという事実です。アイヌ社会の生
産基盤であった北海道の海岸部の漁場は、すでに江戸中期ま
でに場所請負人(六月号参照)によって独占され、コタンの働
き手である男の十代から四十代、女の十代から二十代が漁場
に労働力として徴用された結果、必然的にコタンの経済は停
滞崩壊し、外圧に対応する余力を持ちえなかったのです。

明治政府は、形式的には四民平等を整えましたが、貴族、
藩主、武士階級には皇族、華族、士族という戸籍を与えまし
た。この階級は近代日本社会の支配層を形成していったわけ
ですから、明治社会は実質的には幕藩体制の継続であったと
もいえるのです。平民の下に新平民を作り、一八七八(明治
十一)年には戸籍上のアイヌを旧土人と統一しました。これ
らの戸籍が一九四五(昭和二十)年の敗戦まで存続していた
ことは御承知のとおりです。そして北海道開拓政策とは、ア
イヌの生産基盤剝奪政策にはかならなかったのです。



私は私立女子高校二年生です。夏休みに同じ学校の生徒百十人がカナダで一週間のホームステイをしました。私は友人と二人であるお家に行ったのですが、自分自身があまりに英語が話せないのにびっくりしました。五年間くらいじめに勉強してきたのに、片言の単語しか出てきません。今まで勉強してきたのは何だったのかあの勉強は間違っているのではないのでしょうか。

夕方から夜の時間は家族や、友人、近所の人たちとおしゃべりやトランプをしました。ハイキングや、ボーリングもしました。みんなとても楽しんで生活していました。我が家でもそんなふうに生活しようと言っているのですが、父も母も姉も自分自身のすることに忙しそうで、家に帰ってきて、勉強をして、ちよつとテレビを見て、疲れて寝て、また朝出かけていくというくり返しです。もっとハッピーな生活がしたいのですが、日本ではどうしてできないのでしょうか。

(Y・のぞみ)



若い頃に、外国の家庭生活に触れるということ、は、すばらしい経験だったと思います。何よりもまず、「楽しかった」ということが、いいのです。人の心を深くゆり動かすもの、心に残るものを、若い内に、たくさん経験することは、何ものにも替え難い財産だと

思うのです。そして、日本の家庭生活との差異に気づいて、「どうしてなんだろう」と考える——疑問に思う種を植え付けられたことが又、いいのです。その種を、どうぞ、大切に育てて下さい。きっと、豊かに実るでしょう。その種を育みながら、自他に対する視方、考え方が深まっていくことでしょう。その線に沿って、本を読んだり、人の話を聞いたり、自分で考えをまとめて書いてみたり、友だちと話し合ったり、次から次へと拡がっていくこともあるでしょう。

日本的な暮らし方だけが、絶対ではないことを知るのも、あなたの今後の生き方に、大きな影響を与えていくでしょう。片言の英語しかできなかった口惜しさも、また、もっと、使える英語を勉強しようという姿勢にさせていくでしょうし、何事も、すべて、これから、といった感じがします。

日本の英語教育に関しても、いろいろな事が言われてきました。様々の要因があります。一言では言えない——ただ、まちがっているだけでは、片付けられないものが……それを考えるのも、また、もう一つの種になるかもしれません。

日本について、その長所も欠点も含めて、日本という国のそうならざるを得なかった歴史を、やがて、よく知りたいと思うようになった時、ほんの一週間のホームステイが、あなたの日本人としてのアイデンティティを確立するための、重要な契機になったといえるのだと思います。

新米教師の軌跡 その4

湯 沢 静 江

農業科の生徒には、養蚕実習もあった。古ぼけた木造二階建の養蚕室が校地の隅にあり、階下が養蚕用の部屋で、二階は生徒たちの合宿所になっていた。養蚕がはじまると、生徒たちは交替でそこへ泊りこみ、桑摘みや桑やりを授業の前後や合間にやっていた。自分のクラスの女生徒が当番で泊るときには、もの珍しさも加わって、私もよく一緒に泊まった。食事をどこで作る、寝具をどうしていたのか思い出せないが、キャンプ程度の簡単な食事を作り、毛布にくるまっていたのだらう。二階といっても、人が立って歩くのがやっとという低い天井に裸電球があるだけの物置のようなところだったが、誰も不服を言わなかった。最近の生徒のように、朝シャン（朝、シャンプーをすること）の習慣でもあれば、大変なことになる建物であった。

畜産科の生徒は、鶏、豚、牛などの家畜の世話をこまめにやり、休日でも

当番の生徒は登校して餌をやったり、畜舎の掃除をしていた。豚や牛の出産のときには、泊り込みの体制でやるという具合だった。そういう献身的な労働をいとわない生徒がいたという陰には、農場にいる先生方や助手も休日返上、泊りこみを当然としていた時代であった。

この地方の盆の行事は、ひと月おくれの八月十五日におこなわれるが、この時には仏前へ供える花を欠かすことができない。盆が近づくと、農園に咲いているオミナエシ、キキョウ、ダリヤ、百日草…などあれこれとりまぜて束にし、水を入れたバケツにいつぱいさして、何台かのリヤカーに積み込み、伊那市内を売り歩いた。「お盆の花はいかがですか」と言いながら格安の値段で売るのは、主に女生徒であった。考えてみれば、この仕事も夏休み中のことである。そんな作業を生徒がしているとき、佐藤先生はキキョウを見て、「花を早く咲かせる研究はすすんでいるが、遅く咲かせる研究も必要だ」とおっしゃったことがあった。露地栽培のキキョウは、旧盆の頃には盛りが過ぎてしまうのである。秋の花の代表なのに。その後、おそく咲かせる研究も花によつては行われているようだが（電照菊など）、盆花作りをしている生徒を見ながら、つぶやくようにおっしゃられた佐藤先生の卓見をあざやかに思い出すと同時に、この花売りのアイディアも先生だったのではないかと思うのである。

経済の目

生活サイドから見た経済

現代の貧困 ⑧

転換期にある職場

福島澄香

卒業して四年目の人たちのクラス会に呼ばれた。高校卒業後、すぐ就職した22〜23歳の若い仲間たちである。

高校時代はコロナと太めだったのに、いかにもほっそりとして気遣わしい人もいる。六十人余りを見てきた庶務係が二百人を担当するようになったり、今まで三人でやっていた仕事が一二人に減らされたりして仕事の量が増え、一日の就業時間が長くなったという。

日本人は働き過ぎ、労働時間を短縮すると前川レポートをはじめ、どの政府機関の報告

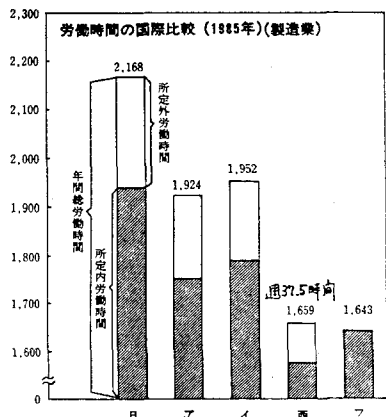
書も書いている。しかし現実には週休二日制になっても、労働時間は一日の就業時間が一時間延長され、改訂前の土曜日は午前中だったから、改訂後の週当たり労働時間は却って長くなった。その上、超勤があるので会社を出るのは九時頃になるという。土曜日の六時過ぎから始まったクラス会であったが、九時近くに駆け付けてくれた人、遅くて間に合わなかった人も数人いた。会社が倒産し、や々と就職した小会社は超勤しても超勤手当が支給されず、自発的無償労働にされている人もいる。一日八時間労働の原則は、八時間の睡眠と八時間の日常生活に必要な時間を確保するための最低の条件であり、一日八時間を越える状況が続けばストレスは加重し、健康の破壊が進行する。職場のME化によりテレビの画面と同じVDTを使用する時間が長くなって近視の度が進む、頭痛がする、肩がこるという話も聞いた(専門家の話では、一時間ごとに休憩を入れた一日四時間が限度という)。

また、職場の挨拶がわりに「早く結婚しなさい」などと言われることが多くなったと聞いている。労働省の「婦人労働の実情」によれば女性人口に占める未婚者の割合は年

齢的に高まり、61年度は20〜24歳83%、25〜29歳32%で、慌てることは全くないという話になった。そんな話の中で「ずーと仕事を続けるには、どうしたらいいと思う?」と何人かに聞かれた。「高校出で大した資格もない、一般事務では長く続けられないのではないか」という不安が語られた。また「若いうちに何か力をつけて置きたいと友達の間で話し合っているんだけど」とも言う。その真剣なまなざしは眩しく、私に明るい未来を感じさせてくれた。みんな遊ぶことも大好きだが、真面目で、能力もあり、精一杯働いている若い仲間たちである。家にもどって夕刊を見た

ら、多くの企業利益は黒字とあった。

労働時間の国際比較 (1985年)(製造業)



一人当たり
GDP (1986年) 16200 17200 9600 14700 12800 (ドル)
(備考) 1. EC及び各国資料、OECD資料、労働省推計
2. 1ドル=169円で計算。

政治の目

西暦2000年の北京オリンピック

湯川憲比古

八月の末から九月にかけての十日間、参議院議員の田英夫さんの訪中国のメンバーとして中国を訪問しました。中国の国家教育委員会（日本の文部省にあたる）の教育国際交流協会の招待によるもので、中国で日本語を学ぶ人たちに日本語の教材を送る活動の進展として、中国に日本語のビデオ教材を備えたLLセンターを設置すること、日中相互の留学生のための施設の拡充などの相談を行ったのですが、私は、田英夫さんに特にお願いをして、訪中国の正式提案の一つに、「西暦2000年の北京オリンピックのための国際協力委員会の構想」を入れてもらいました。

西暦2000年はちょうどオリンピックの年にあたり1990年のアジア大会の開催（これは決定済み）とともに、中国では北京でオリンピックを開きたい、という希望をもっています。もちろん、この北京オリンピックの開催はまだ決まったわけではなく（1995年ころに決まる？）、中国側の希望が表明されはじめた段階ですが、もし決まれば、それこそ全員参加のすばらしいオリンピックになる可能性があると思います。私は、この西暦2000年の北京オリンピックの成功のため

に、国際的な、とくに世界の自治体・民間団体を中心にした協力委員会をつくりたい、とかねてから考えていました（もともとオリンピックは都市が開催するものです）。

21世紀（あと13年でやってきます）の世界を考えたときに、中国が、めざましい経済発展をとげて、世界の発展途上の国々を援助する側にまわるか、あるいは、中国の経済が停滞して、経済援助を受ける側にとどまるかは、21世紀の世界の様相を左右するくらい大きな問題だと思います。この、世界史にとって重要な意義をもつ中国の経済発展と、日本および世界の国々の中国への経済協力の中間目標としては、西暦2000年の北京オリンピックは最適ではないかと思えます。その上に、できれば私は、中国が20世紀後半の欧米および日本の工業文明の悪い面を後追いつることなく（中国では、原子力発電がまさに今から本格的に展開されようとしており、公害・環境破壊などもこれからの問題です）、21世紀のあるべき文明のモデルを見すえた経済発展や社会形成がなされるよう期待し、そのために、できる限りの貢献をしたいと思っています。

ひよっこクラブのコックさん

4. しろくまちゃんホットケーキ

○佐多和子



「安易に電化製品に飛びつくまい」「ボタン一つで“チン”なんて生活はしたくない」といまいめてはいるものの、共同保育をしていると「やっぱり便利」と感謝するものもあるものです。その代表がホットプレート。ひよっこに集まる子どもたちにとって、ホットプレートは安全に“焼く”ことができ、その変化をじっと見ていられる大事な器具であり、おかげで料理のレパートリーはぐっと広がりました。ホットケーキ・目玉焼き・ウインナ焼き・お好み焼き・やきそば等、まさに「なんでもこい」の心境です。

料理にとりかかるその前に『しろくまちゃんのほっとけーき』（わかやまけん・こぐま社）を読み聞かせすれば、子どもはすぐに“しろくまちゃん”になります。各自のボールに粉を入れてもらい、自分で卵を割り、牛乳を入れて泡立て器でかき混ぜれば、絵本通りに「だれか ぼーるをおさえて」と声をあげ、笑いあいます。「あつ、つながつちゃった」「プツプツ焼けてきたよ」「うまくひっくりかえしたよ」「失敗しちゃった」と騒ぎつつ、大きなホットケーキを焼く子、小さいのをたくさん作る子、いろいろです。料理

のあとは、子ども同士の会話も弾み、おなかいっぱい食べたあとに残りのホットケーキを大切に帰ります。

新入り四歳児の翔ちゃん、ひよっこに入ってから初めてホットプレートを使いました。ホットケーキを焼いたあとは、「おばちゃん、またホットケーキを作ろうよ」と言います。みんなで野菜を刻んでお好み焼きを作った次の日には、なかなか昼食の仕度にとりかからぬ母親に「俺、お好み焼きを作るんだ」と宣言し、野菜を切り始めたのです。

おばちゃんたちがうれしくなるほど、新鮮な感激を味わっているらしき翔ちゃんを見ると、何ができる・できないと騒ぐより、心豊かに物事に対応できるしなやかさこそ大切なことではないかと考えさせられます。

ホットプレートの話にもどしましょう。ホットプレートは、幼児の料理作りにとっても便利なものだけど、それでも、やっぱり四、五歳児には、本物の火（？）を扱わせたくないので。ガスレンジの上にフライパンをのせて、踏み台につけて目玉焼きやらウインナを焼いてみました。その緊張感もまた格別なものです。

◇ キャンサー

今回は、Cancer＝癌について書きたいと思う。

日本人は、ガンというとすぐ「悲惨な死」に結びつけてしまつて、ひどく怖いもののように感じてしまうようだ。今や、珍しい病気でもないのに、やたらヒソヒソとやっている。確かに病気は何でも怖い。が癌に限っては、必要以上にこわがっているような気がする。アメリカ人だつて、別にキャンサーを声高に語っているわけではないが、日本人よりはずっと気楽に口に出していた。なにせ、アメリカ中キャンサーだらけといった感じで、あつちにもこつちにも患者さんがいるのだ。Hおじいさんは皮膚、Mちゃんは目の奥、元校長先生は血液（つまり白血病）、O氏は胃、といった具合である。

彼らはよほど重症にならない限り

平素と同じ日常生活を続けようとする。ある時、O氏が胃を切除つて入院した。そのうちお見舞いに、と思いつつ彼の家の前を通つたら、庭先で「Hi」なんてご本人様から声をかけられ、ギョツとしてしまった。術後三日目なのに……。これからは通院治療で、あと一週間もしたら、ちゃんと仕事もやる、というのだ。考えてみれば、どこに出かけるにも車はフカフカクッションのオートマチック車で、どんなにノロノロ走つてたつて、どこかの国みたいにクラクションなどならされないし、病院のベッドも自分のベッドも同じ位に清潔なのだらうし、とにかく自宅にいて、普通の生活をしながらの治療で、何の不都合もなさそうだ。子供の場合も、同様である。五歳のMちゃんは左目を摘出、義眼が出来るまで、片目のままでもちゃんと学校に來ていた。D君は二年生で白血病に

日本その目その目



大西麻里子

かかってしまったのだが、退院後は副作用で丸坊主になってしまった頭に帽子をかぶり、皆と一緒に学校に來て勉強していた。何回か、入退院をくり返して、家のベッドに寝ていることが多くなつてからは、先生が週に何度か、彼の家を訪れて勉強を教え、たまに学校に來られる時には母親につきそわれ、校内で最も雑菌が少ないと思われる部屋に、クラス全員が移動し、「Welcome D君」などという絵が張られている所で、数時間を過す、といったこともあった。万事、こんな風である。

キャンサーの人の本当の気持ちというのには、私にはわからない。しかし、こんなにもおおぜいの「明るい患者」たちを見ていると、癌なんて盲腸炎ぐらいにしか思えなくなるから不思議だ。ジャーナリストの千葉さんがガンにかかつて後、アメリカに行かれたのは幸せだったと思う。

買っておけば役に立つと思う

5. 既刊の中で印象に残ったテーマや文章は (55名回答)

〈テーマ〉で数が多かったもの
「制服」着る, 着せらせる (87・7月号)
学校給食で論争しよう (87・6月号)
「原発」知らなくていいのか

(87・8, 9月号)

性に関するもの (85・4月号/86・7月号)
土と水 (85・12月号/86・2, 3月号)
女性一世界を変え得るか (87・4月号)
先生は悩んでいる (87・4月号)
女たちの教育改革提言 (87夏増刊)
家族, その人間関係 (85・6月号)
夏季フォーラム記録 (84増85~86冬増)

他

〈印象に残った文章〉では, 30余名の方々のお名前と文章が寄せられておりますが, 紙面の都合で省略します。

6. 今後取り上げてほしいテーマ, 拡充してほしい欄は (55名回答)

〈取り上げてほしいテーマ〉

・教育問題 (12)

校則, 体罰, 登校拒否, 不登校, 帰国子女, 高校中退, 夜間中学等の問題, 生涯教育
臨教審の答申と教育の行方, 「6, 3, 3制」
学習指導要領改訂について
各国の教育制度比較等, 開発教育

・家庭科教育 (12)

授業の実践記録, 男女共修の実践例
教課審, 高校長会, 学会など, 家庭科に関する資料を全文, 各県の実態
教材研究, 視聴覚教材, 情報処理等
学校全体の動きの中で, 家庭科授業をドキュメントで

・くらし 衣食住 (10)

いのち, 性教育, 人工授精, 男女産み分け, 妊娠中絶
消費者教育 冠婚葬祭
住環境, 環境問題とライフスタイル, 自然とのかかわり, まちづくり, 食生活, 農業, 食品の安全性
暮らしの論理, 生活創造への道, 生活文化

・社会 政治 (9)

政治, 参政権, 農業問題, 人口問題, 南北問題, 食糧問題と飽食, 社会福祉, 障害者問題, 指紋押捺
平和, 反戦, 平和コラムの常設
労働組合の現状
政策をわかりやすく情報提供して

・家族 家庭 (6)

戸籍の問題(私生子差別, 扶養控除差別)
老人, 老後, 女性が働き続けるには
家事分担, 子どものくらし, 男性サラリーマンの実態と家族, 保育園と子ども

・その他

ノンフィクション, マスコミの退廃文化
一家言を持つ第一人者の登場を
都議, 国会議員の連載
フォーラムやゼミナールに取り上げるテーマを数か月前から誌上で討論し, 共通の知識を養う

〈拡充してほしい欄〉

- ・発言, 読者参加のページ
- ・学習の主人公たち, 生徒側の発言
- ・本の紹介
- ・家庭科外の教師の発言
- ・政治の目, 経済の目
- ・新しい家庭科を創るために
- ・"知らなきヤソン" 最新情報
- ・「十字路」記事のその後も

〈その他〉

- ・読者の反響を誌上で2度, 3度波状的に繰り返しながら深化させていく, といった読者の側の積極的な参加を
- ・今のWeは「そうね, そうね」と確認し合い, うなずき合っておしまいになる危険性をはらんでいる。異論・反論を常に外部から取り込んで検証してみる必要も
- ・基幹産業で働く労働者やその家族は, 複雑で深刻な状況に置かれているが, 家庭科をとらえる視点が, 社会の基本的なところにさしこまれていけば, もっと広がり厚みを増すと思う。読んでいても誌面と気持ちが交わりあえないことが多い

読者の皆さん、ありがとうございました

—アンケート結果報告—

10月号でお願いしたハガキによるアンケート、11月中旬までに71名の方から回答が寄せられました。ご協力ありがとうございました。

ハガキという制約されたスペースにもかかわらず、小さな字でビッシリと詰めて書いていただいたり、このスペースではとてもと、別便でお手紙を下さったりという方もいらっしゃって、回答数は少なかったのですが、内容は濃く、ご厚意にあふれるお言葉が印象に残りました。多岐にわたってありましたみな様のご意見を、これだけのスペースで集約するのは無謀のようですが、一つの傾向として、お読みとり下さい。

●回答者のプロフィール（回答者71名）

＜年齢＞		＜職業＞		＜教員の内訳＞	
20代	9	教 員	37	小	5
30代	27	主 婦	12	中	7
40代	17	公務員	7	高	14
50代	14	自由業	5	大	5
60代	3	会社員	7	その他	6
70代	1	学 生	1	家庭科	12
		無 職	1		
		その他	1		

- ・具象的な表紙が好き
- ・写真、絵がもう少し入り読みやすく
- ・グラビアなど絵で見るページを
- ・大学ノートの大きさと、活字も大きく、新スタイルでイメージ一新を
- ・特集タイトルを大きくし、号ごとの特色を
- ・「男性化→中性化」、ヤング化へ全面モデルチェンジを
- ・活字ぎっしりのわずかな余白に見出しやカットを押し込んであるのは、チマチマしてダサイ印象（それがまた素人っぽくて、あたたかみを感じさせもするが）

1. Weを購読されたきっかけは（70名回答）

- ①新聞・雑誌の紹介記事を読んで 8
- ②広告を見て 0
- ③ウイ書房からの案内の手紙で 10
- ④見本誌を見て 1
- ⑤書店で見て 2
- ⑥「家庭科教育」の読者だったので 21
- ⑦友人・知人などにすすめられて 22
- ⑧その他（創刊を知って、娘にすすめられて、半田氏の講演で、他） 6

2. デザイン・体裁は（66名回答）

- ①よい 35
 - ・薄くて軽いので、持ち歩き、保存に便利
 - ・表紙の絵がステキ
 - ・表紙が毎年変わってよい
 - ・他の雑誌がますますカラフルになっていく中で、Weの存在を際立たせる
- ②普通 23
 - ・表紙が抽象的で難解
- ③改善すべきだ 8
 - ・表紙に個性を。花森時代の「暮らしの手帖」のように

3. よく読まれる方に：何をまっ先に読まれますか（61名回答 複数回答）

- ①ほとんど全部 29
- ②特集テーマ 19
- ③新しい家庭科を創るために 9
- ④発言 2
- ⑤連載（巻頭詩、読書つれづれ草、We 6の相談室、教育のなかの心理学、近代日本女子教育史、ひよっこクラブのcockさん、経済の目 他）
- ⑥その他（うしろから読む、情報、11波、編集室から）

4. あまり読まない方に：それはなぜですか（5名回答）

- ・忙しい、2ヶ月遅れでやっと目を通す
- ・電車の中などで読もうと思い、持ち歩いてばかり
- ・初めに見て、夏休みなどにまとめて、もう一度見なおす
- ・今は「つん読」、すぐに読めなくても

自我に目ざめたころ、友達がくだらないことに笑いころげるのが不思議だった。私にはいつもどっかと居すわった問いがあつて、手を焼いていた。命より尊いものは？ 神は果たして実在するの？ そんな問いが、頭とハートをぐるぐる循環していた。この問いをどこかにひょいと預けて、笑いの輪に入ることではできなかった。少しさみしかったけれど。

私は、私の問いを共有できる人を激しく求めた。私にとって「幸せ」とは、問いを共有できる人とめぐり合うことだった。その「幸せ」に酔っていて、とんでもない思い違いであつたことを知った時は、打ちのめされた。ズタズタに傷ついた。少女のころから、今まで、それは全然変わっていない。

周囲とのくい違いに苦しんだ時、私は自分をごまかし、妥協してそこをすり抜けようとはしなかった。自分を貫ける場を探した。卒業を待たず、女学校四年修了で女子大に進んだのも、高校家庭科教師をやめて、「家庭科教育」の編集者になつたのも、そのためだ。

ひとりよがりかもしれない。間違っているかもしれない。せめて、あの人の人の意見を聞き、本を読み、行つて省み、をくり返しながら、「問い」そのものを鍛えようとした。幸い雑誌の編集者は、自分の「問い」をテーマに掲げることができた。「問い」を明確にする中で、私は家庭科の男女共修運動に飛び込んだ。

運動の深みにはまり込んだことが原因で、「家庭科教育」の編集長を下ろされた時、正直に言えば、私はちょっと休みたかつた。ただ、家庭科の転換期にあつて、正確な情報を先生方にお届けする責任を、果たさなければ

サンス

半田たつ子



ならない、と思つていた。ポケットマネーで個人通信を出していらつしやるあの方この方のように——。しかし、大勢の方たちの「雑誌を出せ」との熱い声を身に浴びて、ほんとうに怖かつたけれど、ウイ書房を創立、雑誌を創刊した。単行本を六冊世に送つた。

「生き馬の目を抜く東京」で、出版事業をすることを、亡くなられた尾藤操先生は、大変に心配され、信頼する「神様」にうかがいを立てられた。「難問が二つある。その一つがお金」と言われたと、長い手紙を下さつた。私は感謝しながらも、人間のあるところ、常にその二つが難問でしよう、と、ご託宣を軽くみていた。ご託宣はやはり正しかった。正しいから「神様」が信頼されるのだろうけれど。

A いま、本は読むものではなく、引くものだそうよ。研究論文をまとめるにも、おもしろい映画ないかなあ、と情報誌繰るのも。

B 漢字の多い活字びしりの頁は、読む前に敬遠されると思う。

ひらがなを多くして、絵や写真で内容がわかるようにしたら？

C 生活の中のドロドロした面を赤裸々に出した文には、親近感を持つな。整理して、構えて書いた文は、上澄みみたいでつまらないなあ。

A は、家庭科の男女共修運動をまとめる本について話し合っている時、B C は、Weをより多くの方に読んでいただくためのご意見を聞いている時、聞いた言葉だ。

D 読む、というのは、文字伝達の判断のみならず、心を読む、意味をさとの、状況を認識する、見ぬことを想像する。そして、これまでにできなかった理解を想像するということでありましょう——これは、岡部伊都子氏の言葉だ。私の読書の歓びもまったく同じ。でも、それ

は、もはや希少価値らしい。

あなたは家庭科を毛嫌いしているけれど、男女で学ぶにふさわしい家庭科を共に創りましょうよ。その営みこそが、あなたの苦しんでいる問題を解決するのだから。

私はこう確信し、やりたいことと、しなくてはならぬことをピタリ一致させて、六年間歩いてきた。ウイ書房は自宅の一室をはみ出し、廊下を階段下を、ガレージを占領、他の部屋をも侵し始めたが、家族は文句を言わない。お茶を沸かし、トイレを掃除し、休日返上の社長業でも、大勢の方と問いを共有できれば私は満足。

だから、Weを広げるためではあっても、私はABCになびきたくない。ところが、「We創刊の精神」といつたて、Weを支えている人たちも、当時とは変わってきている以上、いつまでもそれを持ち出すことは……という言葉を、別の場で聞いた。私を、奈落の底に突き落とす言葉だった。かつてひそかに思ったように、お金を伴わぬ行為として、個人情報誌を出すべきだったのかもしれない。Weを出したことは、周りの声に妥協したのだろうか？ 私らしくもなく。

しかし、Weについて話合った夜、会場を出てから、家庭科教師のIさんが「発言しにくかったのだが、家庭科が変わる今、動揺している家庭科教師を支え、励まし、正確な情報を送る雑誌であってほしい」と言われたことが、辛うじて私を支えた。電話を何本かいただいた。さらに「格調高い文章と内容、そしてある種の美意識に惹かれて私は読者になった」とのNさんの便りが、私をしっかりとさせた。Nさんは、内容の質だけは落とさないでと注文しながら、具体的な六つの提案を書いてこられた。

Weのルネッ

皮

さらにMさんの長い電話が私を感激させた。Weの現在・未来を、おつれあいと話し合い、それを伝えて下さったのだ。この雑誌は、この内容・スタイルを通すところに存在意義がある。半田さんが様々な声に惑わされ、あれこれといじったら、その途端にWeはつまらなくなるだろう。この雑誌がきみにとって大切なら、ごちやごちや言わず、半田さんが志を貫くことをこそ支持しなさい、とおつれあいは言われたそうだ。

雑誌が届くや否や、必ずていねいに読んで、丹念な感想を寄せて下さるHさんのお便りもうれしかった。Hさんも、ご夫君とWeを間において話し合われたのだという。干刈あがたさんの「黄色い髪」がのったりすれば、人がおもしろい、おもしろいと読むのではないか。でもそういうので人をおもしろがらせようとしてもダメ。メーンの特集と、家庭科の頁がおもしろくなくては、そこへ後半の読者参加や何やらがにぎわっていかなくては……。「欠点は、と考えるとまじめすぎるかということになるけれど、こればかりは、まじめでやってるんですから困りますし」では、思わず吹き出してしまった。そのゆとりが、私に生まれた。

Weはなぜ創刊されたのか。私はいつもここに立ち帰る。誌面構成や編集上のくふうは絶えずしなければならぬけれど、こんな雑誌があってもいい。Nさんはこう記す。「今や時代は、読みやすく、わかりやすく、使いやすく（すぐ役に立つ）、捨てやすく、値段も安い「雑誌が売れるようです」でも「購読数がミニコミ誌並に減るうとも、ページ数を半分にせざるをえなくなろうとも、内容の質だけは落としてほしくない」と。この言葉に応えたい。



〈We日本女子大の会〉

◆ここ目白の地、日本女子大学でも読書会がはじまりました。

第一回目は七月七日(火)、大学近くの喫茶店で教育実習の成果、感想等を報告しあいました。大学での講義で半田先生から新しい風を送られ送られ現場に向かったわけであつたが実際に授業を行う難しさだけで四苦八苦してしまつたのが本当の話。自分の考えていることを人に伝えるってすごく大変なことです。

第二回目は十月十五日(木)、今回は機会均等法をテーマに大学講内の喫茶室で、四時間におよぶ熱の入った意見交換が行われました。

といつても、当のテーマはどこへやら、話の論旨はあつちいったりこちちいったり。それで

も、男女が自分の選んだ道で思う存分やつていくことができる社会がいいな、という赤坂さんのセリフに深く背いてしまいました。

たつた三人で始まつた読書会。次には、三人のどんな個性をみることができるとか楽しみです。今回は十一月月上旬を予定しております。

(大澤和子)

〈We東久留米の会〉

◆十月十九日(月)滝山団地集会所にて

“We”読者会に参加すると、専業主婦でありながら他方面で活躍する会員の洪水のごとき発言に溺れ、数日は家事に身が入らない私。しかしテーマが男女均等法となると今回は我が家庭内の問題でもあり、会社人間の夫との生活に家庭って何だろうと悩み、諦めかけていた自分にも力が湧いて来た。自分の立つべき場を見失わないことが大切だと思う。

十月号から“新たな地平を”“ホンネの中の学生たち”を取り上げ、厳しい現状を痛感したが、働くことは生活の原点か、それとも手段なのかを問題にした。後者を唱える会員は、人間らしく自由に創造性豊かに暮らすため脱サラした夫と子供三人で、たとえ貧しくとも尊重し合つて生活している。「様々な問

題を背負っている社会で子育てをしなければならぬ。だからじつくり側で成長を見守りたい”これが我々のホンネではなかるうか。

就学時検診の実体からその是非論も出て、差別問題を重視する者、現状の教育の場では特殊学級も仕方ないと考える者もいた。人間誰でもが自由平等に生きられる社会に、大人も子供ももっと真剣に考えるべきだと思う。

「種々様々な生き方、考え方の社会だから、学生にもきめつけた教育は出来ない」との会員の言葉は心強かつた。

次回は十一月十四日(土)午後六時三〇分、滝山団地東集会所和室にて(誰でも参加できるように、日時変更しました)。

連絡先 西内みなみ 0424-73-0001

(大岩比佐枝)

〈We兵庫の会〉

◆第十九回は、“いいお産を考える”というテーマのこともあり、男性六名を含む初参加の方が多く、お腹の目立っていらつしやる三名も加えて、なかなか多彩な顔ぶれでした。

ビデオ「私のお産—ラマーズ法の紹介」を見、武田節子さん、松本直子さんの出産レポートがありました。

―武田節子さん―

一人目は病院で、二人目は助産所で出産。両方とも純粹に母子のためではなく、各々の施設の都合、さんさんな目に会ったのに、男は視覚的に知らない。三人目を産むにあたって、自宅で自然に産みたい。必ずお産に立ち合ってほしいと夫と約束をした。夫は上の子たちの世話、赤ちゃんと私の世話で大変だったが、気持ちのよい産み方をしたいの一心でたどりついた出産だった。赤ちゃんを側においてもらうお産はどんなに安心と満足を感じることが、自然のきびしさややさしさを感じ夫婦の関係も練れてきた。

―松本直子さん―

36歳でラマーズ法で産んだ。高年齢初産で神経をとがらせていた時、三森さんの本を読み、心洗われた。赤ちゃんは自分で生まれてくる。身も心も柔かになつて赤ちゃんを待つ心境になり、夫と共に講習を受けた。お産はその人の生き方の一貫として考える。出産の瞬間は、松本さんと夫君、助産婦・医師と五人で呼吸法の大合唱、感動的だったと。

◆十一月三日には、第二十回ウイ兵庫の会が神戸市立勤労会館で開かれました。参加者は大人二十名、子ども六名。

男女で学ぶ家庭科「性」のシリーズは前回で一応おき、ひき続いて今回から「子育て」シリーズになりました。その第一回はストリーテリング研究会の方々のおはなしを聞きながら「子どもたちは今」を考えようということで、会場の真中に西本さんご持参の大きな赤い敷物を敷き、子どもたちと星野さんがすわり、ほんとならローソクをたてるところだけどいといながら少し暗くして、先ずお話の国に入りました。講師はストリーテリング研究会の高雄さん、森山さん、野間さん、とYWCA絵本勉強会の川戸さんの四人。

・グリム童話「狼と七匹のこやぎ」

・創作童話「魔法使いのチョコレートケーキ」

・ねずみと猫の共ぐらし

を続けてやっていったとき、いつもの例会とはまたひと味違った雰囲気ではじめられました。西本史絵ちゃんも今日は仲間が多くて大いばり、いつになく大声でしゃいでした。「子育て」シリーズの第一弾を何にしよと相談したとき、「働き続けることと子育て」「保育所問題」など出てきましたが、これらは後に回してお話の国へ子どもと共に入ったことはよかったと思いました。

続いて自己紹介、特に四人の方々の日頃の

ボランティア活動をとおしての思うことを語っていただきました。最近の子どもが塾通いで、せっかくお話の会で仲良くなったのにだんだん減っていくことはさびしいといわれ、子どもに文化を伝えることを家庭がしなくてどうするのですかと激しい口調で訴えられました。四人とも子どもが好き、子どもの本はすばらしいと魅せられ、子どもの本しか読まないとおっしゃる。

昔話の中に人間の生きていく基本、モチーフがはめこまれている。この活動をとおして子どもと共に目に見えない世界を自分の中に作っていくといわれた野間さんのことばは、今、大人たちが忘れかけているものと呼びもどしてくれたような気がしました。

次回は少しハードな問題「子育てと女の生き方」来年一月十日(日)pm一時、神戸市立勤労会館で。

ひきつづき四時から来夏のWeフォーラムにむけて大阪兵庫合同会宿について有志がその場に残り話し合いました。十一月二十八日二十九日能勢で現場及び周辺の下見をかねて大いに話し合い楽しもうということになりました。大阪・兵庫の呼吸はピッタリのようにです。

(入江一恵)

私からあなたに

◆先日は、「新しい家庭科―We」のご案内状をいただき、まことにありがとうございました。私も、一番求めていた月刊誌に出会って感激していたのに、今日こそは読もう！ 読むための時を、何としても生み出そうと思いつつ、職場の雑役に追い回されて、とうとうツンドクというなさない状態で、次のが来ます。何が載っているのだろうと胸躍らせながら、気がついたら次号が来る、のくり返し。

上からの圧力に事実上屈しているみたいな自分。そんな時だからこそ「新しい家庭科―We」が大切なのに。北教組の皆さんに一度呼びかけて、一人でも二人でも読者を作ってほしい！

私たちの年代は意識は高いけど、文部省の新任研をがつり受けているので、この誌のすばらしさは全く受けつけてくれません。自分が時間をつくれないう弱い人間だからこそ、仲間がほしい。近いうちに時を作って申し込めます。私の周りには、私のように欲しいい

れど、大好きなんだけど、時間がないのでという仲間もいます。貴社も気を落とさず、ぜひがんばって下さい。お忙しい最中ほんとうにどうもありがとうございます。（江別市・奈良坂幸江）◆私は、奈良の私立高校で家庭科を教えています。今年で十二年目、家庭においては六歳と五歳の子どもの母親でもあります。夫の両親、姉などに支えられ、今まで勤めを続けることができました。

Weは、創刊より一年間講読し、その時は、なぜかあまりピンとこないで、そのままやめてしまいました。しかし、その後、林竹二先生、斉藤喜博先生などの著書にふれ、再びWeを読むことになりました。

現在は、日々の授業に悩み、生徒のことを心配し、その割に何もできていないという状態で過ごしていますが、この何年間かで、自分自身がずい分変わったと思います。それと共に、生徒に対する見方も変わってきました。特に児玉澄子先生の『若いいのちの像』

には教えられることが多く、何度もくり返し読ませていただいております。

私の勤める奈良県はそういう土地柄なのか教師も大変保守的で、研究会などでも、あたりさわりのない意見しか出せないような雰囲気が出来上がっているようです。もちろん、男女共修についても、中で意見を出すのは県立以外の教師です。

昨年十一月のWeの中で、「家庭科を変えるのは私」というアンケート調査の結果がありました。その中に、奈良県の人々の意見がありました。「奈良県でもWeの読者がおられたのか」と少し大げさですが、とてもうれしく思いました。ただ驚いたのはその方が匿名を希望されたということです。たぶん共修に反対の先生方がWeを読まれることはあまりないと思うのですが、匿名にされた。奈良というのはそういう所です。

先日、滋賀県で行われた近畿の研究大会で、共修はやりにくい、という意見が多く上がっていたそうです。男子生徒がおもしろ半分に参加するとか、実習はまだいいが、講義は一段とやりにくいか……。私の頭の中には、『男女で学ぶ新しい家庭科』や『食べ物を教える』などの中の、生き生きとした男の子の

姿がありましたので、なぜだろうと考えこんでしまいました。でも理由は、簡単でした。

教える側の教師が、生き生きとして「男子にも家庭科を」と取り組むのと、「なぜ、男子にまで家庭科をさせるのだろう」といやいややるのでは、生徒の態度が違うのもあたりまえのことです。

けれど、これから先、「上からおしつけられて男子にまで家庭科を教えるなんていやだ」というような意見もふえてくるような気がします。そのような声に負けないように、実践をかさね、事実をつくり出していかなければならないと思います。残念ながら我が校には、男子生徒はおりませんが、奈良県の片隅でがんばりたいと思います。

(奈良・中野正美)

◆先日、兼松左知子著『閉じられた履歴書』(朝日新聞社)を読み、性の問題はこの視点ですすめなければ、上すべりで中途半端なものに終わってしまうことを思い知らされました。「何が彼女たちをそうさせたか」、それは極端で特別な話ではなく、すべての女性にとっていつでもあり得る、日常的で普遍的な問題であり、かつ社会問題だと思うのです。

最後に兼松さんは「男女平等に視点をおい

た性教育と、新しい男女相互の幸福を目標とした性モラルの創造を急がねばならない」と書かれています。民教審の提言とも一致することであり、大変な感銘を持ちました。性教育と男女相互の関係の問題は、裏と表です。しかし、性教育を男女平等にやれば、表裏は一体になります。

私は、家庭科の授業で性の問題をとり上げたのですが、これは裏だけを見ていて、性別分業とか、夫(恒利)とのことをまた別に取上げ、その両方がうまくマッチしなかったことが、誤解(?)につながったのだと思います。しかし「男女相互」というのは、不特定多数の男を意味するのではなく、その人にとって、最も身近な異性との幸福な関係が、何事にもまして原点になるという、きわめて個別的なことです。

私も恒さんも、教育される過程では、そのようなことを何も考えることなく教員になってしまい、私がコトあるごとに恒さんをひっぱり出す悲劇(喜劇?)がここにあります。もし私が、そして恒さんが教育を受ける過程で、これらを学んでいたら、この問題をとりたてて言うことはなかったかもしれない。

もし、学校が、男女で性を学ぶことを考え

るような体制なら、学校はもっと「学校」らしいに違いない。

性を売った女たちの「そうさせた」背景を読んでいくと、彼女たちの両親の、家族の男と女としての関係が必ずクローズアップする。そのような男と女、父と母などに絶望し、それらを捨てた女性を受け入れる社会は、性による男女関係のゆがみが、更に拡大され、特に女性にとっていかに悲惨なものを、イヤというほど教えてくれる。このような事実を放っておいて、滅菌室での性の授業には、いかなる意味があるのか、考えてしまいます。

(三島・梶原公子)

◆春以来ボツボツやり始めておりました兵庫県における家庭科実践報告書(「泉」参照)がやっとできました。微々たる力ですが、二集、三集と続けたいと思っています。

来夏の関西でのフォーラムには、宝塚で「どんなでもない通信」を出している吉田明弘さん(ポランティアグループ)も参加して下さると、今日お手紙をいただきました。ミニコミ誌も送っていただきました。ほんとに今、こんな小さな集まり、運動が無数にあるのですね。心強いと思いました。

(明石・入江一恵)

泉

情報の頁

◆実践報告が出来ました◆

『男女共学をめざして』

家庭科実践報告 第一集』

兵庫県高教組家庭科検討委員会

・同教組婦人部は、'84年の運動方針に家庭科男女共学必修をとりあげ、以来この問題に取り組んできた。家庭科教育の目標は、
“家庭生活を科学的に認識し、自立して生きていく人間、生活の主権者としての力を育てる教科”とした。だからこそ、『家庭一般』を男女共学必修で学ばせたいという。内容は、家庭生活の設計・家族の実践／民主的な家族を考える女性史を中心として／実験実習・調査を通じた〈物資の購入と消費〉の学習の一展開／食品の安全性／廃油から石けんを作る／被服製作でT.パター

ンシャツを作ろう／「住宅平面図の作成」／地域調査により住宅問題についての意識を高める／「愛と性」から始める保育の授業／昭和六二年度一学期の三年選択家庭一般男子の実践報告。

・B5判 66頁 価三五〇円 送料一八〇円
申込先 同高教組 〒650神戸市中央区北長狭通5-2-10 ☎078-341-6745

◆'88年カレンダーが出来ました◆

・フィリピンの女たちとの連帯を願ってきたカラヤアン関西が、彼女たちを支持するためにカレンダーとグリーティングカードをつくった。カトリクス・ヴァン・ハウテンの六つの絵と、エストレリア・コンソラシオンの六つの詩が中心。絵は気高く、澄んで、詩はりりしく、力づけられる。

・カレンダー A3サイズ
・価 カレンダーとカード2枚で一〇〇〇円
・送料 一部二四〇円 二部三五〇円
・申込先 P.A.R.C (大橋・成子) 〒101千代田区神田神保町1-30 正光ビル402 ☎03-391-5901 カラヤアン関西事務局 (稲垣紀代) 〒617長岡京市開田4-6-501 ☎075-954-5018

◆「ABK留学生友の会」が発足しました◆

・(財)アジア学生文化協会及び、同協会「知友会」留学生と協力して、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の人々との交流をめざすために、種々の活動を行う。また保証人を引き受けたり、留学生の滞日中の便宜をはかったりする。

・費用 通信費年間一〇〇〇円 活動協力金 一〇一〇〇〇円 (任意)
・問合わせ先 同会(栖原) 〒113文京区本駒込2-12-13 アジア文化会館 ☎03-946-7565

◆小学生と性を考えるときにどうぞ◆

『子どもたちへ』

製作・監督 槇坪多鶴子
「生命誕生のすばらしさといのちの大切さを知り、“生きること”“死ぬこと”の本当の意味をつかみとってほしい、人を愛することの喜びを感じてほしい。」(メッセージより)

・カラー55分ドラマ・価 ビデオテープVHS・βII 一九八〇〇円・送料 三五〇円
・申込先 パオ 〒156世田谷区赤堤3-3-15 メンネット・バイン301号 ☎03-327-3150

十字路



●北海道 新聞一面買いとりの意見広告 (朝日

10/26)

「いらないっしょ! 原子力発電」の意見広告を出すために、新聞一面を買いとる一口、千円の募金に御協力を——との、意見広告全道よびかけ人連絡会の呼びかけが実を結び、26日、朝日新聞に一面広告が出た。「生命と未来のために泊原発建設、幌延高レベル放射性廃棄物施設計画、下北核燃料サイクル基地化の中止」と、「原子力発電の真実を知り、知らせる」運動を広めようと、強く訴えた。

(高橋芳恵)

●新潟 テレラーニング・システムを授業に 応用 (新潟日報10/12)

東京の講義をいながらキャッチする授業方法を新潟市のコンピュータ専門学校が導入した。電話回線を利用し、音声とブラウン管を通した文字図形情報を双方向でやりとりし

ながら学習する、いわばテレビ電話会議を教育に応用したテレラーニング・システム。地方の学校でも一流の講師による質の高い授業が受けられること、分らない点はその場で質問し、回答や指導が受けられる等の利点があることや、東京から講師を招くよりかなり経費の節減ができる。同校の後藤孝之課長は「試験的な段階ですが、有名な先生の講義を聴けるので学生の意気込みが違うようです」と話している。

(山口久子)

●奈良 社会人の知恵を学ぼう (朝日10/20)

県教委は、奈良商業高校など県立四校の商業科と食物科の教壇に、二期期から「職業人先生」二十一人を招いている。コンピュータ会社、電信電話会社、料理学校などさまざまな分野の人材を集め、各校とも三―五人を迎え、三年生を中心に二十時間近く授業してもらう。県教委は「技術の進歩の早さに職業教育が対応し切れていない。実践的な知識、体験を教育現場に取り入れ、生徒の意欲や進路指導のうえで、有意義だと思う。今年状況をみて、工業科などへ広げることも検討したい」と話す。

(乾 庸子)

◆京都 女性史にスポット (京都11/8)

京都市の橘女子大では、開学二十周年の記

念行事の一つとして、特別資料展「歴史における女性の役割―労働と生活そして解放」を開催、注目を集めた。女性解放運動の先駆けとなった平塚らいてうや岸田俊子らの遺品をはじめ、古代から近、現代に至るさまざまな資料を展示、学生らの研究展示発表もあって盛りだくさん。同大では、去る五十年に婦人問題論などの講座が設けられて以来、女性史研究に力を入れており、学外の研究者らも加えた女性史総合研究会は、この分野では先駆的な研究グループである。

(塚崎美和子)

●大阪 女子教育のあり方探る (毎日10/8)

豊中市教組はこのほど、組合員の関心の高い女子教育に焦点を当てた学習用教材誌「豊中の教育——特集・女子教育」を発行した。「私たちがすすめる女子教育とは」(林誠子・北条小教諭)「変えよう家庭科」(岩瀬志津子・泉丘小教諭)など同市内の市立小、中学校の女性教諭八人と一研究会のレポートを掲載。同書の中で教職員対象の意識調査の結果を示し、「女子教育は、男らしさや女らしさの特性を学習したり、マナーなどを学ぶものという誤解がまだある」と分析している。

(徳永美知子)

◆労基法政令改正「46時間労働」諮問◆

平井労相は10月28日、週法定労働時間を段階的に40時間に短縮する改正労働基準法（'88年4月1日施行）の政省令案要綱を中央労働基準審議会（会長、白井泰四郎法政大教授）に諮問した。

主な内容は①当面の週法定労働時間を4週5休に当たる46時間とする（現行48時間）②現在、46時間以下の週労働時間の実施率が75%未満の業種は3年間の猶予期間を置く③3ヵ月変形労働時間制導入時の1日の労働時間の上限を10時間、1週間では56時間とし、1週間に1日の休日を最低限確保する（連続労働日数は最高12日）④300人以下の事業所は3ヵ月平均の労働時間が44時間以下（300人以上は40時間以下）で変形労働時間を採用できる一など。

11月16日、同審議会は諮問案を「おおむね妥当」とする答申をまとめた。

（各紙、10・29、11・17付）

◆外務省が「外国人課」新設

外国人労働者の就労検討◆

わが国は芸能、特殊技能者などを除いて原則として外国人労働者の入国を認めていないことから、民間企業で活発化している外国人従業員を受け入れや、観光目的で入国し接客業や土木工事現場などで劣悪な条件のもとに違法就労していることが国際問題化している。従来、わが国の長期滞在者対策は在日韓国人対策に限られていたが、外務省は11月9日、来年度予算で領土移住部に「外国人課」を新設、長期滞在の外国人の就労問題などの総合的な検討を初めて着手する方針を固めた。

外国人労働者の受け入れは失業、賃金抑制をもたらすという意見も根強く、とりまともに曲折が予想されるといわれる。

（毎日、11・10付）

◆第6回喫煙と健康世界会議開催

たばこの害を追放しようと、56か国の研究者や市民グループの代表ら約660人が参加して東京で「第6回喫煙と健康世界会議」（結核予防会など主催、WHO＝世界保健機関、厚生省など後援）が11月9日～12日開催された。同世界会議は'67年ニューヨークが第1回。当初は、たばこと健康の関係

を解明する学術研究集会の色彩が強かったが、がんや心臓病との関連が「常識」となり、しだいに禁煙対策にウェートが移りつつある。今回は最終日、テレビによるたばこ広告の禁止など、11項目の禁煙対策を盛り込んだ勧告を採択して閉幕した。

（朝日、毎日、11・10、13付）

◆エイズ母子感染、初の確認

「予防検討委」を設置◆

エイズ（後天性免疫不全症候群）の母子感染と思われるケースが11月18日、わが国で初めて確認された。厚生省は今後、エイズの広まりにつれ母子感染防止対策が重要課題になると判断、同日「HIV（エイズウイルス）母子垂直感染予防対策検討会」（座長、坂元正一・東京女子医大母子医療センター所長）を設け、エイズキャリア（抗体陽性者）の女性に対する妊娠指導のあり方を検討、母子感染の防止対策について、キャリアや医療従事者への指導指針を作る。「産む権利」につながる問題で論議を呼ぶとされる。

母子感染は米国では大きな問題。10月5日現在、42354人の患者のうち、13歳以下の子供は584人。その8割近くの458人が母子感染。エイズキャリアや患者の出産では、赤ちゃんの2人に1人が感染し、発症率も高い。

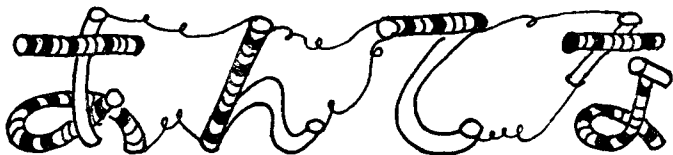
（毎日、11・19付）

◆里親、独身者もOK—厚生省制度改正◆

18歳未満の子供を親代わりに育てる里親制度が40年ぶりに改正された。厚生省は11月5日、新しい「里親等家庭養育運営要綱」を各都道府県知事、指定都市市長に通知、'88年1月1日から実施する。

主な改正点は①「里親は一部の篤志家」の理念を改め、児童を養育する能力があれば独身者でもよい。また、従来、「里子は原則として心身の健康な児童に限る」だが、里親に障害児養育に関する経験や知識があれば、障害児も里子になることが可能に。②里親の資質向上のため、毎年一度里親研修を行い、5年ごとに再認定する方式を導入。また、民法の改正で特別養子制度（11月号参照）が'88年1月施行のため、特別養子制度を養子縁組の一つとして定めることも決めた。

（朝日、毎日、11・6付）



◆高校社会科を「地歴」と「公民」に◆

文部省の教育課程審議会・高校分科会(座長・諸沢正道・国立科学博物館長＝元文部次官)は11月13日、'94年度から高校の教育内容を改定するのに併せ、「社会科」という教科を外し①現在の6つの科目を、世界史、日本史、地理のグループ…「地歴科」と現代社会、倫理、政治・経済のグループ…「公民科」という教科名で独立させる②世界史は全員必修の科目とする一ことを決めた。今年末の最終答申に織り込む。「国際社会に生きていくには、従来の社会科では応じきれない」というのが分離・再編の理由。

社会科は、戦前からの修身、国史(日本史)、地理が1945年、GHQ指令で停止されたあと、それらに代わって、「民主的社会人を育てる教科」として誕生。米国の先進例をモデルに教科書が作られ、小、中、高を通じた主要教科として根づいた。

しかし、歴史学者の中に歴史の独立を求める声が古くからあり、第13期中央教育審議会と臨時教育審議会がそれぞれ社会科の枠の見直しを求めていた。

これを受けた教課審では「30年かかって定着した社会科の枠組みを、教師や生徒らの要求がないのに変える必要はない」との現状維持論が支配的だったが、最近、世界史必修論が強く出され、社会科の枠外しにまで進んだもの。

教育現場での反発は強い。教師を中心に結成する全国歴史教育研究協議会は「国際理解教育は歴史教育だけでなく、社会科の科目を総合的に学習させる必要がある」と申し入れをした。(各紙、11・13、14付)

◆女子雇用、36万人の増—婦人労働白書◆

労働省は10月28日、'86年の女子労働者の雇用実態を分析した'86年版「婦人労働の実情」(婦人労働白書)をまとめた。

パートタイマーを含め女子雇用者は1584万人で、前年に比べ36万人、2.3%増加し、増加数、増加率とも男子(31万人、1.1%

増)を上回り、雇用者総数に占める女子の割合は36.2%になった。

女子パート労働者は352万人(前年比5.7%増)で、不況による雇用調整で低賃金のパートを雇った企業が多いため。

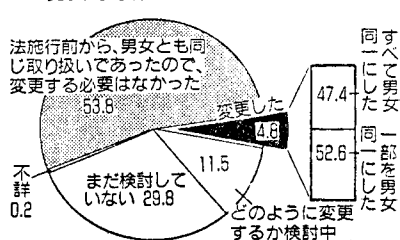
職種別では事務522万人、生産工程352万人、プログラマーなど専門的・技術職217万人の順。年齢別では中高齢化が進み35歳以上が全体の59%、勤続年数は平均7年で、4人に1人は10年以上。労働省は「結婚や出産で離職するケースが減ったようだ」と。(朝日、毎日、10・29付)

◆均等法施行後の女性雇用一労働省調査◆

労働省は10月25日、昨年4月の男女雇用機会均等法施行後の企業の対応を調べた'86年度「女子労働者の雇用管理に関する調査結果」を発表。施行後1年近い今年2月1日現在で、製造業、運輸・通信業、卸売・小売業、金融・保険業など9大産業のうち常用労働者30人以上の民間企業約7200社を対象に調査。女子に不利な募集・採用条件の解消などがすすんでいるが、職務配置の拡大や昇進昇格の均等な取り扱いについてはまだまだ(図参照)。女子活用の問題点(複数回答)としては「勤続年数が短い」51%、「育児などの家庭責任を考慮する必要がある」34%、「女子は企業が求める職業能力、意欲を備えていない」29%などが目立つ。

(朝日、毎日、10・26付)

昇進、昇格の機会、範囲の
男女均等化の状況(数字は%)



《表紙のことば—加藤由美子》

星はすばる…と清少納言。
そのプレアデス星団と、ヒヤ
デス星団が大神ゼウスの化身
牡牛の姿を夜空に形づくりま
す。エウロパ姫を背に走り去
るあの手際良さは、見習いた
くもあり、たくもなし…。で
もきれいな。新しい年。空。星。

★Weバックナンバーのご案内★

- (vol. 1) (vol. 2) (vol. 3) (品切れ)
(vol. 4) 5月号 結婚の風景
7月号 離婚と子どもたち
8・9月号 法律と私たち
85年夏増 働き続けるために
10月号 いま、熟く女の時代
11月号 みよりの秋に
12月号 人間と土を生かす
85年冬増 自分らしさをこそⅡ
1月号 くらしの文化を探る
2・3月号 水はいのちの泉
(vol. 5) 4月号 幼い日—大人は忘れ
てしまった
5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
6月号 “いじめ”—その根っこには何が？
7月号 性—小・中・高校生は何を思う？
86年夏増 こどもたちへ—大人になる旅
8・9月号 親—いま、学校に何ができる？
10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ
11月号 家庭科—どう変える、どう変わる
12月号 平和—今年を顧みる
86年冬増 自分らしさをこそⅢ
1月号 女性—世界を変え得るか
2・3月号 明日—人はみな成熟に向かって
(vol. 6) 4月号 先生は悩んでいる
5月号 情報化社会の光と影
6月号 学校給食で論争しよう
7月号 「制服」着る・着せられる
87年夏増 女たちの教育改革提言
8・9月号 「原発」知らなくていいのか
10月号 機会均等法、何が変わった？
11月号 「家族」どう変わる、どう変える？
12月号 「国際居住年」って何だった？
87年冬増 ゆたかさを紡ぐ

◆読者アンケートをまとめた感想です。「印象に残った文章は」には、創刊号までさかのぼり、数多くの方々のお名前と文章が上がり、「この文章に支えられて」の添書きもあり感銘いたしました。今回は「情報」をよく見る、「もっと情報を充実させて」というご意見が前回に比べて多く感じました。共修の家庭科に向けて実施のメドがつき、各地で具体的な形で動き始めたからでしょうか。(青木)

◆心理学の授業中、「充実した時は、その最中は短く、過ぎ去ってからは長く感じる」と聞いたように思う。私のこの一年は最中も、振り返っても短く感ずる。もつと後になれば、長く感じられるかな◆ご好評をいただいております金子静枝氏のきり絵「四季のうた」が絵はがきになりました。五枚一組三〇〇円、送料七〇円十組以上の場合送料は無料お友だちへのプレゼントにもどうぞ。(中野)

◆十一月二日、We秋の集いは、宮沢賢治の作品と賢治を紹介しながら語る武田秀夫さんの世界。「子供は、不思議を不思議と思う。だけれど大人は、なれた感覚で不思議を消してしまふ」ハッときせられる言葉でした◆購読継続の手続きはお済みでしょうか。年内にお納めの場合は値上げ前の六七〇〇円。お早目によりしくお願い致します。お振込みの時にお仲間をご紹介いただければ幸いです。(馬場)

◆読者の手になる夏増刊号のつくり手を申し出て下さった方三人。ありがとう。これこそWeのルネッサンスです。'87年は関西に何回かうかがいました。首都圏より、ずっと差別への感度がよく、エネルギーにみちていると思いました。'88年のフォーラムは大阪。準備が始まっています。これもWeのルネッサンスです。臨教審答申が自主編成を封じました。この挑戦にどう立ち向かうか。次号は新教育課程をどう考えるか、です。(半田)

新しい家庭科—

Vol. 6 No. 11 1987年12月20日発行
¥530 (年間購読料・増刊号含¥6700)
編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6-59867
印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。